SHIMO NA KA

下那珂遺跡

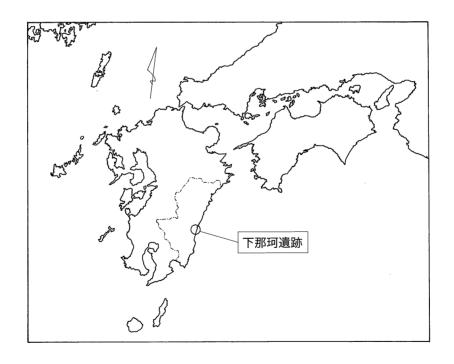
県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 4

SHIMO NA KA

下那珂遺跡

県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書





下那珂遺跡全景(南方の宮崎市街地をのぞむ)



①下那珂遺跡出土虺龍文鏡



②下那珂遺跡出土石庖丁

宮崎県教育委員会では、県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴い、宮崎県宮崎郡佐 土原町に所在する下那珂遺跡の発掘調査を行いました。

下那珂遺跡は、昭和41年に地元の高校生が完形の弥生土器の壺と滑石製紡錘車を発見したことが契機となり存在が周知されるようになった遺跡です。その後、昭和42年に「下那珂貝塚」として発掘調査が行われ、弥生時代後期から終末期にかけての遺構・遺物が多く発見されました。現在でも該期の宮崎平野部の歴史像を解明する上で重要な遺跡となっています。

今回の調査では、旧石器時代から弥生時代にかけての遺構・遺物が多く検出されました。 特に、弥生時代後期から終末期にかけての竪穴住居跡群は、総数で約120軒を数え、該期 の宮崎県下における最大規模の集落遺跡発見となりました。また、出土した遺物は、多量 の弥生土器をはじめ、虺龍文鏡・石庖丁・鉄器等、当時他地域との交流が盛んであったこ とを想定できる貴重な資料となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成16年3月

宮崎県埋蔵文化財センター 所長 米 良 弘 康

- 1. 本報告書は、宮崎県総合農業試験場本場果樹園造成工事に伴い、宮崎県教育委員会が行った下那珂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3. 発掘調査は二次に分けて行った。各次の調査期間は以下のとおりである。

(第 1 次) 平成11年度: 平成11年11月15日から平成12年3月31日まで

平成12年度: 平成12年 4月18日から平成12年5月31日まで

(第2次) 平成13年度:平成13年 8月20日から平成14年2月28日まで

- 4. 昭和42年に宮崎県教育委員会が本遺跡付近を調査し、出土遺物については『下那珂貝塚』 (宮崎県総合博物館1988『埋蔵文化財調査研究報告 II』)の報告書を刊行している。同敷地 内の遺跡ではあるが、今回報告分が「下那珂遺跡」、昭和42年度調査分が「下那珂貝塚」と 区別して呼称する。
- 5. 現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充・田中光・高橋誠・日高広人・安楽哲史・ 橋川敬子・古屋美樹・堀田孝博・松永幸寿が行い、空中写真撮影は(株)スカイサーベイ と(株)九州航空に委託した。その他、発掘調査期間中に多くの埋蔵文化財センター職員・ 調査員が遺構実測に加わった。実測者は以下のとおりである。 秋成雅博・阿部直人・今塩屋毅行・尾園賢二・加藤 学・金丸史絵・工藤基志・倉薗靖浩・

栗山正明・重留康宏・新町芳伸・菅付和樹・高木祐志・高橋浩子・丹 俊詞・都成 量・ 外山宏幸・永田和久・永野高行・福田泰典・藤木 聡・松尾有年・松本 茂・山下健一・

横田通久・渡部誠一郎・和田理啓(五十音順)

6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充が整理補助員の協力を得て行った。また、一部の遺物実測・トレースについては他の職員・調査員が行った。実測・トレース者は以下のとおりである。

旧石器時代遺物…松本茂・秋成雅博・藤木聡 / 石庖丁…古屋美樹 / 鉄器…丹俊詞

- 7. 本書で使用した第1図「下那珂遺跡の位置と周辺遺跡図」は国土地理院発行の5万分の1 図「宮崎北部」を,第2図「下那珂遺跡周辺図」は佐土原町役場発行の1千分の1図を基 に作成した。
- 8. 土層断面及び土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に 拠っているが、数字等記載のない色名はその限りではない。
- 9. 本書で使用した方位は、「N」と記載しているものは座標北(座標第 Π 系)であり、その他「M.N.」と記載しているものは磁北(磁針方位は西偏約 5.5°)である。レベルは海抜絶対高である。

10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

 S A ··· 竪穴住居跡
 S C ··· 土坑
 S E ··· 溝状遺構
 S I ··· 集石遺構

 S P ··· 炉穴

11. 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが、主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。

集石遺構・炉穴… 1 / 30 竪穴住居跡… 1 / 60 土坑… 1 / 20・1 / 60 磨製石鏃……… 2 / 3 石庖丁……… 1 / 3 敲石・石皿……… 1 / 3・1 / 6 それ以外の石器……… 1 / 2 弥生土器…… 1 / 4

- 12. 本書の執筆・編集は甲斐貴充が担当した。
- 13. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本 文 目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	· 7
第1節 調査の経過と概要	. 7
第2節 遺跡の基本層序	8
第3節 下那珂遺跡における土器分類	10
第4節 下那珂遺跡における石器分類と包含層出土石器	15
第5節 弥生時代の調査	47
(1)A区の調査	47
(2) C区の調査	111
(3) B区の調査	112
(4) D区の調査	128
(5) E・F区の調査	148
(6) その他の遺物	161
第6節 旧石器時代~縄文時代の調査	162
第Ⅲ章 まとめ	207
挿 図 目 次	
第1図 下那珂遺跡の位置と周辺遺跡図 (1/25,000)	4
第2図 下那珂遺跡周辺地形図 (1/2,000)	5
第3図 下那珂遺跡グリッド配置図及び弥生時代遺構検出状況図(1/1,200)	6
第4図 土層堆積状況図〈D区南壁〉 (1/100) ···································	9
第5図 包含層出土石器(1)〈磨製石鏃①〉(2/3)	
第6図 包含層出土石器(2) 〈磨製石鏃②・磨製石鏃未製品〉(2/3)	17
第7図 包含層出土石器(3)〈石庖丁①-IA類・IB類・IC類〉(1/3)	· 18
第8回 句会属出土石器(4) 〈石南丁②-ⅡA類・ⅡB類・ⅡC類〉 (1/3) ····································	. 20

第	9図	包含層出土石器(5) 〈石庖丁③一Ⅱ C類〉(1 / 3)	21
第	10図	包含層出土石器(6) 〈石庖丁④— Π C類〉 (1 \angle 3)	22
第	11図	包含層出土石器(7) 〈石庖丁⑤- II D類・III C類・IV類〉 (1/3) ······	23
第	12図	包含層出土石器(8) 〈石庖丁⑥-Ⅳ類・Ⅴ類〉 (1/3)	24
第	13図	包含層出土石器(9) 〈石庖丁⑦-V類〉 (1/3)	25
第	14図	包含層出土石器(10) 〈砥石①- I A類〉 (1/2)	27
第	15図	包含層出土石器(11) 〈砥石②- I B類〉 (1/2) ······	28
第	16図	包含層出土石器(12) 〈砥石③- I B類・II類〉 $(1/2)$	29
第	17図	包含層出土石器(13) 〈砥石④-Ⅱ類・ⅢA類〉 (1/2) ····································	31
第	18図	包含層出土石器(14) 〈砥石⑤-ⅢA類〉 (1/2)	32
第	19図	包含層出土石器(15) 〈砥石⑥-IIIA類・IIIB〉 (1/2) ······	33
第	20図	包含層出土石器(16) 〈砥石⑦-ⅢB類〉 (1/4)	34
第	21図	包含層出土石器(17) 〈削器①〉 (1/2)	34
第	22図	包含層出土石器(18) 〈削器②〉 (1/2)	35
第	23図	包含層出土石器(19) 〈蛤形剥片削器① $-$ I 類〉 (1 $/$ 2)	36
第	24図	包含層出土石器 (20) 〈蛤形剥片石器 $2-I$ 類〉 $(1/2)$	37
第	25図	包含層出土石器 (21) 〈蛤形剥片石器 $3-I$ 類・ II 類〉 $(1/2)$	38
第	26図	包含層出土石器(22) 〈蛤形剥片石器④ $- \Pi$ 類・ Π 類)($1 / 2$) ···································	39
第	27図	包含層出土石器(23) 〈礫器①〉 (1/2)	40
第	28図	包含層出土石器(24) 〈礫器②〉 (1/2)	41
第	29図	包含層出土石器 (25) 〈磨製石斧・打製石斧①〉 $(1/2)$	42
第	30図	包含層出土石器(26) 〈打製石斧②〉 (1/2)	43
第	31図	包含層出土石器(27) 〈打製石斧③〉 (1/2)	44
第	32図	包含層出土石器(28) 〈敲石・凹石・磨石・石皿・台石〉 (1/3・1/6)	45
第	33図	包含層出土石器(29) 〈剥片石器・礫器〉 (1/2)	46
第	34図	A・C区地形図及び遺構配置図 (1/1,000)	48
第	35図	45号竪穴住居跡 (SA45) 図 (1/60)	49
第	36図	45号竪穴住居跡 (SA45) 出土遺物図 (1/4・1/3) ····································	50
第	37図	43・44号竪穴住居跡 (SA43・44) 図 (1/60)	51
第	38図	44号竪穴住居跡 (SA44) 出土遺物図 (1/4・1/3・2/3)	52
第	39図	43号竪穴住居跡 (SA43) 出土遺物図 (1/4)	52
第	40図	21号竪穴住居跡 (SA21) 図 (1/60)	53
第	41図	21号竪穴住居跡 (SA21) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3)	54
第	42図	34・35・36・37・38・39号竪穴住居跡(SA34・35・36・37・38	
		・39) ・11号土坑 (S C11) 図 (1/60)	55
第	43図	35・36・37・38・39号竪穴住居跡 (SA35・36・37・38・39)	
		•11号十坑(S C 11)十層断面図(1 /60) ····································	56

第	44図	34・35号竪穴住居跡 (SA34・35) 出土遺物図 (1/4・1/2)	57
第	45図	37号竪穴住居跡 (SA37) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/6)	58
第	46図	38号竪穴住居跡 (SA38) 出土遺物図 (1/4)	58
第	47図	39号竪穴住居跡 (SA39) 出土遺物図 (1/4·1/2)	59
第	48図	40・41・42号竪穴住居跡 (SA40・41・42) 出土遺物図 (1/4・2/3)	60
第	49図	40·41·42号竪穴住居跡 (SA40·41·42) 図 (1/60) ····································	61
第	50図	63・64号竪穴住居跡 (SA63・64) ・15・21号土坑 (SC15・21) 図 (1/60)	62
第	51図	63号竪穴住居跡 (SA63) 出土遺物図 (1/2) ····································	63
第	52図	11号土坑 (S C 11) 出土遺物図 (1 / 4)	63
第	53図	15号土坑 (S C 15) 出土遺物図 (1 / 4)	63
第	54図	65号竪穴住居跡 (SA65) 出土遺物図 (1/4) ······	64
第	55図	65号竪穴住居跡 (SA65) 図 (1/60)	64
第	56図	84・85・86・87・88号竪穴住居跡 (SA84・85・86・87・88) 図 (1/60)	65
第	57図	86号竪穴住居跡 (SA86) 出土遺物図 (1/4) ······	66
第	58図	11·12·13号竪穴住居跡 (SA11·12·13) 図 (1/60) ·······	67
第	59図	11号竪穴住居跡 (SA11) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/2)	68
第	60図	12号竪穴住居跡 (SA12) 出土遺物図 ($1/4 \cdot 2/3$)	68
第	61図	13号竪穴住居跡(SA13)出土遺物図($1/4 \cdot 1/3$)	69
第	62図	1・2号竪穴住居跡 (SA1・2) 図 (1/60)	69
第	63図	2 号竪穴住居跡 (SA2) 出土遺物図 (1/4・1/2)	70
第	64図	3 号竪穴住居跡 (SA3) 図 (1/60) ·······	70
第	65図	9・10号竪穴住居跡 (SA9・10) 図 (1/60)・	
		9 号竪穴住居跡 (SA9) 出土遺物図 (1/2) ······	71
第	66図	66・67・68・69・70号竪穴住居跡(SA66・67・68・69・70)図(1/60)	73
第	67図	71・72・73・74・75・76・77・83号竪穴住居跡(SA71・72・73・	
		74・75・76・77・83)・16号土坑 (S C16) 図 (1 /60) ····································	75
第	68図	71・72・73・74・75・76・77・83号竪穴住居跡(SA71・72・73・	
		74・75・76・77・83) ・16号土坑 (SC16) 土層断面図 (1/60)	76
第	69図	77号竪穴住居跡 (SA77) 土層断面図 (1/60) ······	77
第	70図	18号竪穴住居跡 (SA18) 出土遺物図 (1/4) ······	77
第	71図	18・79・80・81・82号竪穴住居跡(SA18・79・80・81・82)・	
		14号土坑 (S C14) 図 (1 /60)	78
第	72図	14号土坑 (SC14) 出土遺物図 (1/4・1/3)	79
第	73図	14号竪穴住居跡 (SA14) 出土遺物図 (1/4) ······	80
第	74図	15号竪穴住居跡 (SA15) 出土遺物図 (1/4・1/2)	80
第	75図	14・15・16号竪穴住居跡(SA14・15・16)・4号土坑(SC4)図(1/60)	81
第	76図	4 号土坑 (S C 4) 出土遺物図 (1/4)	82

第 77図	19号竪穴任居跡 (SA19) 出土遺物図 (1/4) ··················· 82
第 78図	25・26号竪穴住居跡(SA25・26)出土遺物図(1/4) 83
第 79図	17・19・20・25・26号竪穴住居跡(SA17・19・20・25・26)図(1/60) 84
第 80図	25・26号竪穴住居跡(SA25・26)土層断面図(1/60) 85
第 81図	28号竪穴住居跡検出(SA28)出土遺物図(1/4・1/2) 85
第 82図	28・29号竪穴住居跡(SA28・29)・10号土坑(SC10)図(1/60) 86
第 83図	29号竪穴住居跡 (SA29) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/2) 87
第 84図	4 号竪穴住居跡(S A 4)出土遺物図(1 / 4) 87
第 85図	4・5号竪穴住居跡(SA4・5)図(1/60) 88
第 86図	5 号竪穴住居跡 (SA5) 出土遺物図 (1/4・1/2) 88
第 87図	30・31・32・33・46・50号竪穴住居跡(SA30・31・32・33・46・50)図(1/60)…90
第 88図	30・32・33号竪穴住居跡(SA30・32・33)出土遺物図(1/2・1/4・2/3)…91
第 89図	46号竪穴住居跡 (SA46) 出土遺物図 (1/4・1/3) 92
第 90図	46・47・48・49・59・60・62号竪穴住居跡(SA46・47・48・49・
	59·60·62)·1号溝状遺構(SE1)図(1/60)93
第 91図	47号竪穴住居跡 (SA47) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3) 94
第 92図	48号竪穴住居跡 (SA48) 出土遺物図 (1/4・1/3) 94
第 93図	7号竪穴住居跡(SA7)出土遺物図(1/4・1/2) 95
第 94図	6 ・ 7 ・ 8 ・ 55 ・ 60 ・ 61 ・ 62 号竪穴住居跡(SA6 ・ 7 ・ 8 ・ 55・
	60・61・62) ・3号(SC3) 土坑図 (1/60)96
第 95図	3 号土坑 (S C 3) 出土遺物図 (1 / 4) 97
第 96図	13号竪穴住居跡 (SA13) 出土遺物図 (2/3・1/2) 98
第 97図	51号竪穴住居跡 (SA51) 出土遺物図 (1/4) 99
第 98図	52号竪穴住居跡 (SA52) 出土遺物図 (1/4)
第 99図	51・52・53・54・56・89号竪穴住居跡(SA51・52・53・54・56・89)・
	2・9・17・18・19号土坑(SC2・9・17・18・19)図(1/60) 101
第100図	54号竪穴住居跡 (SA54) 出土遺物図 (1/4・2/3・1/3) 102
第101図	56号竪穴住居跡 (SA56) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/1) 103
第102図	9号土坑(SC9)出土遺物図(1/2・2/3) 104
第103図	57号竪穴住居跡 (SA57) 出土遺物図 (1/4・1/3)
第104図	57・58号竪穴住居跡(SA57・58)・
	1・12号土坑(SC1・12)図(1/60)
第105図	58号竪穴住居跡 (SA58) 出土遺物図 (1/4・2/3・1/3) 106
第106図	22号竪穴住居跡 (SA22) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3) 107
第107図	23号竪穴住居跡 (SA23) 出土遺物図 (1/4) ······ 107
第108図	22・23・24号竪穴住居跡(SA22・23・24)
	8・20号土坑 (SC8・20) 図 (1/60)

第109図	24号竪穴住居跡 (SA24) 出土遺物図 (1/4) ····································	109
第110図	27号竪穴住居跡 (SA27) 出土遺物図 (1/4・1/2)	110
第111図	27号竪穴住居跡 (SA27) 出土遺物図 (1/60) ····································	110
第112図	90号竪穴住居跡 (SA90) 図 (1/60) 及び出土遺物図 (2/3)	111
第113図	B区地形図及び遺構配置図 (1/250)	112
第114図	91号竪穴住居跡 (SA91) 図 (1/60)	113
第115図	91号竪穴住居跡 (SA91) 出土遺物図 (1/4・2/3・1/3)	114
第116図	92号竪穴住居跡 (SA92) 図 (1/60)	115
第117図	93・94号竪穴住居跡(SA93・94)図(1/60)	116
第118図	93号竪穴住居跡 (SA93) 出土遺物図① (1/4) ·······	116
第119図	93号竪穴住居跡 (SA93) 出土遺物図②(1/2・1/3・1/6)	117
第120図	95・96号竪穴住居跡 (SA95・96) 図(1/60)	117
第121図	95号竪穴住居跡 (SA95) 出土遺物図 (1/4・1/2・2/3・1/3)	118
第122図	96号竪穴住居跡 (SA96) 出土遺物図 (1/1・1/4・1/3)	119
第123図	97・98・99号竪穴住居跡(SA97・98・99)図(1/60)	121
第124図	97号竪穴住居跡 (SA97) 出土遺物図① (1/4・1/3)	121
第125図	97号竪穴住居跡 (SA97) 出土遺物図② (1/4) ·······	122
第126図	98号竪穴住居跡 (SA98) 出土遺物図 (1/4) ······	122
第127図	99号竪穴住居跡 (SA99) 出土遺物図 (1/4) ······	123
第128図	100号竪穴住居跡 (SA100) 出土遺物図 (1/4) ······	123
第129図	101号竪穴住居跡 (SA101) 出土遺物図 (1/4) ·······	124
第130図	102号竪穴住居跡 (SA102) 出土遺物図 (1/4)	124
第131図	22号土坑 (SC22) 図 (1/20) 及び出土遺物図 (1/4)	125
第132図	23・24号土坑 (SC23・24) 図(1/40)	125
第133図	23・24号土坑 (SC23・24) 出土遺物図 (1/4)	126
第134図	B区包含層出土遺物図① (1/4) ······	126
第135図	B区包含層出土遺物図②(1/4)	127
第136図	下那珂遺跡D区地形図及び遺構配置図(1/600)	128
第137図	103・104・105・106・107号竪穴住居跡	
	(SA103·104·105·106·107) 図 (1/60) ····································	130
第138図	103・107号竪穴住居跡(SA103・107)土層断面図(1/60)	131
第139図	103号竪穴住居跡 (SA103) 出土遺物図 (1/4・1/3)	131
第140図	104号竪穴住居跡 (SA104) 出土遺物図①(1/4・1/3)	132
第141図	104号竪穴住居跡 (SA104) 出土遺物図②(1/2・1/3)	133
第142図	105号竪穴住居跡 (SA105) 出土遺物図 (1/4・1/3)	133
第143図	106号竪穴住居跡 (SA106) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3)	134
第144図	107号竪穴住居跡 (SA107) 出土遺物図 (1/4・1/3)	135

第145図	108・109・110・111・112号竪穴住居跡	
	(SA108·109·110·111·112) 図 (1/60) ······	136
第146図	109号竪穴住居跡 (SA109) 出土遺物図 (1/4・1/3・2/3・1/2)	137
第147図	110号竪穴住居跡 (SA110) 出土遺物図 (1/4)	137
第148図	111号竪穴住居跡 (SA111) 出土遺物図 (1/4) ·······	138
第149図	112号竪穴住居跡 (SA112) 出土遺物図 (1/4)	138
第150図	113・114・115号竪穴住居跡(SA113・114・115)図(1/60)	139
第151図	114号竪穴住居跡 (SA114) 出土遺物図① (1/4) ·······	140
第152図	114号竪穴住居跡 (SA114) 出土遺物図② (1/4・1/2・1/3・2/3) …	141
第153図	115号竪穴住居跡 (SA115) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3・1/6)	142
第154図	25号土坑 (S C 25) 図 (1 / 40)	143
第155図	25号土坑 (SC25) 出土遺物図 (1/4・1/3)	144
第156図	D区包含層出土遺物図① (1/4)	146
第157図	D区包含層出土遺物図②(1/4)	147
第158図	E・F区遺構配置図(1/600)	148
第159図	116・117・118号竪穴住居跡 (SA116・117・118) 図 (1/60)	149
第160図	116号竪穴住居跡 (SA116) 出土遺物図 (1/4・1/2・2/3)	150
第161図	117号竪穴住居跡 (SA117) 出土遺物図① (1/4) ····································	151
第162図	117号竪穴住居跡 (SA117) 出土遺物図② (1/4) ······	152
第163図	119号竪穴住居跡 (SA119) 図 (1/60)	153
第164図	119号竪穴住居跡 (SA119) 出土遺物図 (1/4・1/3)	153
第165図	120号竪穴住居跡 (SA120) 図 (1/60)	154
第166図	120号竪穴住居跡 (SA120) 出土遺物図 (1/4)	154
第167図	26号土坑 (SC26) 図 (1/40) 及び出土遺物図 (1/4)	155
第168図	27・28・29号土坑 (SC27・28・29) 図 (1/40) 及び出土遺物図 (1/4)	156
第169図	30号土坑 (S C 30) 出土遺物図 (1 / 4)	157
第170図	F区包含層出土遺物図①(1/4)	158
第171図	F区包含層出土遺物図②(1/4)	159
第172図	F区包含層出土遺物図③(1/4)	160
第173図	遺構外出土鉄器・石製勾玉図(1/1・2/1)	161
第174図	縄文時代遺構配置図(1/1,500)	162
第175図	1号・2号集石遺構(SI1・2)(1/30)図	163
第176図	1号・2号・3号炉穴(SP1・2・3)図(1/30)	164
第177図	4号炉穴(SP4)(1/30)図	165
第178図	旧石器時代~縄文時代石器図①(2/3)	166
第179図	旧石器時代~縄文時代石器図②(2/3)	167
第180図	旧石器時代~縄文時代石器図③(1/2)	167

第181図	旧石器時代~縄文時代石器図④	(1	/2)	

168

表 目 次

第 1 表~第	3 表 下那珂遺跡検出竪穴住居跡及び土坑計測表
第 4 表~第	11表 下那珂遺跡出土石器計測表(1)~(8)
第12表~第3	8表 下那珂遺跡出土土器観察表(1)~(27)
	写 真 図 版 目 次
写真図版 1	下那珂遺跡遠景(南方宮崎市街地方向をのぞむ) 巻頭 1
写真図版 2	①下那珂遺跡出土虺龍文鏡/②下那珂遺跡出土石庖丁 卷頭 2
写真図版 3	55号竪穴住居跡 (S A 55) 出土遺物 ····· 97
写真図版4	3 号土坑 (S C 3) 出土遺物 ····· 98
写真図版 5	52号竪穴住居跡 (S A 52) 出土遺物① 100
写真図版 6	52号竪穴住居跡 (SA52) 出土遺物② 102
写真図版 7	下那珂遺跡遠景
写真図版 8	下那珂遺跡全景(A~C区:一次調査分) 216
写真図版 9	①A区全景/②B区全景 ····· 217
写真図版10	①A区竪穴住居跡検出状況(1) (南西部) / ······ 218
	②A区竪穴住居跡検出状況(2) (東部) /
	③A区竪穴住居跡検出状況(3)(北東部)/
	④A区竪穴住居跡検出状況(4) (北部)
写真図版11	①下那珂遺跡全景(D~F区:二次調査分)/
	②D区竪穴住居跡群/③SA103
写真図版12	①A区竪穴住居跡 (63·64号) /②A区竪穴住居跡 (19·25·26号) / ······ 220
	③A区竪穴住居跡 (41·42号) / ④A区竪穴住居跡 (17~19·25·26号) /
	⑤ A 区竪穴住居跡(18号)/⑥ A 区竪穴住居跡(34~39号)
写真図版13	①A区竪穴住居跡 (29号) / ②A区竪穴住居跡 (27号) / ······ 221
	③B区竪穴住居跡(93・94号)/④B区竪穴住居跡(91号)/
	⑤B区竪穴住居跡(95・96号)/⑥A区竪穴住居跡(34~39号)
写真図版14	①15号土坑/②B区竪穴住居跡 (97号) / ······ 222
	③ A 区竪穴住居跡(54・56号)/④ A 区竪穴住居跡(21号)/
	⑤ A 区 取 穴 住 足 跡 (51~54·56县) · 3 县 土 坊 / ⑥ S A 56 出 土 状 況

写真図版15 ① A 区竪穴住居跡 (6~8・55・60~61号) / …………………… 223

	②A区竪穴住居跡(11~13号)/③A区竪穴住居跡(5号)/④5号土坑/	
	⑤A区竪穴住居跡(43号)/⑥D区竪穴住居跡群	
写真図版16	①D区南側竪穴住居跡検出状況/②SA103内土坑/	224
	③D区竪穴住居跡(114·115号)/④25号土坑/	
	⑤D区南側谷地形埋没状況(1)/⑥D区南側谷地形埋没状況(2)	
写真図版17	①1号炉穴(SP1)/②2号炉穴(SP2)/③集石遺構(SI1)/	225
	④2号集石遺構(SI2)	
写真図版18	①包含層出土磨製石鏃(1)/②包含層出土磨製石鏃(2)/	226
	③包含層出土磨製石鏃(3)及び磨製石鏃未製品 /	
	④遺構出土磨製石鏃及び磨製石鏃未製品	
写真図版19	①包含層出土石庖丁(1) 〈 I A類・ I B類〉 /	227
	②包含層出土石庖丁(2) 〈IC類・IIA類〉	
写真図版20	①包含層出土石庖丁(3) 〈II A類・II B類・II C類〉/	228
	②包含層出土石庖丁(4) 〈II C類〉	
写真図版21	①包含層出土石庖丁(5) 〈II C類・II D類〉/	229
	②包含層出土石庖丁(6) 〈II D類〉	
写真図版22	①包含層出土石庖丁(7) 〈II D類・III C類・IV類〉/	230
	②包含層出土石庖丁(8) 〈IV類・V類〉	
写真図版23	①包含層出土石庖丁(9) 〈V類〉/②遺構出土石庖丁(1)	231
写真図版24	①遺構出土石庖丁(2)/②遺構出土石庖丁(3)	232
写真図版25	①包含層出土砥石(1) 〈 I A類〉 / ···································	233
	②包含層出土砥石(2)〈IA類・IB類〉/	
	③包含層出土砥石(3) 〈IB類・Ⅱ類〉/	
	④包含層出土砥石(4) 〈Ⅱ類・ⅢA類〉	
写真図版26	①包含層出土砥石(5) ⟨Ⅲ A類⟩ / ②包含層出土砥石(6) ⟨Ⅲ A類⟩ /	234
	③包含層出土砥石(7)〈ⅢA類・ⅢB類〉/④包含層出土砥石(8)〈ⅢB類〉	
写真図版27	①包含層出土削器/②包含層出土蛤形剥片石器(1) 〈 I 類〉/	235
	③包含層出土蛤形剥片石器(2)〈Ⅰ類・Ⅱ類〉/	
	④包含層出土蛤形剥片石器(3)〈Ⅱ類・Ⅲ類〉	
写真図版28	①包含層出土礫器/②包含層出土石斧(1)/③包含層出土石斧(2)/	236
	④包含層出土敲石(1)・石皿	
写真図版29	①包含層出土敲石(2)·磨石/②包含層出土台石/③A区遺構出土砥石/	237
	④A・B区遺構出土敲石・凹石/⑤A・B区遺構出土石器/	
	⑥D・F区遺構出土石器	
写真図版30	①SA45出土土器/②SA44出土土器(1)/③SA44出土土器(2)/ ····································	238
	④SA45出土土器(3)/⑤SA43出土土器/⑥SA21出土土器(1)/	
	⑦SA21出土土器(2)/⑧SA38出土土器/⑨SA39出土土器(1)/	

	⋓SA39出土土器(2)/⋓SA39出土土器(3)/⋓SA40出土土器
写真図版31	①SA41出土土器/②SC15出土土器/③SA86出土土器(1)/ 239
	④SA11・13・2出土土器/⑤SA18出土土器/⑥SC14出土土器/
	⑦SA15出土土器/⑧SC4出土土器/⑨SA25出土土器/
	⑩SA29出土土器(1)/⑪SA29出土土器(2)/⑫SA5出土土器(1)
写真図版32	①SA5出土土器(2)/②SA5出土土器(3)/③SA5出土土器(4)/ ·········· 240
	④SA33出土土器/⑤SA46出土土器/⑥SA47出土土器(1)/
	⑦SA48出土土器(1)/⑧SA48出土土器(2)/⑨SA7出土土器/
	⑩SA5出土土器(5)・SA21出土土器(3)/⑪SA47出土土器(2)
写真図版33	①SA51出土土器/②SA54出土土器(1)/③SA54出土土器(2)/ ······ 241
	④ S A 54出土土器 (3) / ⑤ S A 57出土土器 / ⑥ S A 22出土土器 (1) /
	⑦SA22出土土器(2)/⑧SC8出土土器/⑨SA91出土土器(1)/
	⑩SA91出土土器(2)/⑪SA91出土土器(3)/⑫SA91出土土器(4)
写真図版34	①SA91出土土器(5)/②SA91出土土器(6)/③SA93出土土器(1)/ ······ 242
	④ S A93出土土器(2)/⑤ S A93出土土器(3)/⑥ S A93出土土器(4)/
	⑦SA93出土石器/⑧SA95出土土器/⑨SA97出土土器(1)/
	⑩SA97出土土器(2)/⑪SA97出土土器(3)/⑫SA98出土土器(1)
写真図版35	①SA98出土土器(2)/②SA98出土土器(3)/③SA99出土土器/243
	④SA100出土土器/⑤SA101出土土器(1)/⑥SA101出土土器(2)/
	⑦SA101出土土器(3)/⑧SA102出土土器/⑨SC22出土土器/
	⑩SC24出土土器(1)/⑪SC24出土土器(2)/⑫B区包含層出土土器(1)
写真図版36	① S A101出土土器(4)/② B 区包含層出土土器(2)/ ····· 244
	③B区包含層出土土器(2)/④B区包含層出土土器(3)/
	⑤B区包含層出土土器(4)/⑥B区包含層出土土器(5)/
	⑦B区包含層出土土器(6)/⑧B区包含層出土土器(7)/
	⑨B区包含層出土土器(8)/⑩SA103出土土器(1)/
	⑪SA103出土土器(2) / ⑫SA103出土土器(3)
写真図版37	①SA103出土土器(4)/②SA104出土土器(1)/③SA104出土土器(2)/ ····· 245
	④ S A104出土土器(3)/⑤ S A106出土土器(1)/⑥ S A106出土土器(2)/
	⑦SA107出土土器(1)/⑧SA107出土土器(2)/⑨SA109出土土器/
	⑩SA111出土土器/⑪SA114出土土器(1)/⑫SA114出土土器(2)
写真図版38	①SA114出土土器(3)/②SA114出土土器(4)/③SA115出土石器/ ······ 246
	④SC25出土土器(1)/⑤SC25出土土器(2)/⑥SC25出土土器(3)/
	⑦SC25出土土器(4)/⑧SC25出土土器(5)/⑨SC25出土土器(6)/
	⑩SС25出土土器(7)/⑪D区包含層出土土器(1)/⑫D区包含層出土土器(2)
写真図版39	①D区包含層出土土器(3)/②D区包含層出土土器(4)/
	③D区包含属出土土器(5)/④D区包含属出土土器(6)/

;

	⑤D区包含層出土土器(7)/⑥D区包含層出土土器(8)/
	⑦D区包含層出土土器(9)/⑧D区包含層出土土器(10)/
	⑨SA116出土土器(1)/⑩SA116出土土器(2)/
	⑪SA116出土土器(3)/⑫SA116出土土器(4)
写真図版40	①SA116出土土器(5)/②SA117出土土器(1)/③SA117出土土器(2)/ 248
	④SA117出土土器(3)/⑤SA117出土土器(4)/⑥SA117出土土器(5)/
	⑦SA117出土土器(6)/⑧SA119出土土器(1)/⑨SA119出土土器(2)/
	⑩SA120出土土器(1)/⑪SA120出土土器(2)/⑫SA120出土土器(3)
写真図版41	①SC26出土土器/②SC29出土土器(1)/③SC29出土土器(2)/ ······ 249
	④SC30出土土器/⑤F区包含層出土土器(1)/⑥F区包含層出土土器(2)/
	⑦F区包含層出土土器(3)/⑧F区包含層出土土器(4)/
	⑨F区包含層出土土器(5)/⑩F区包含層出土土器(6)/
	⑪F区包含層出土土器(7)
写真図版42	①F区包含層出土土器(8)/②F区包含層出土土器(9)/ ····· 250
	③F区包含層出土土器(10)/④F区包含層出土土器(11)/
	⑤F区包含層出土土器(12)/⑥F区包含層出土土器(13)/
	⑦F区包含層出土土器(14)/⑧F区包含層出土土器(15)/
	⑨F区包含層出土土器(16)/⑩F区包含層出土土器(17)/
	⑪F区包含層出土土器(18)/⑫F区包含層出土土器(19)
写真図版43	①96号竪穴住居跡出土虺龍文鏡(1) (表面) / 251
	②96号竪穴住居跡出土虺龍文鏡(2)(裏面)/
	③ A 区出土線刻をもつ弥生土器/
	④出土鉄器〈鉄鏃・刀子〉/⑤出土装飾品
写真図版44	①旧石器時代石器(1) 〈ナイフ形石器・尖頭器〉/ 252
	②旧石器時代石器(2)〈削器・細石刃核〉/③縄文時代石器(1)〈打製石鏃〉/

④縄文時代石器(2)〈打製石鏃〉/⑤縄文時代土器

第 I 章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

農業試験場本場果樹園整備事業は、農業試験研究機関が21世紀の本県農業および農業関連産業の技術 革新を先導する機関として、多様化・高度化するニーズに的確に対応し得るよう、本県農業研究の拠点 機関である総合農業試験場本場の研究機能の充実強化を図る一環として計画された事業である。

この計画を受けて県教育委員会文化課では、平成9年度から事業を担当する農政水産部農政企画課と協議を行い、平成12年度工事発注箇所を平成11年度に調査(第1次調査)を行うこととし、第1次調査分を平成11年6月16日に試掘調査を実施した。その結果、多くの弥生時代の遺物が出土し、遺構の存在が確認され、記録保存の措置を執ることとなった。

第1次調査は、当初、6,000㎡の調査対象面積を、平成11年11月15日から平成12年3月31日までのおよそ4か月半を計画していたが、予想以上の遺構・遺物出土のため、新たに平成12年4月18日から同年5月31日まで期間延長して調査を実施した。

平成13年度工事発注箇所は、平成13年8月に試掘調査を実施した。その結果、第1次調査に匹敵する 遺構・遺物の存在が確認され、第2次調査として記録保存の措置を執ることとなった。第2次調査は、 調査対象面積5,700㎡を平成13年8月20日から平成14年2月28日まで実施した。

第2節 調査の組織

下那珂遺跡の発掘調査及び整理・報告書作成作業は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

(平成11年度)

(平成12年度)

下那珂遺跡第1次発掘調查(1)

下那珂遺跡第1次発掘調查(2)

剛	矢野	所 長	守	田中	長		所
茂仁	菊地	副所長兼総務課長	京子	江口	長	所	副
哲夫	岩永	副所長兼調査第二課長	和昭	児玉	係 長	務	庶
維子	亀井	総務課総務係長	尚友	青山	二係長	査第	調
和樹	菅付	調査第二課調査第三係長	健二	鈴木	主査	同	
貴充	甲斐	同課 調査第三係主事	誠	高橋	主事	同	
哲史	安楽	同 調査員	広人	日高	主事	同	
孝博	堀田	同課 調査第四係調査員	哲史	安楽	司調査員	同	
幸寿	松永	同 調					

(平成13年度)

(平成14年度)

下那珂遺跡第2次発掘調査・遺物整理

下那珂遺跡 遺物整理

弘和哲文和貴康博夫博樹充

所	長	矢野	岡川	所	米良
副所長兼絲	窓務課長	菊地	茂仁	副所長兼総務課長	大薗
副所長兼調查	E第二課長	岩永	哲夫	副所長兼調査第二課長	岩永
総務課総	務係長	亀井	維子	総務課総務係長	野邊
調査第二課調	查第三係長	菅付	和樹	調査第二課調査第三係長	菅付
同	主任主事	田中	光	同 主任主事	甲斐
同	主任主事	甲斐	貴充		
同	調査員	古屋	美樹		

(平成15年度)

下那珂遺跡 遺物整理・報告書作成

所		長	米良	弘康
副所長	兼総務課	! 長	大薗	和博
副所長	兼調査第二部	果長	岩永	哲夫
総務課総	総務係主幹兼保	系長	石川	恵史
調査第二	課調査第三個	系長	菅付	和樹
ſ	司 主任主	上事	甲斐	貴充

第3節 遺跡の位置と環境(第1図)

下那珂遺跡(第1図-1)は、宮崎郡佐土原町大字下那珂字峯前に所在する。遺跡は、佐土原町南端の宮崎市との境界付近にあり、石崎川左岸の標高約42mの城ヶ峰台地南端上に位置する。城ヶ峰台地は、標高約60mと高くはないものの宮崎平野との比高差が大きく、平野部から見れば突出した岬のようである。台地南端にある本遺跡からは、宮崎平野の北部が一望に見渡せる。この城ヶ峰台地を中心とする周辺には多くの遺跡が点在する。以下、簡単ではあるが、周辺遺跡の概要を述べる。

城ヶ峰台地上には下那珂貝塚(縄文~弥生時代:文献①・②)・諏訪城跡(中世:第1図-2・文献 ③)が、台地の斜面上には城ヶ峰横穴墓群(古墳時代後期:第1図-3・文献③・④)が点在する。下 那珂貝塚は、地元高校生によって線刻の飛鳥が描かれている壺形土器と滑石製紡錘車が発見され、遺跡 の存在が確認された。昭和42年には、宮崎県教育委員会によって調査が行われ、貝塚1・竪穴住居跡1 軒をはじめ多数の弥生土器片や石庖丁などの石器類が確認された(文献①・②)。

また、城ヶ峰台地北側の佐土原町側には、中溝遺跡(弥生時代~中世:・第1図-4・文献⑤)・平村遺跡(縄文時代~中世:第1図-5・文献③)・尾原遺跡(弥生時代~中世:第1図-6・文献③)・小平遺跡(弥生時代:第1図-7・文献③)・小牧遺跡(中近世:第1図-8・文献⑥)・下ノ山遺跡(弥生時代~中世:第1図9・文献⑦)・広瀬村古墳群(古墳時代)・土器田横穴墓群(古墳時代:第

1図-10・文献®・⑨)・下那珂馬場古墳(古墳時代・第1図-11・文献⑩)・堤下遺跡(弥生~古墳時代:第1図-12・文献⑪)・伊賀給遺跡(弥生時代~中世:第1図-13・文献⑫)などがある。特に、中溝遺跡(文献④)は、1972年(昭和47年)に一ツ葉有料道路建設工事に伴い発掘調査が行われ、土坑や竪穴住居跡1軒のほか、弥生時代後期前半に比定される土器片が検出された。「中溝式土器」の標識遺跡である。土器田横穴墓群(文献④・⑧・⑨)は、133基から成る横穴墓群であり、6世紀中頃から8世紀にかけて造営されたと考えられている。1975年~1982年まで3回合計7基の発掘調査が実施され、須恵器・土師器・鉄鏃・馬具など数多くの副葬品が検出された。中でも土器田東1号横穴墓は、玄室内部において線刻壁画が確認され、特筆すべきものがある。下那珂馬場古墳は、広瀬古墳群の一つである。未調査ではあるが、全体的な墳形を残しており、推定墳長約70mの前方後円墳である。城ヶ峰台地南側の宮崎平野側には、弥生時代後期前半の袋状口縁壺形土器が出土した西片瀬原遺跡(弥生時代:第1図-14・文献④・⑬)・弥生時代~中近世の土器・石器・陶磁器類や水田跡が確認された保木下遺跡(弥生時代~中近世:第1図-15・文献⑭)・住吉古墳群(古墳時代・第1図-16・文献④)がある。住吉古墳群は、本来、3基の前方後円墳から構成されていたが、現在残っているのは住吉1号墳(墳長約67m)の1基だけである。

このように、下那珂遺跡を取り巻く地域には数多くの遺跡が点在する。注目すべきは弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡が多いことである。これは、弥生時代後期~古墳時代、当地が付近の平野部を豊かな生産基盤背景として、組織的な社会集団を形成していたことを想起させるものである。下那珂遺跡は、そうした一連の遺跡群の中でも規模の大きな集落遺跡であり、 周辺地域の中核の一つを担っていたと考えられる。

【参考文献】

文献①: 石川恒太郎・栗原文蔵1968「宮崎市外佐土原町下那珂弥生遺跡」『九州考古学』33・34号九州考古学会

文献②:宮崎県総合博物館1988『埋蔵文化財調査研究報告Ⅱ 下那珂貝塚』

文献③: 佐土原町教育委員会1991「佐土原町遺跡詳細分布調査報告書」『佐土原町文化財調査報告書第5集』

文献④:宮崎県1992『宮崎県史』資料編考古1

文献⑤:宮崎県道路公社1972『佐土原中溝遺跡調査報告書』

文献⑥:佐土原町教育委員会2003「小牧遺跡」『佐土原町文化財調査報告書第25集』

文献⑦:佐土原町教育委員会2003「下ノ山遺跡」『佐土原町文化財調査報告書第26集』

文献⑧:佐土原町教育委員会1982「土器田西横穴墓群」『佐土原町文化財調査報告書第2集』

文献⑨:佐土原町教育委員会1983「土器田東横穴墓群(2)・東1号横穴墓保存措置報告」『佐土原町文化財調査報告書第3集』

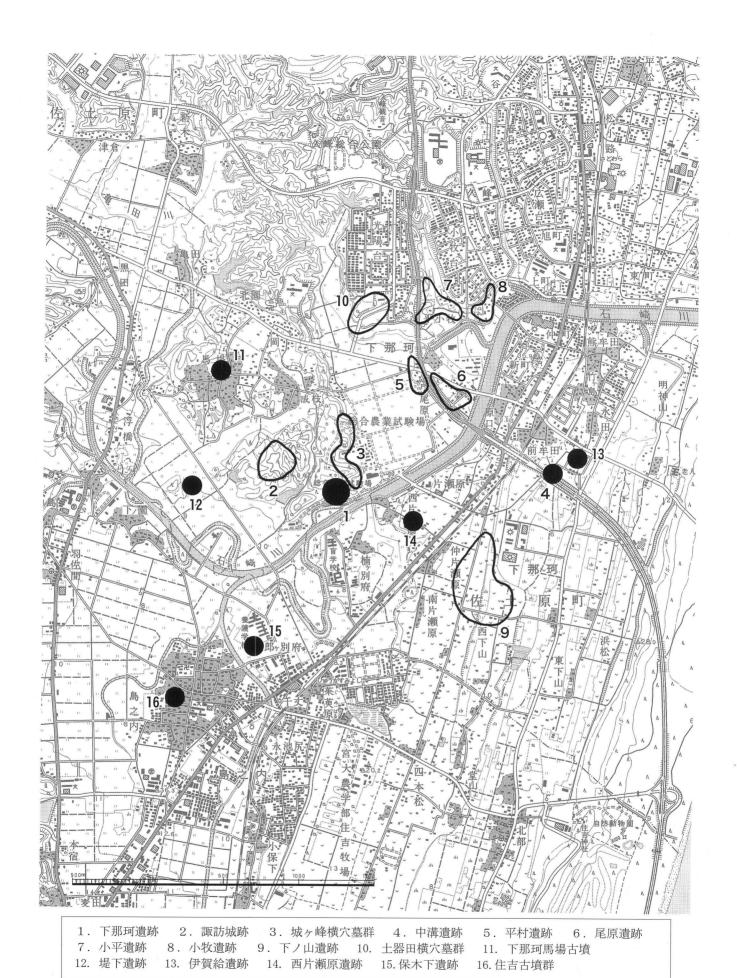
文献⑩:近藤義郎編 2000「下那珂馬場古墳」『前方後円墳集成』補編 角川書店

文献⑪:佐土原町教育委員会1999「堤下遺跡」『佐土原町文化財調査報告書第17集』

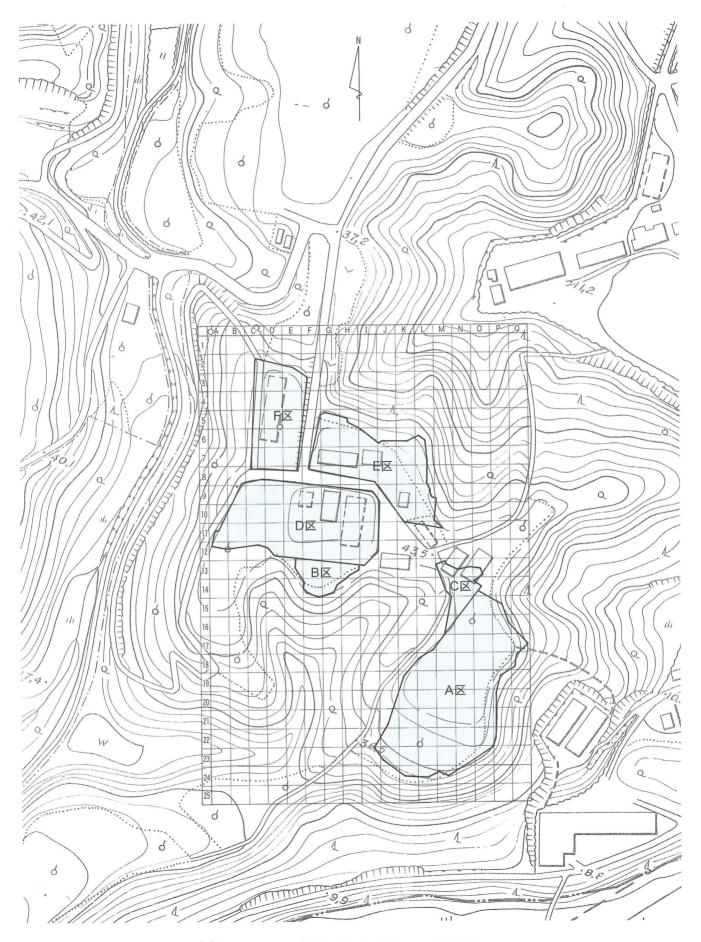
文献⑩: 佐土原町教育委員会1999「伊賀給遺跡」『佐土原町文化財調査報告書第14集』

文献③: 田中茂1974「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要』 3 宮崎県総合博物館

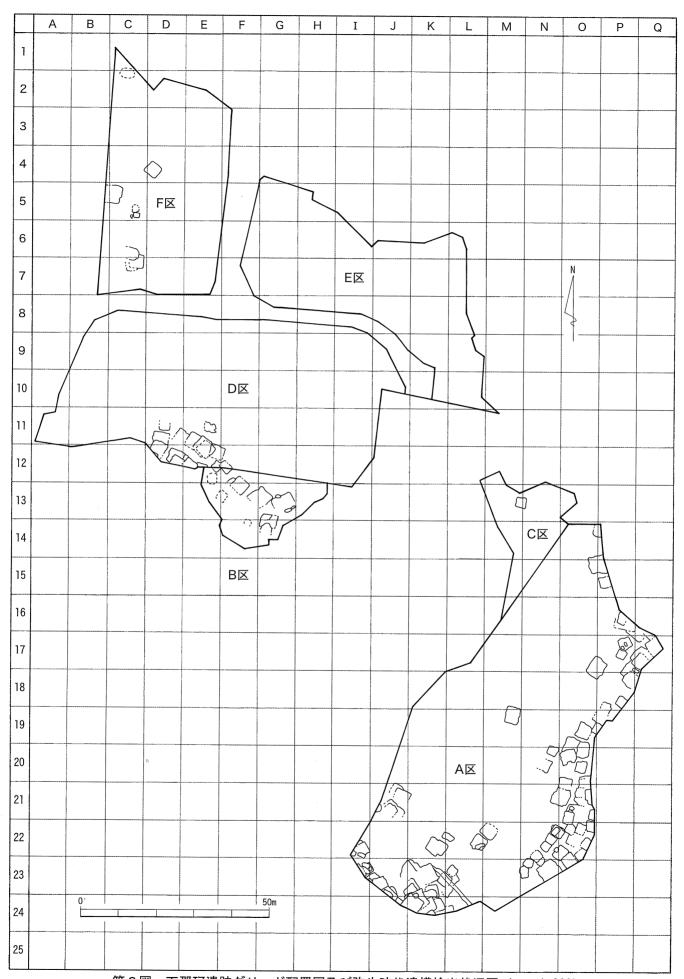
文献49: 宮崎県教育委員会1986『保木下遺跡』



第1図 下那珂遺跡の位置と周辺遺跡図(1/25,000)



第2図 下那珂遺跡周辺地形図(1/2,000)



第3図 下那珂遺跡グリッド配置図及び弥生時代遺構検出状況図 (1/1,200)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の経過と概要(第3図)

下那珂遺跡の調査面積は12,320㎡である。果樹園造成工事の工程上,平成11・12年度の一次調査(5,670㎡)と平成13年度の二次調査(6,650㎡)の2回に分けて調査を行った。また,調査の工程上,調査区域をAからFの6区画に分割した。各調査区域の内訳は,一次調査分がA区(4,800㎡)・B区(450㎡)・C区(420㎡)であり,二次調査分がD区(3,200㎡)・E区(1,950㎡)・F区(1,500㎡)である。

一次調査(平成11年11月~平成12年5月)では、調査区の南東側A・C区・北西部南端のB区に着手した。まず、重機により基本層序第 I 層の耕作土を除去したところ、耕作土及び基本層序第 II ~ III 層より多量の弥生土器片をはじめ、磨製石器類(石庖丁・磨製石鏃・石斧・砥石)・縄文土器(貝殻条痕文系)・細石刃核・打製石器(石鏃・削器・石核・剥片)など旧石器~弥生時代の遺物が出土した。次に、調査区の大部分がアワオコシスコリア堆積層まで削平されていたが、第IV 層上部で精査を行った。精査の結果、弥生時代の竪穴住居跡群・弥生時代の土坑・縄文時代の集石遺構・縄文時代の炉穴・時期不明のピット多数・時期不明の掘立柱建物といった遺構群が検出された。各遺構を掘り下げたところ、弥生土器・石器・鉄器・銅鏡片が確認された。竪穴住居跡は、台地辺縁部に集中し、互いに重なりながら、不確定なものも含め合計102軒にのぼった。

平成12年5月,第IV層の調査終了後,A区の南側(約400㎡)にて第VI層の検出を行った。検出作業の結果,遺構として縄文時代早期の集石遺構1基,遺物として縄文早期土器片・細石刃や剥片などの石器類が確認された。

二次調査(平成13年8月~平成14年2月)では、平成13年の8月から調査区北西側のD区に着手した。D区の調査区の基本層序第 I 層の耕作土を除去したところ、B区と隣接する南側では弥生土器片が数多く検出されたが、他の場所からはあまり検出されなかった。第 I 層除去後、人力によって第 II ~ III 層の掘り下げを行った。さらに第IV 層上面で精査を行ったところ、遺構としては時期不明のピット多数・弥生時代の竪穴住居跡I5軒・縄文時代早期の炉穴跡 I 基、遺物としては多量の弥生土器・石器・縄文土器・石器が調査区南側からほぼ同レベルで検出された。これは、本来丘陵地であったD区が削平されていたことを示している。また、南側以外の大部分では、基本層序の第III 層のアワオコシスコリアの堆積層が検出された。

・ D区の調査と平行しつつ、平成13年12月からE区とF区の調査に着手した。第 I 層を重機により除去した結果、E区とF区東側は、D区の大部分と同じくアワオコシスコリア堆積層まで削平されていた。 F区の西側は、第 II 層以下が残っており、第IV 層上面で精査を行ったところ、遺構としては弥生時代の竪穴住居跡 3 軒・時期不明の土坑数基・縄文早期の炉穴跡 1 基が、遺物としては弥生時代の多量の土器・石器類が検出された。

E区東端山地部分では,第 $I \sim$ 第VI層までが薄く堆積しており,層別の検出作業が困難であった。表土を重機により除去した後に,人力で掘り下げを行ったところ,遺構としては時期不明の溝状遺構 1 条,遺物としては縄文土器・弥生土器・石器類が検出された。

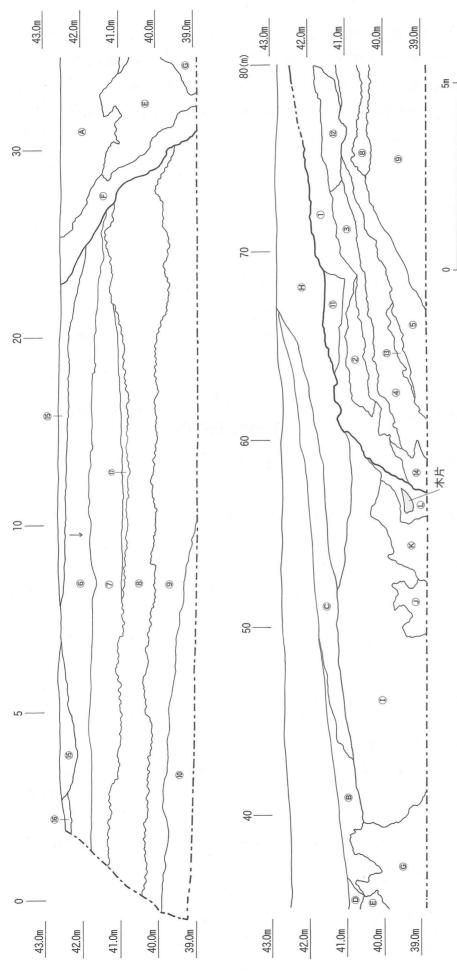
一次・二次の調査をとおして、弥生時代の竪穴住居跡120軒と土坑30基・縄文時代の集石遺構2基と 炉穴4基・時期不明のピット多数、コンテナ450箱を超す弥生土器を中心とする多量の遺物が確認され、 本遺跡が現在のところ宮崎県域最大級の弥生時代後期集落の一つであることがわかった。

現地での記録図面作成のため、両年度を通じて国土座標(XY座標)に乗じた共通の10mグリッドを設置した。更にこのグリッドを利用して、南北方向は北から南 $\sim 1 \sim 25$ ・東西方向は西から東 $\sim A \sim Q$ に区画し、この 2 つの組み合わせで区画(例えば「F13区」・「P17区」など)を設定した。以後の文章にこの区画を用いることとする。

第2節 遺跡の基本層序

下那珂遺跡は、従来の丘陵地形が削平されていたので、不安定な堆積状況を呈し、上から下まで基本的な層序を形成する場所が少なく、場所によって堆積状況が大きく異なる。しかし、部分的に確認される層位を繋ぎ合わせると以下のようになる。主な遺物・遺構包含層は、弥生時代の第IV層、縄文時代早期の第VI層である。

第I層	基本層序第Ⅰ層 …明褐色土(Hue 2.5Y3/1~2/1)。土質はやわらかく,含有物は少ない。
	表土もしくは耕作土である。
第Ⅱ層	基本層序第Ⅱ層…黒色土(Hue 10YR3/1~2/1)。第Ⅰ層同様,土質はやわらかく,含有
	物は少ない。
第Ⅲ層	基本層序第Ⅲ層 …黒褐色土(Hue10YR3/2~2/2)。土のかたさは普通。第Ⅱ層と第Ⅳ層の
	漸移的な層と考えられる。
第Ⅳ層	基本層序第IV層…暗褐色土 (Hue 10YR3/3~3/4)。土のかたさは普通。少ししまりがな
	くボロボロしている。弥生土器片を多く含む。弥生時代中心の包含層
	と考えられる。
第Ⅴ層	基本層序第V層…黄褐色土(Hue 10YR5/6~4/4)。アカホヤ火山灰の二次的堆積物と考
	えられる。
第VI層	基本層序第VI層…褐色土 (Hue 10YR5/1~4/1)。土のかたさは普通。少ししまりがなく,
	乾燥するとボロボロする。縄文早期土器を多く含む。縄文時代早期の
	包含層と考えられる。
第Ⅷ層	基本層序第Ⅲ層 …黄灰色土(Hue 10YR6/6∼6/8)。きめ細やかなローム層である。粘性
	も少しあるが、ザラザラもしている。AT火山灰の風化層と考えられ
	ప .
第哑層	基本層序第2回層…黄橙色土 (Hue 7.5YR5/6)。非常にかたくしまっている。径1cm以下
	の微細な軽石を多く含む。アワオコシスコリア層と考えられる。
第区層	基本層序第IX層…淡黄色土 (Hue 2.5Y8/4)。非常に硬くしまっている。イワオコシスコ
	リア層と考えられる。
第X層	基本層序第X層…礫層。径2~10cm程度の円礫から成る層である。



ア層/⑦**淡黄色土**(Hue 2.5Y-8/4)…基本層序の第IX層。イワオコシスコリア層。/<mark>⑧礫層</mark>(Hue 10YR-4/1)…基本層序の第X層。径2~10㎝の円礫から構成される。/<mark>⑨淡黄橙粘質土</mark>(Hue 10YR-/⑩明青灰粘質土(Hue 5B~5PB)…しまりがあり硬質な粘質土。/⑪黒色土(Hue 2.5Y-2/1)…しまりなく柔らかい。/⑪暗褐色土 (Hue 10YR-4/4)…弥生時代の遺構埋土の可能性がある。/**⑬暗褐色土**(Hue 7.5YR-3/3)…④層と⑤層の漸移的な層の可能性がある。遺物は含まない。/**⑭黒褐色土**(Hue 10YR-3/1)…①層に似てい ①黒褐色土(Hue 10YR-3/2)…基本層序の第皿層。/②暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…基本層序の第IV層。弥生土器を含む。/③黄褐色土(Hue 10YR-5/6)…基本層序の第V/層。アカホヤ火山灰堆積 層。/**④褐色土**(Hue 10YR-4/1)…基本層序の第VI層。縄文土器を含む。/**⑤黄灰色土**(Hue 10YR-6/8)…基本層序の第VI層。/**⑥黄橙色土**(Hue 7.5YR-5/6)…基本層序の第VI層。アワオコシスコリ るが③層の黄褐色土ブロックが混入する。/**⑥褐灰色土**(Hue 10YR-5/1)…後世の攪乱土。/**⑥黒褐色土**(Hue 5YR-2/2)…後世の耕作土。/**⑪にぶい黄橙色土**(Hue 10YR-6/3)…構成土はきめ細かい。 右下方向に傾斜している。 /@~①…後世の造成土。木材片や弥生土器片が多く含まれる。 8/3)…しまりがあり硬質な粘質土。

第4図 土層堆積状況図《D区南壁》(1/100)

第3節 下那珂遺跡における土器分類

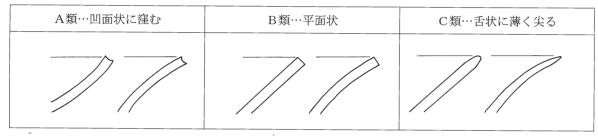
本遺跡において、主に弥生時代後期から終末期に属すると考えられる多くの弥生土器が出土した。その多くは竪穴住居跡や土坑といった遺構、もしくは基本層序の第 I 層から第IV層の包含層から出土した。以後本報告書の記述は遺構や出土区毎に区切られるため、記述するにあたり全体の表現統一を図る必要がある。

ここでは、まず器種を大別(甕・壺・高坏・鉢・その他)し、さらに各器種において表れる特徴を示す 各部の形態差により数類に細分する。

■甕…口唇部・口縁部(頸部形態も含む)・胴部・底部の各形態の組合せによって大きく甕 I 類~甕Ⅲ 類に分類した。甕各部の形態分類及び甕の分類状況は以下のとおりである。

口唇部形態

主に断面の形状によってA~Cの3類に分類する。



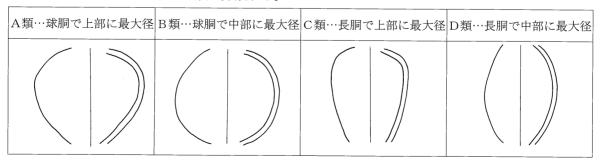
口縁部形態

口縁部から頸部にかけての屈曲形状によってA~C類の3類に分類する。

A類…明瞭に「く」字に曲がる	B類…緩やかに 「く」字状に曲がる	C類…長い口縁で緩やかに 「く」字状に曲がる

胴部形態

胴部の形状によってA~D類の4類に分類する。



底部形態

A類…明瞭な上げ底で端部が 外方に張り出す	B類…上げ底で端部はわずか に張り出す	C類…上げ底で端部は張り出さない	
D類…平底で端部はわずかに 張り出す	E類…平底で端部は張り出さない		

- **甕 I 類**…口唇部は凹面(口唇部形態 A 類)または平面(口唇部形態 B 類)で口縁部が狭い。口縁部は明確な「く」字状に曲がり、胴部との明瞭な境界線がある(口縁部形態 A 類)。底部は平底か上げ底で端部が外方にわずかに張り出すものが多い。(底部形態 B・D 類)。
- 甕Ⅱ類…口唇部はやや丸みがある(口唇部形態C類)が平面に近い(口唇部形態B類)。口縁部は緩やかに「く」字状に曲がり、胴部との明瞭な境界線はない(口縁部形態B類)。底部はやや上げ底で端部が張り出すもの(底部形態B類)や、やや上げ底で端部が張り出さないもの(底部形態C類)、平底で端部が張り出す(底部形態D類)ものが多い。
- **甕皿類**…口唇部は先細りが認められる(口唇部形態C類)。口縁部は緩やかに「く」字状に曲がり、胴部との明瞭な境界線はない(口縁部形態B類)。断面はやや丸みがある。底部は小さく、平底でわずかに張り出すもの(底部形態D類)や張り出しのないもの(底部形態E類)がある。器面調整に平行タタキを用いるのもこの段階である。
- ■壺(二重口縁壺・直口縁壺・長頸壺)…口縁部・胴部・底部の各形態の組合せによって大きく壺 I 類 ~壺VI類に分類した。壺各部の形態分類及び壺の分類状況は以下のとおりである。

口縁部形態

A類…二重口縁	B類…大きく開 く直口縁	C類…小さく 外反する直口縁	D類…緩やかに 外反する直口縁	E類…長頸	F類…短頸

胴部形態

A類…長形胴	B類…球形胴	C類…偏球形胴	D類…小型球形胴

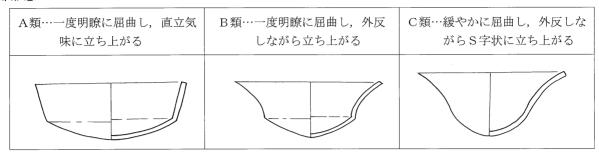
底部形態

A類…脚台状平底	類…脚台状平底 B類…貼付円盤状 平底		D類…レンズ状	E類…丸底	

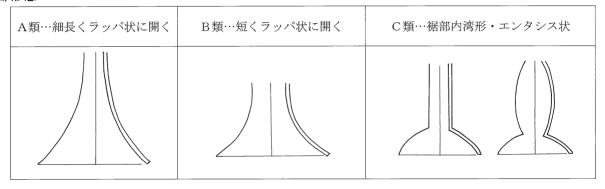
- **壺 I 類**…二重口縁壺。口縁部は二重口縁(口縁部形態A類)。胴部形態は長形胴(胴部形態A類)・球 形胴(胴部形態B類)が多い。底部はレンズ状(底部形態D類)か丸底(底部形態E類)のも のが多い。
- 壺Ⅱ類…直口縁壺(1)。口縁部は大きく開きながら外反する直口縁(口縁部形態B類)。胴部形態は長形胴(胴部形態A類)・球形胴(胴部形態B類)が多い。底部は貼付円盤状平底(底部形態B 類)・レンズ状(底部形態D類)・丸底(底部形態E類)が多い。
- **壺皿類**…直口縁壺(2)。口縁部は短く小さく外反する直口縁(口縁部形態C類)。胴部形態は長形胴 (胴部形態A類)・球形胴(胴部形態B類)が多い。底部は貼付円盤状平底(底部形態B類)・ レンズ状(底部形態D類)・丸底(底部形態E類)が多い。
- **壺Ⅳ類**…直口縁壺(3)。口縁部は頸部から緩やかに伸びながら外反する直口縁(口縁部形態D類)。胴部形態は長形胴(胴部形態A類)が多い。底部は貼付円盤状平底(底部形態B類)・レンズ状(底部形態D類)・丸底(底部形態E類)が多い。
- **壺Ⅴ類**…長頸壺。口縁部は長頸(口縁部形態E類)。胴部形態は球胴形(胴部形態B類)か偏球形胴(胴部形態C類)が多い。底部はレンズ状(底部形態D類)か丸底(底部形態E類)のものが多い。
- **壺Ⅵ類**…短頸壺。口縁部は直立気味の短頸(口縁部形態F類)。胴部形態は小型の球形胴(胴部形態B類)や偏球形胴(胴部形態C類)が多い。底部はレンズ状(底部形態D類)か丸底(底部形態 E類)のものが多い。

■高坏…坏部・脚部の各形態の組合せによって大きく高坏 I 類~高坏Ⅲ類に分類した。高坏各部の形態 分類及び高坏の分類状況は以下のとおりである。

坏部形態



脚部形態



- 高**坏** I 類…坏部は一度明瞭に屈曲し直立気味に立ち上がる(坏部形態 A 類)。脚部は細長くラッパ状に開くもの(脚部形態 A 類),短くラッパ状に開くもの(脚部形態 B 類)が多い。
- 高**坏** Ⅱ 類…坏部は一度明瞭に屈曲し緩やかに外反しながら立ち上がる(坏部形態 B 類)。脚部は細長くラッパ状に開くもの(脚部形態 A 類),短くラッパ状に開くもの(脚部形態 B 類)が多い。
- 高**坏Ⅲ類**…坏部は緩やかに屈曲し外反しながら立ち上がる(坏部形態 C 類)。脚部は短くラッパ状(脚部形態 B 類)と裾部内湾形・エンタシス状(脚部形態 C 類)が多い。
- ■鉢…大きく浅鉢と深鉢に分ける。浅鉢(鉢 I 類)と深鉢(鉢 II 類)はそれぞれ口縁部~胴部の形態と 底部形態によって細分する。

胴部形態 (口縁部・頸部形態を含む)

A類…胴部中位でS字	B類…頸部で屈曲し大きく	C類…頸部で内湾し	D類…直線的に
状に屈曲する	外反する	立ち上がる	立ち上がる

底部形態

A類…脚台付き 平底	B類…貼付円盤 状平底	C類…張り出し をもつ上底	D類…丸底	E類…平底	F類…尖底

- **鉢 I 類**…浅鉢タイプ。胴部・底部形態によって鉢 I A 類~鉢 I D 類に細分する。
 - **鉢IA類**…胴部中位でS字状に屈曲する(胴部形態A類)。底部は貼付円盤状平底(底部形態B類) や丸底(底部形態D類)が多い。
 - **鉢IB類**…頸部で屈曲し大きく外反する(胴部形態B類)。底部は貼付円盤状平底(底部形態B類) や丸底(底部形態D類)が多い。
 - **鉢IC類**…頸部で内湾しながら立ち上がる(胴部形態C類)。底部は丸底(底部形態D類)や平底 (底部形態E類), 尖底(底部形態F類)が多い。
 - **鉢ID類**…底部から直線的に広がりながら立ち上がる(胴部形態D類)皿状のタイプである。底部は 貼付円盤状平底(底部形態B類)・張り出しをもつ上げ底(底部形態C類)・平底(底部 形態E類)が多い。
- **鉢Ⅱ類**…深鉢タイプ。胴部・底部形態によって鉢ⅡA類・鉢ⅡB類に細分する。
 - **鉢ⅡA類**…頸部で屈曲し大きく外反する(胴部形態B類)。底部は脚台付き平底(底部形態A類)や 貼付円盤状平底(底部形態B類)が多い。
 - **鉢ⅡB類**…頸部で内湾しながら立ち上がる(胴部形態C類)。底部は貼付円盤状平底(底部形態B類) や丸底(底部形態C類)が多い。
 - **鉢Ⅱ C類**…底部から直線的に広がりながら立ち上がる(胴部形態 D類)。底部は張り出しをもつ上げ底(底部形態 C類)・平底(底部形態 E類)が多い。

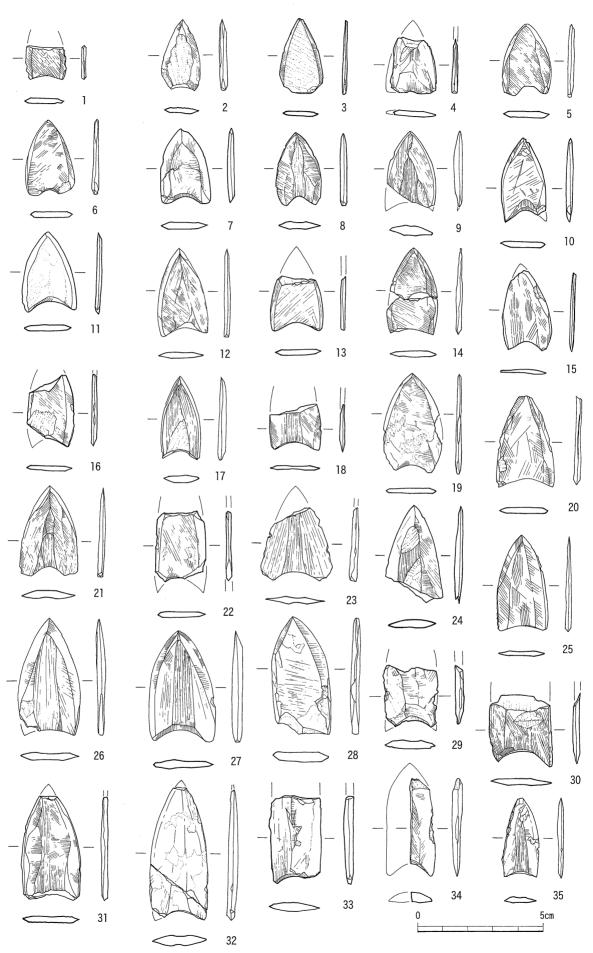
第4節 下那珂遺跡における石器分類と包含層出土石器 (第5図~第33図)

遺物の多くは、竪穴住居跡や土坑などの遺構、もしくは基本層序の第 I 層から第IV層の包含層から出土した。遺物、特に石器については、その多くが弥生時代に帰属すると考えられるが、削器や蛤形剥片石器などの一部の打製石器は縄文時代に帰属すると考えられ、時期区分が難しい。ここでは、あえて時代別にすることなく、器種別に述べることとする。なお、明らかに弥生時代以前に属すると考えられる遺物(縄文土器・細石刃・ナイフ形石器など)は後に別項「第 6 節旧石器時代〜縄文時代の調査」を設けて記述する。なお、個々の石器の計測値については巻末の「石器計測表(第 4 表〜第11表)」に記載している。

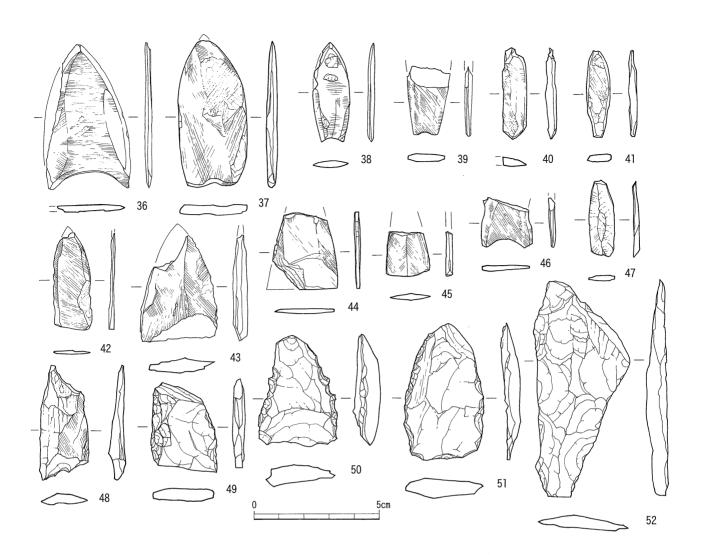
■磨製石鏃(第5図・第6図-1~47・遺構出土-413・428・500・501・506・559・601・611・619・657・682・862・901・1024・1141)…磨製石鏃は包含層出土の47点と遺構出土の15点の計62点が出土した。磨製石鏃の分類は、一般的な分類の基準として基部と基辺の形状が挙げられる。基部形状として、茎の有無が挙げられるが、本遺跡出土磨製石鏃は全て無茎である。基辺形状は、わずかに平基を含むが、その多くが凹基である。長さは2.8~5.8cm、平面形態は水滴形や砲弾形と多少のばらつきはあるが、比較的まとまった形状を呈する。しかし、こうしたまとまりから若干逸脱したタイプもある。40・41・47は側縁に明瞭な刃部を設けず棒状のタイプである。46は側縁を一度緩やかに屈曲させるタイプである。45は基辺形状が平基型で中央に鎬をもつタイプである。

使用石材はほとんどが頁岩もしくはホルンフェルスである。特に緑色の頁岩が多く、磨製石鏃62点中34点(55%)と半数近くを占める。また、ほとんどが部分的な微細な欠け程度の完形であり、半分以上欠けているような欠損品は少ない。欠損箇所は先端の切っ先部分(32/62点)が多く、使用の痕跡が認められる。

- ■磨製石鏃未製品(第6図-48~52・遺構出土-364)…いずれも頁岩製であり、ほとんど全て緑色 頁岩製である。周縁に微細な剥離をもつ尖頭状石器や削器的な加工剥片石器とも考えられるが、用材で ある緑色頁岩が磨製石鏃に多用されていることから、磨製石鏃未製品と考えられる。48は表面の一部と 裏面側縁の一部に研磨痕が確認できる。欠損品というよりもむしろ製作途中品か失敗品ではなかろうか。 49~51は周縁に微細な剥離を施しており、石鏃の原型を形作ったと考えられる。52は長さ8.8cmの剥片 で、他と同じく周縁に微細な剥離を施している。36・37のようなやや大型の磨製石鏃用と考えられる。
- ■石庖丁(第7図~第13図-53~172)…石庖丁は、一部重複するかもしれないが、包含層出土120点と遺構出土23点の計143点が出土した。本遺跡出土の石庖丁は、一部の打製を除き、その多くが磨製である。しかしながら、平面形態にいくつかのヴァリエイションがあり、大きく $I \sim V$ 類(I 類…穿孔しているが両側端に抉りをもたない・II類…両側端に抉りをもつが穿孔はない・II類…穿孔と両側端の抉りを両方もつ・IV類…打製・V類…その他)に大別できる。さらに各類は上縁の背部と下縁の刃部によって $A \sim D$ 類(A類…弧背直刃、B類…直背弧刃、C類…直背直刃、D類…弧背弧刃)に細分できる。ただし、下縁の刃部形態は研ぎ直しなどにより、製作当初より変形する可能性があるので、必ずしも有効



第5図 包含層出土石器(1) 〈磨製石鏃①〉(2/3)



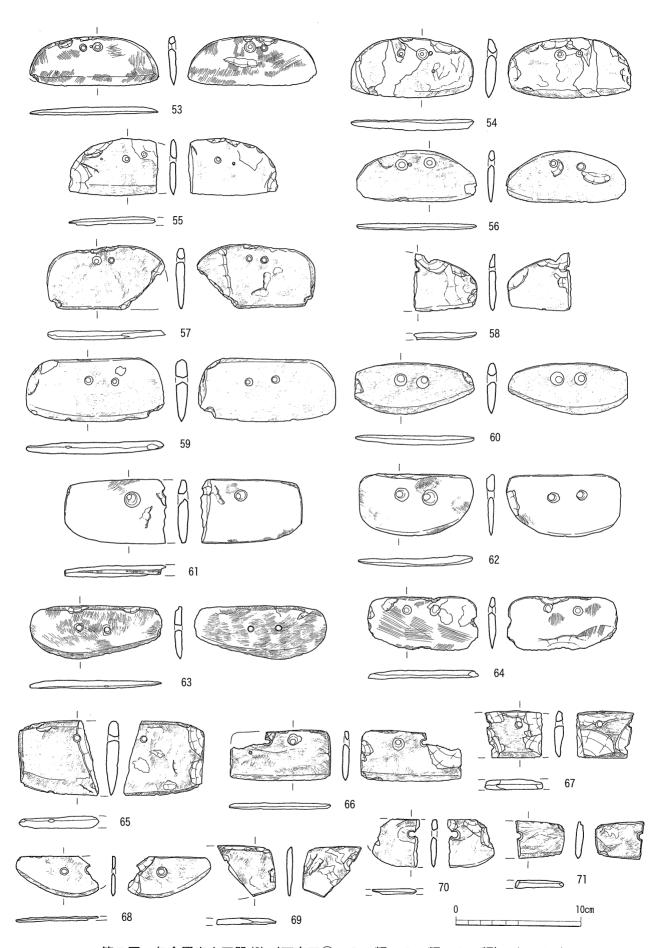
第6図 包含層出土石器(2)〈磨製石鏃②・磨製石鏃未製品〉(2/3)

な分類基準となり得ないかもしれない。主たる使用石材は頁岩・ホルンフェルス・砂岩の堆積岩系である。以下に $I \sim V$ 類の大分類と $A \sim D$ 類の小分類の組合せによる本遺跡の石庖丁分類を示す。また,ここで用いる「全長」は側縁間,「幅」は背部と刃部間,「鈕間」は 2 つの穿孔間の値を示す。

IA類「穿孔・弧背直刃型」($53\sim59\cdot431$)…穿孔あり・抉りなし・背部弧状・刃部直線状の特徴をもつ。頁岩とホルンフェルスを主石材とする。 $53\sim56\cdot58$ は背部が半円状を描くが、 $57\cdot59$ は隅丸方形状を呈し、**IC**類(直背直刃タイプ)との中間形態的要素をもつ。55は2つの穿孔が認められるが、そのうち1つが未貫通である。側縁に抉りもなく、何のための穿孔なのか疑問が残る。

IB類「穿孔・直背弧刃型」(60~64・68) …穿孔あり・抉りなし・背部直線状・刃部弧状の特徴をもつ。60は頁岩製で平面杏仁形を呈する。61・62はホルンフェルス製で平面形態が隅丸方形状を呈する。64は頁岩製で一側縁に抉りがあり、2つの穿孔がある。1つの穿孔は穿ち直した痕跡がある。

I C類「穿孔・直背直刃型」(65~67・69~71・905) …穿孔あり・抉りなし・背部直線状・刃部直線 状の特徴をもつ。全て頁岩製である。このタイプは他のタイプに比べて周縁の調整・表裏面の器面調整 が丁寧な印象をうける。65は幅が5.8cmと広く、大型の石庖丁である。66は四つ角が直角に近く、きれ



第7図 包含層出土石器(3)〈石庖丁①-IA類·IB類·IC類〉(1/3)

いな長方形を呈する。

Ⅱ A類「抉り・弧背直刃型」(72~83・476・613)…穿孔なし・抉りあり・背部弧状・刃部直線状の特徴をもつ。頁岩とホルンフェルスを主石材とする。76・77は全体に研磨が施されているが、所々に打製による剥離跡が残る。80・83は小型である。他のものが全長7~9cm前後であるのに対して、83は完形であるにも関わらず全長5.6cmと非常に小さい。

ⅡB類「抉り・直背弧刃型」(84~88・387・915) …穿孔なし・抉りあり・背部直線状・刃部弧状の特徴をもつ。84の側縁の抉りは、他のように打ち欠いた後に研磨して作出するのではなく、錐状の道具で穿孔した後に研磨を施して作出したと考えられる。86・87は背部に剥離が認められる。86は刃部にも微細な剥離が認められ、背部と刃部ともに使用痕跡と考えられる。87の背部の剥離は整形時の調整痕跡だと考えられ、磨製と打製の折衷タイプである。

Ⅱ C類「抉り・直背直刃型」(89~122・348・349・363・444・630・683・699・837・861) …穿孔なし・抉りあり・背部直線状・刃部直線状の特徴をもつ。平面形態は略長方形であり、本遺跡出土石庖丁で最も多いタイプである。使用石材の大部分を頁岩とホルンフェルスが占める。背部は断面形平坦状もしくは舌状に丁寧な研磨を、刃部は鋭く丁寧な研磨を施す。93・97・102・115のように、部分的、特に背部に打製による調整痕が残る。他のⅡ類同様、打製による粗い調整後に研磨を施し整形を施していたと推察される。102は未貫通の穿孔が残り、Ⅲ B 類に入る可能性もある。

■ D類「抉り・弧背弧刃型」(123~133・347・423・810)…穿孔なし・抉りあり・背部弧状・刃部弧状の特徴をもつ。平面形態は杏仁形もしくは木葉形を呈する。前に述べたとおり、刃部は摩耗や研ぎ出しにより直線状から弧状に変形する可能性があるが、背部にその可能性はない。このことから、このタイプは製作当初から意図的に背縁・刃縁ともに弧状に湾曲させていたようである。使用石材は他と同じく頁岩とホルンフェルスが主体であるが、ホルンフェルスが多い傾向がある。124は側縁に抉りをもちながら穿孔をももつタイプである。

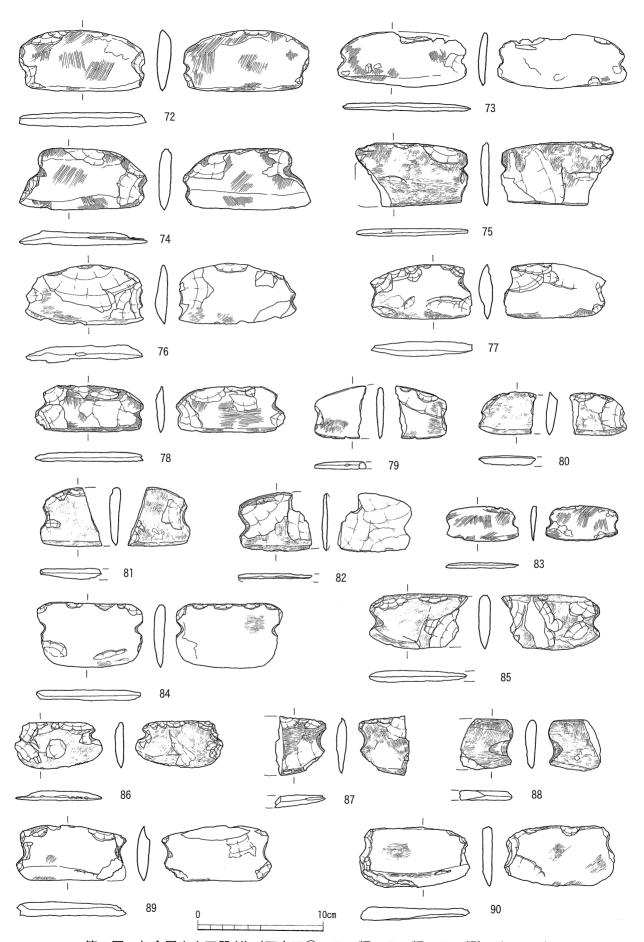
ⅢB類「穿孔抉り・直背弧刃型」(687) …穿孔あり・抉りあり・背部直線状・刃部弧状の特徴をもつ。 包含層からの出土はなく、SA96出土の1点のみである。

皿C類「穿孔抉り・直背直刃型」($134\sim137$)…穿孔あり・抉りあり・背部直線状・刃部直線状の特徴をもつ。 4点の出土であるが,そのうち1点(136)は1穴,2点($135\cdot137$)は2穴のうち1穴が未貫通と非機能的な穿孔といえる。

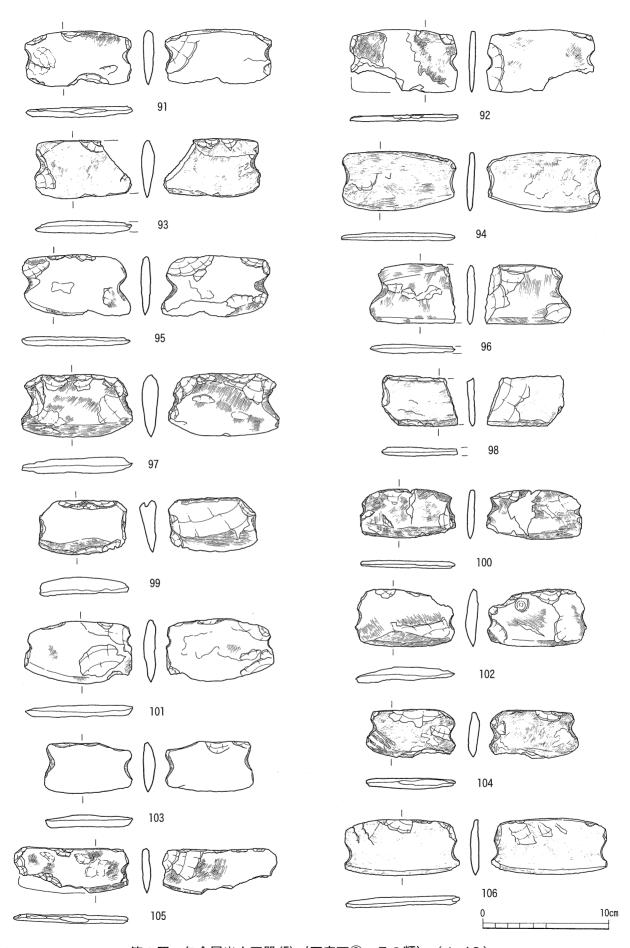
Ⅳ類「打製」(138~143・477) …穿孔のあるものはないが、138・139・142・143には抉りがある。いずれも背縁と刃縁に細かい打製の調整剥離が認められる。石庖丁未製品とも考えられるが、このままで使用していたとも考えられる。

V類「その他」(144~172・478・668・1057)…破片であるために全容がわからないものや未製品であるために I ~IV類に当てはまらないものを一括して扱う。形態や性質によってさらに a ~ d 類に細分する。

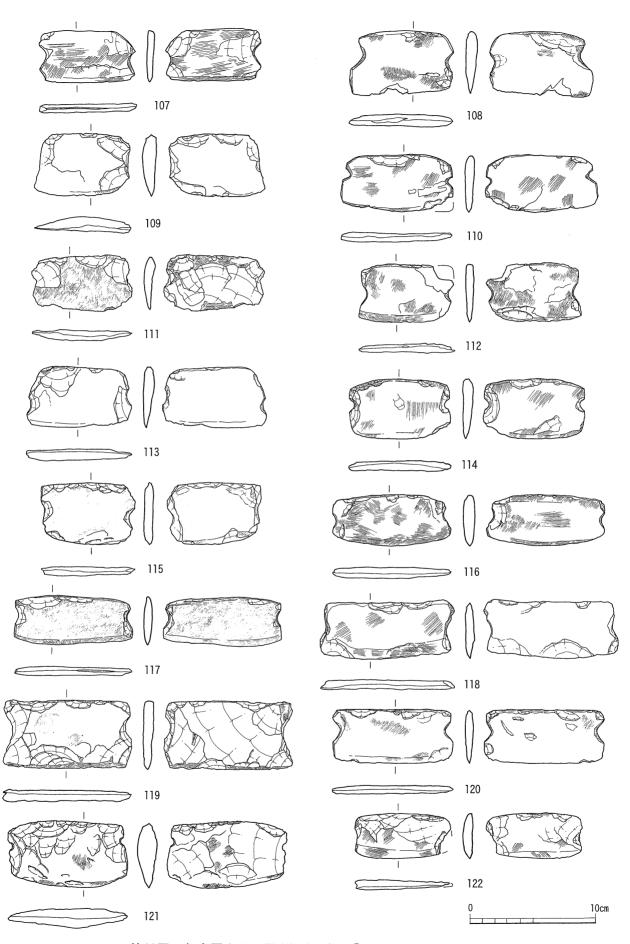
Va類… (144~148) 背部や側縁の整形が認められない不定形の一群。刃部は研磨により作出しているが、ほかの部分は打製である。いわば局部磨製的な石庖丁である。144以外は、平面形態が不定形でありながら、両側縁に抉りが施してある。144は磨製石鏃に多く用いられる緑色頁岩製である。磨製石鏃未製品の可能性があるが、部分的な研磨や左側縁にわずかに抉りのような剥離があることから、石庖



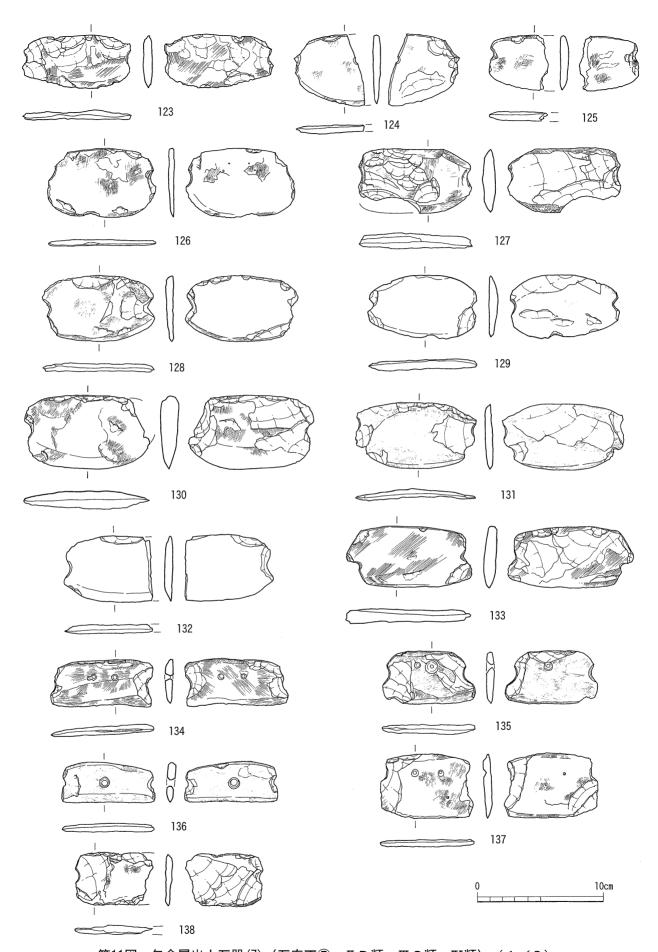
第8図 包含層出土石器(4)〈石庖丁②一ⅡA類・ⅡB類・ⅡC類〉(1/3)



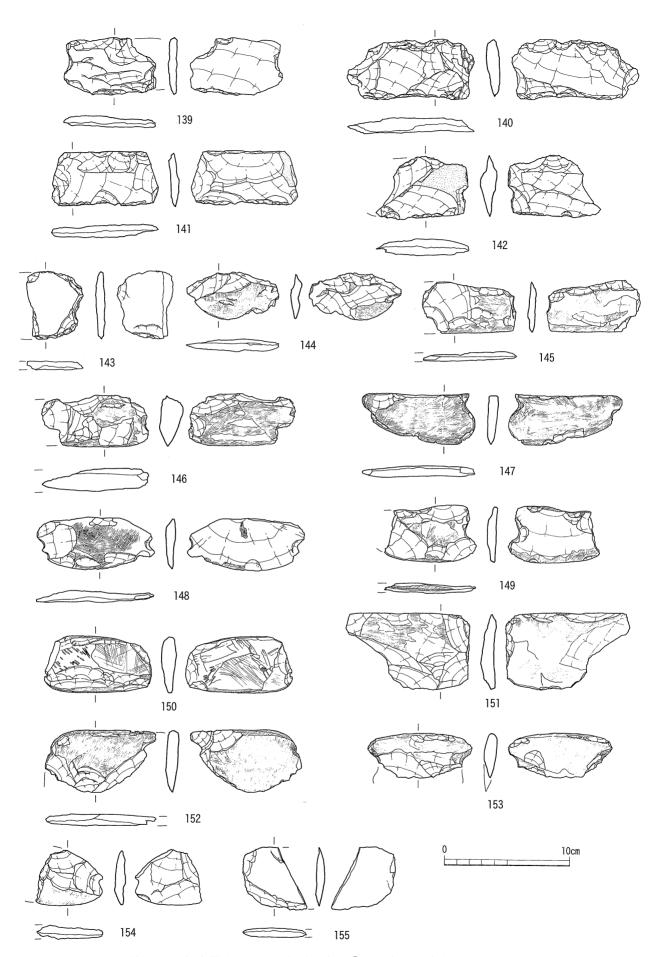
第9図 包含層出土石器(5)〈石庖丁③一ⅡC類〉(1/3)



第10図 包含層出土石器(6)〈石庖丁④一Ⅱ C類〉(1/3)



第11図 包含層出土石器(7)〈石庖丁⑤一Ⅱ D類・Ⅲ C類・Ⅳ類〉(1/3)



第12図 包含層出土石器(8)〈石庖丁⑥-IV類·V類〉(1/3)

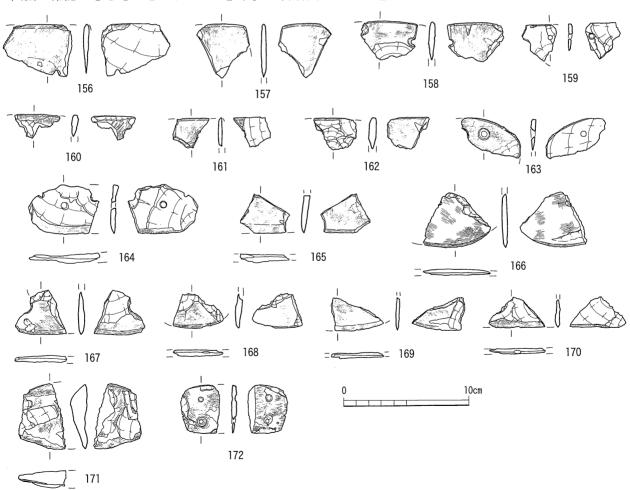
丁として扱う。147は背部以外全面に研磨が施されているが平面形態不定形である。使用途中で折れた ⅡB類の石庖丁を再利用して作った可能性もある。

▼ b 類 (149~151) …石庖丁またはそれに近い平面形態を有しながら、刃部を有しない一群。149は II C 類と平面形態を同じくするが、刃部を有しない。また、剥離のためか製作途中のためか表裏面の研磨が部分的である。150は直背直刃の平面形態と類似するが、抉りはなく、刃部を有しない。また、表裏面の部分的に研面があるが、線状痕(後述する砥石の a 種研磨痕)が認められ、表面調整研磨面というよりは砥石の研面に近い。石庖丁未製品から砥石への転用品とも考えられる。

 \mathbf{V} c 類(152~171)…破片であるが,形態から石庖丁と考えられる一群。152~163は背部が残る破片である。157・162以外は穿孔が認められる。164~171は刃部が残る破片である。167は上部が剥離しているが,抉りをもつ \mathbf{II} 類で直刃タイプである。171は背部と刃部が一部残る破片である。粗い剥離により未製品との印象も受けるが,背部と刃部が研磨されており,実際に使用されたものと考えられる。

Vd類(172) …緑色頁岩製の破片で、1つの穿孔と1つの未貫通の穿孔をもつ。表裏面と背部は研磨により平坦に整えられ、下半に行くにつれ薄く鋭利となり刃部を作出しているようである。側縁も薄く鋭利であり、削器的な様相を呈しているが、石庖丁の範疇にいれることとした。

■砥石 (第14図~第20図-173~260) ……明確な研磨痕のあるもの、明確な研磨痕はないが滑らかな 凹面が確認できるものを砥石として扱う。包含層出土88点と遺構出土25点の計113点が出土した。使用



第13図 包含層出土石器(9)〈石庖丁⑦-Ⅴ類〉(1/3)

石材は頁岩が主である。素材の形態により I 類(定形砥石)・Ⅱ類(不定形砥石)・Ⅲ類(自然礫砥石) に大別できる。さらに、 I 類~Ⅲ類は大きさによってA・B 類に細分できる。ただし、石庖丁と同じく 磨製石器の特徴として、研磨によって製作当初より変形する可能性があるので、必ずしも有効な分類基準となり得ないかもしれない。

また、研磨痕跡として考えられるものは、肉眼観察による分類になるが、凹凸著しく線状に深く残る「線状痕(a種研磨痕)」・擦傷のように細く浅く残る「擦痕(b種研磨痕)」・光沢面として残る「光沢痕(c種研磨痕)」の3種に細分できる。

以下にI~Ⅲ類の大分類とA・B類の小分類の組合せによる本遺跡の砥石分類を示す。

I類「定型砥石」(173~214) …使用の段階でそうなったのかもしれないが,直方体などの整った形態に整形した一群。断面形の形状によってIA類(柱状砥石)とIB類(板状砥石)に小分類できる。

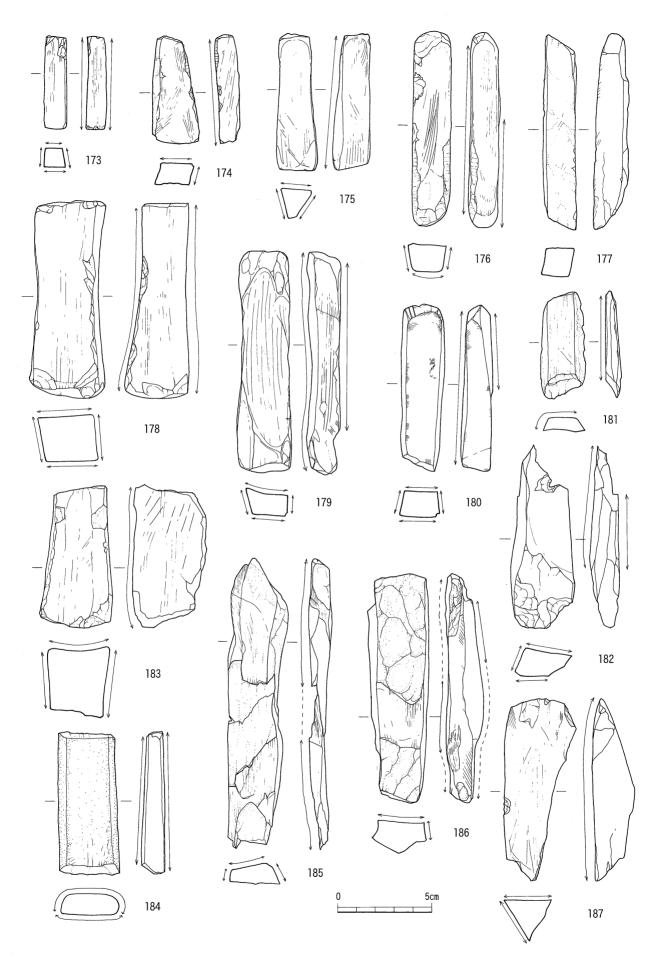
I A類「柱状砥石」(173~187) …断面の長辺と短辺の比率が2を超えないもの。研磨面は4面にわたるものが多い。研磨各面は縦と横方向からの往復運動によって中央部が凹面状に窪むものが多い。研磨痕跡はほとんどがc種研磨痕でわずかにb種研磨痕が認められる。

176は凹面状ではなく平面状の研磨面をもち、中央部にこのタイプでは珍しく a 種研磨痕をもつ。177は明確な研磨痕が認められず、砥石使用前段階や使用初期段階の可能性がある。175・187は直方体ではなく、3 面が研磨面の三角柱タイプである。185は裏面が剥離のためか研磨が認められない。 I B 類に入る可能性もある。186は185同様、剥離がいたる箇所にあるが、わずかに残った側面と裏面から柱状のプロポーションが想定できる。

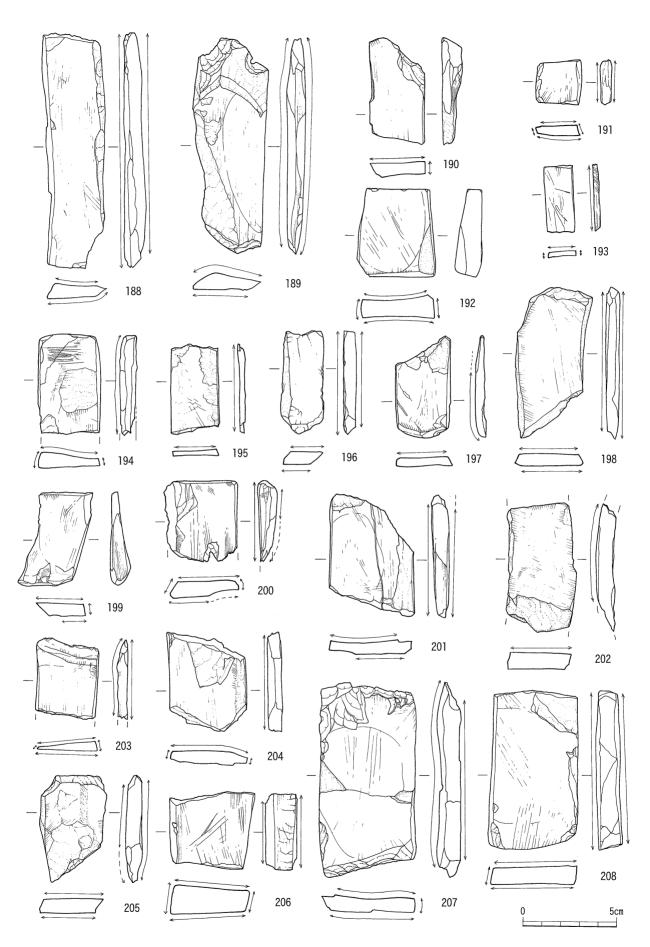
I B類「板状砥石」(188~214)…断面の長辺と短辺の比率が2を超えるもの。頁岩を主要石材とする。 **I A**類が完形に近い残存状況に比べ,折れて欠損しているものが多い。研磨面は4面(191・192・193・200・203・206・208・210~214)のものもあるが,1~3面のものが多い。面積の広い表裏面を研面として使用するのは理に適った行為であるが,時として厚さ2mmにも満たない側面を研面として使用している場合がある。研磨各面は緩やかに中央部が凹面状に窪むものがあるが,平面状のものが多い。研磨痕跡は**I A**類同様,ほとんどが c 種研磨痕でわずかに b 種研磨痕が認められる。 b 種研磨痕に見られる研磨方向は縦方向と斜方向が主である。

192・202・210は緑色頁岩製の砥石である。192・210は、折れているが I A類のように研磨面が凹面 状に窪む。194は表面に横方向の a 種研磨痕をもつ。205は剥離が著しいが、わずかに残る研磨面に a 種 研磨痕が認められる。206は粘板岩製で、ツルツルの光沢面に不定方向の b 種研磨痕が認められる。212 は表面の研面に凹面状 2 つの窪みがあり、その 1 つには明瞭な a 種研磨痕が認められる。

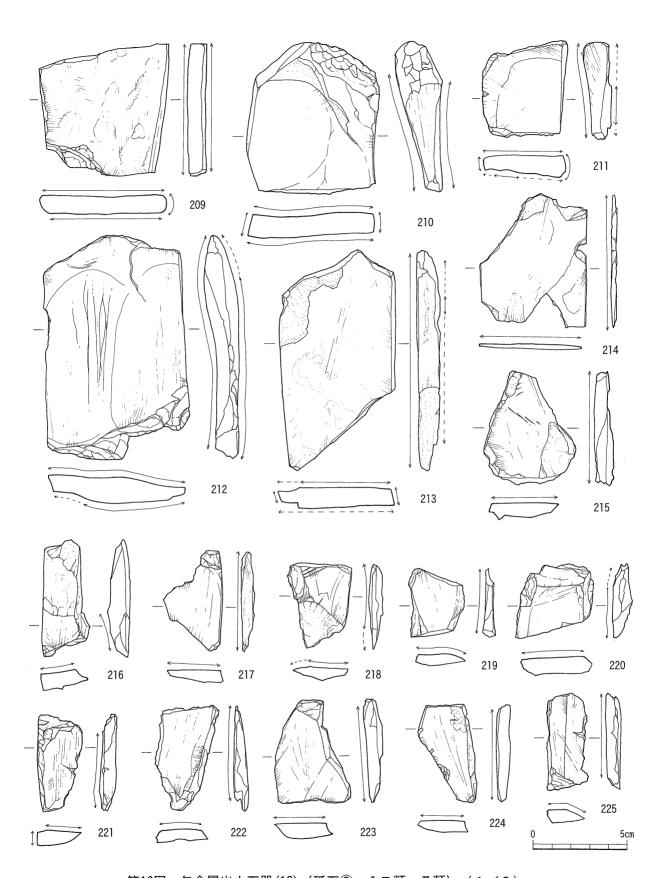
■類「不定形剥片砥石」(215~236) …本来 I A類か I B類であったものが、何らかの衝撃により剥離し、剥片状になったと考えられる一群。その多くが剥離によって裏面に研磨痕をもたない。石材は頁岩が主である。研磨各面は緩やかに中央部が凹面状に窪むものがあるが、平面状のものが多い。研磨痕跡はほとんどが c 種研磨痕と b 種研磨痕が認められる。 b 種研磨痕に見られる研磨方向は縦方向と斜方向が主である。



第14図 包含層出土石器(10)〈砥石①-IA類〉(1/2)



第15図 包含層出土石器(11)〈砥石②-IB類〉(1/2)



第16図 包含層出土石器(12)〈砥石③-ⅠB類・Ⅱ類〉(1/2)

216・217・218・221は側面が平坦であり、 I 類の定型砥石の破片であると推測される。225は表面に 赤色の斑文が認められる。鉄分の付着であろうか。218・223・224は斜方向の a 種研磨痕が認められる。 227は一度剥離した剥離面を、再度研面として利用した形跡がある。238は剥離した剥片に若干の加工を 施し、手になじむような大きさにしている。表面全体に斜方向の b 種研磨痕が認められる。

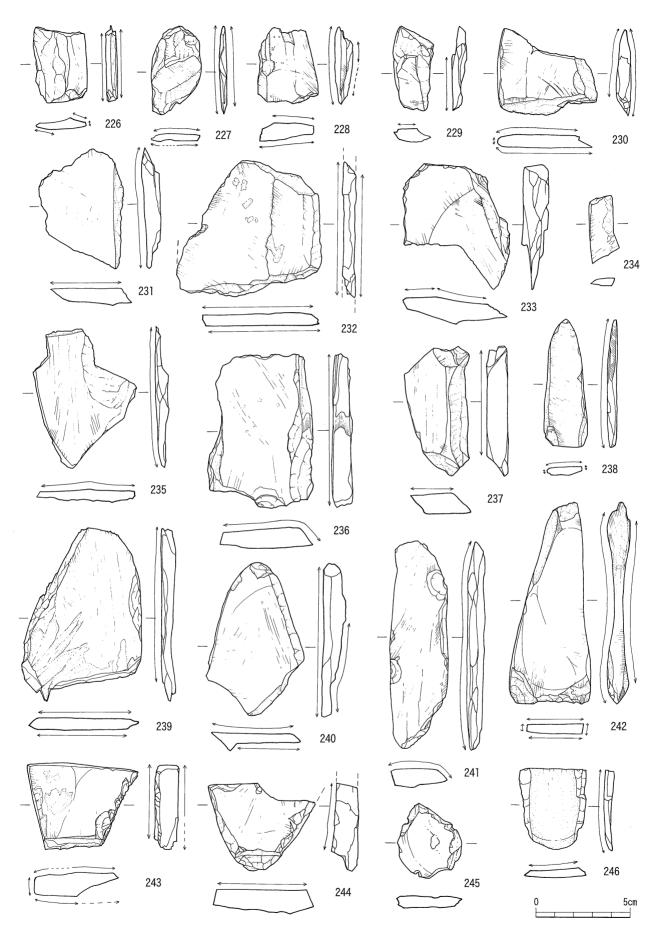
Ⅲ類「自然礫砥石」(236~260) …自然礫をほとんど加工せずに砥石に転用したと考えられる一群。 主な使用石材は頁岩であるが、大形のものには砂岩などが用いられている傾向がある。使用する礫の大きさによって、ⅢA類(棒礫状砥石)・ⅢB類(台石状砥石)に細分できる。

Ⅲ A類「棒礫状砥石」(236~259) …全長 8~15cm前後の縦長で,手に持てる程度の棒状礫を利用した砥石。主たる使用石材は頁岩である。研磨面は表裏の 2 面のものが多い。研磨面は,他類と同じく平坦状のものと凹面状のものがあるが,凸面状のもの(241・243・249・250・251・252・254・255・259)が多いことを 1 つの特徴として挙げることができる。これは砥石を置いて用いたのではなく,手に持って使用した可能性がある。

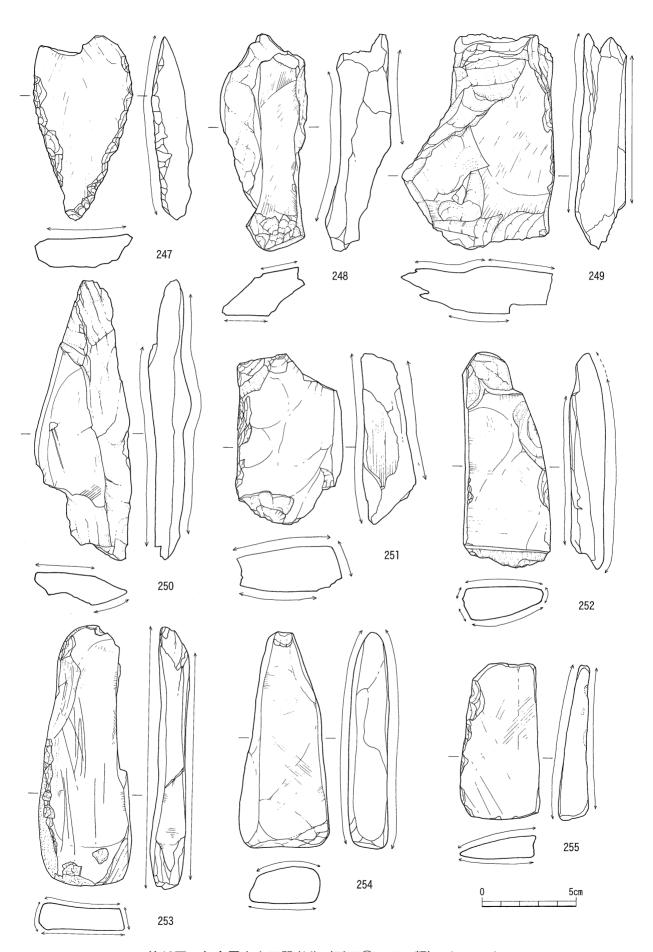
239の表面下部には斜方向の浅い樋状剥離が数条確認できる。これは砥面の上から施されており、彫刻刀のような鋭利で硬いもので削ったと考えられる。241は側縁の1つが平坦状になっており、石庖丁の背部のようでもある。242は頁岩製で4面の研磨面をもつ。表裏面は特に縦の往復運動による摩耗が著しい。IB類と特徴が共通するようであるが、端部の厚さから考えると、本来棒状の自然礫であったと考えられる。243は右側縁に剥離が施されている。246は畦原型細石刃核を砥石に転用している可能性がある。後述するが、畦原型細石刃核は本遺跡で多数確認されており(第Ⅱ章−第6節参照)、本来下那珂遺跡に存在したものだと考えられる。旧石器時代の石器を弥生人が拾い、別の石器として再利用するという偶然の事象を示す可能性がある。256~259は4もしくは2面の研磨面をもち、大振りで厚さの厚い礫を用いているが、手に持てる大きさであることからⅢA類に分類する。258は表面に敲打痕が残り、敲石としての使用が考えられる。

ⅢB類「台石状砥石」(260~265) …大振りな礫を利用した砥石。大形のものが多く,据え置いて利用したと考えられる。使用石材はほとんどが砂岩である。研磨面は主にc種研磨痕である。特に**Ⅲ**B類に認められるc種研磨痕は光沢があり,手触りが非常に滑らかである。

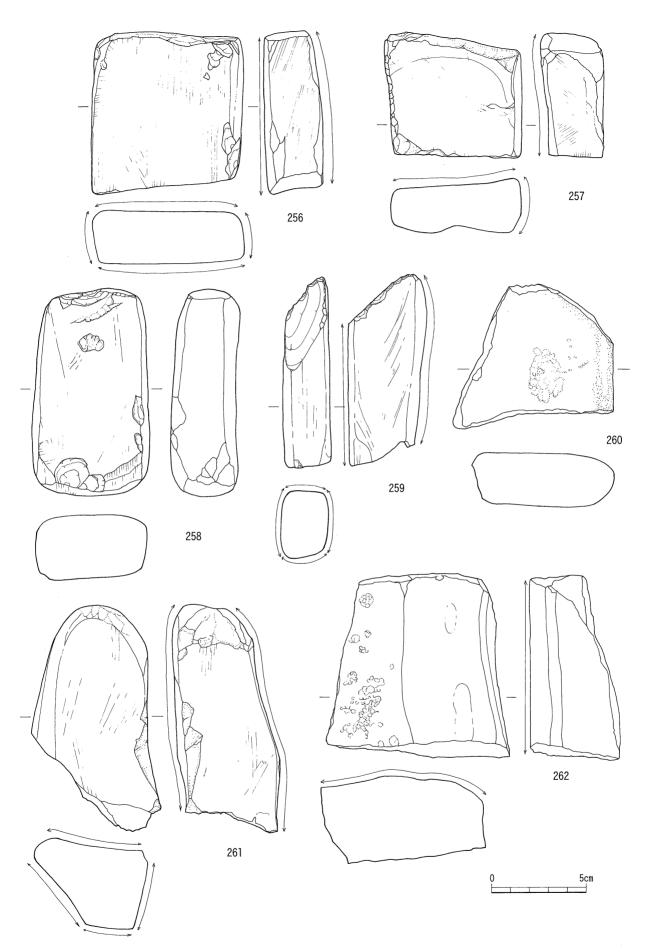
260は砂岩製であり、明確な研磨面はないが、表面中央部に赤化が認められる。261は砂岩製で、変則的な4面の研磨面をもつ。各研磨面は皿状に窪んでおり、うち3面は窪みの中心部が赤化している。262は細かい研磨面が5面ある。各研磨面は縦方向の往復運動によって出来たと考えられる。264は両側端中央部が打ち欠かれており、石錘に使用されていたと考えられる。両側面はc種研磨痕による研磨面が認められる。



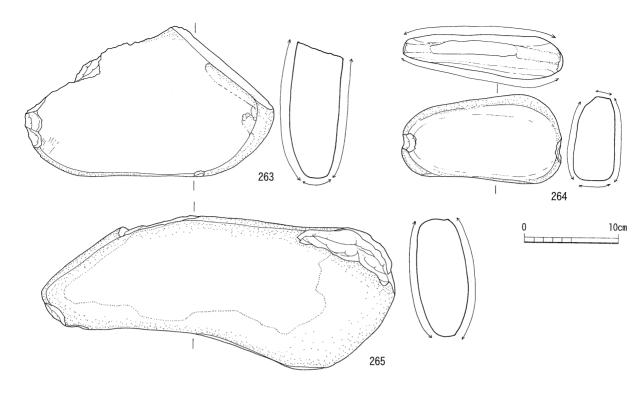
第17図 包含層出土石器(13)〈砥石④-Ⅱ類・ⅢA類〉(1/2)



第18図 包含層出土石器(14)〈砥石⑤一ⅢA類〉(1/2)



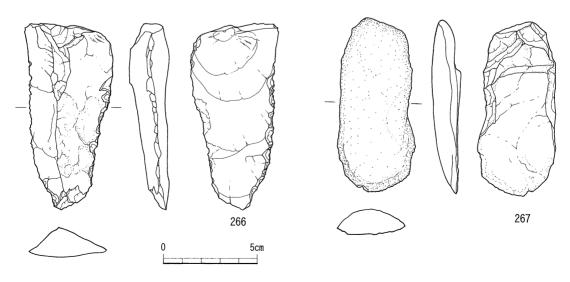
第19図 包含層出土石器(15)〈砥石⑥一ⅢA類・ⅢB〉(1/2)



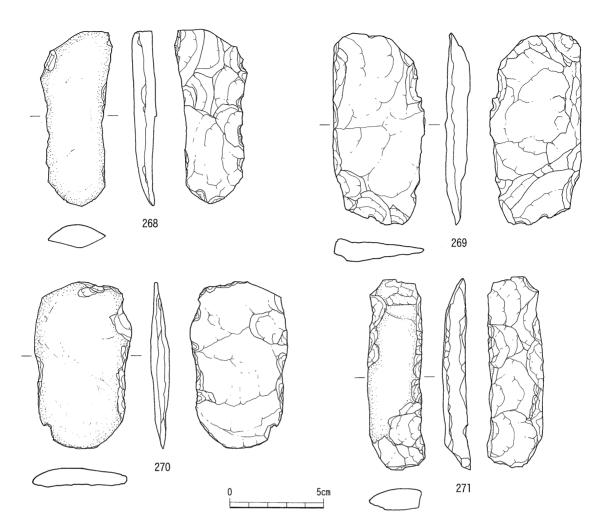
第20図 包含層出土石器(16)〈砥石⑦-ⅢB類〉(1/4)

■削器(第21図・第22図-266~271)

6点出土した。いずれも包含層出土である。石材はホルンフェルス・凝灰岩など比較的硬質なものを用いる。自然礫から打ち剥がした縦長長方形礫片を素材とするため、267~271の一面には自然面が残る。縦長長方形礫片素材の長辺部、つまり両側縁を細かく打ち欠いて刃部を作出している。266は、自然礫を用いたというより縦長剥片素材を用いた削器であり、他の削器と比して刃部の剥離が微細である。旧石器~縄文時代の削器の可能性がある。267は剥離が上部分に集中しており、刃部というより握部を作っているようにも見える。下部分は石核から剥離した時のままであるが、このままの状態で鋭利な刃部を作出している。269は、他に比して素材片が薄く、片側縁に使用痕ともとれるような刃部が作出されており、石庖丁の製作途上の失敗製品とも考えられる。



第21図 包含層出土石器(17)〈削器①〉(1/2)



第22図 包含層出土石器(18)〈削器②〉(1/2)

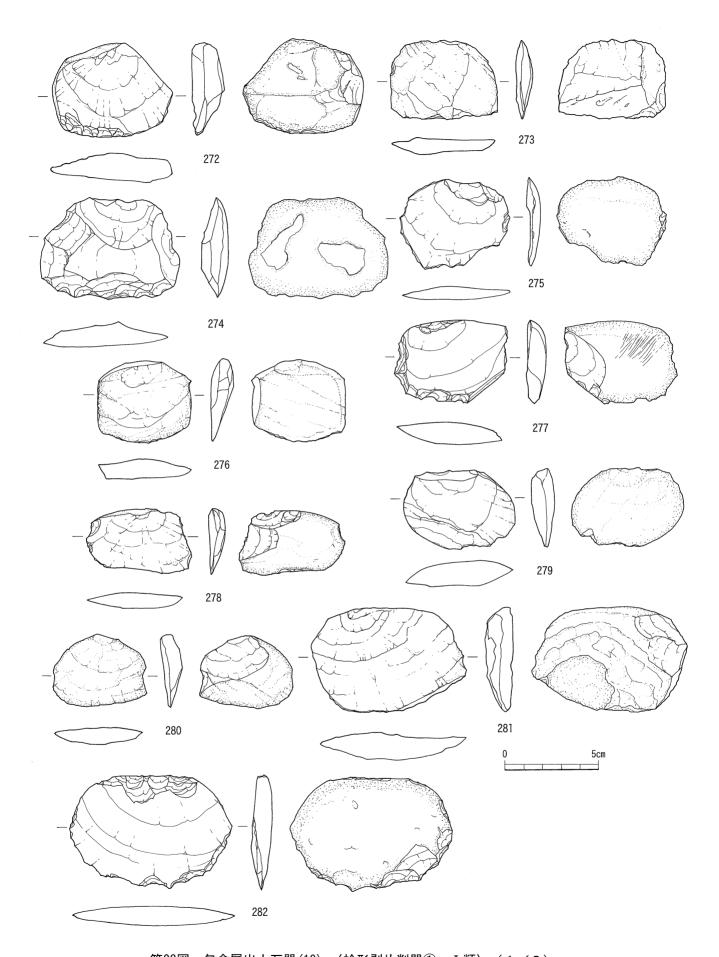
■蛤形剥片石器(第24図~第27図−272~302)

42点出土した。遺構出土(390・408・809)及びアカホヤ火山灰層下層(1160・1161)の計6点を除いては包含層出土である。砂岩・凝灰岩・ホルンフェルス・緑色珪質岩などの自然礫(特に円礫)を母岩とする。自然礫の端部を打ち剥がした周縁の鋭い剥片を利用する剥片石器である。多くは周縁の一部に刃部としての加工痕跡や使用痕跡が認められ、削器・使用痕有る剥片・二次加工有る剥片等の範疇に入ると考えられる。一方で、一部は加工痕跡や使用痕石が認められず、石器と認識しづらいものもある。しかし、いずれも素材剥片形態が類似しており、「蛤形剥片石器」というカテゴリーを設けることとする。大きさは4~11cmとばらつきがあるが、大サイズ(10cm前後)・中サイズ(7cm前後)・小サイズ(5cm前後)と大きく3つに分類できる。

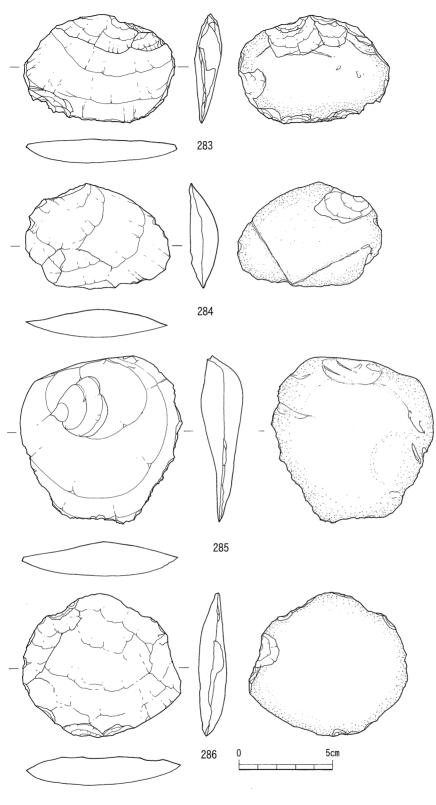
また、これらの一群は、剥片の作出方法や形態によってⅠ~Ⅲ類に分類できる。

I 類 (272~293) …円礫の自然面を背面とする剥片を素材とする。平面は楕円形,断面楔形となる。 上縁は,(A)打面調整が行われていないもの(272~288)と(B)打面調整が行われているもの(289~293)がある。どちらかといえば打面調整を行わない傾向にある。

側縁から下縁にかけて刃部調整が行われているものが多く、 272・274・277・282・283・285・287・



第23図 包含層出土石器(19) 〈蛤形剥片削器①-I類〉(1/2)



第24図 包含層出土石器(20) 〈蛤形剥片石器②- I 類〉(1/2)

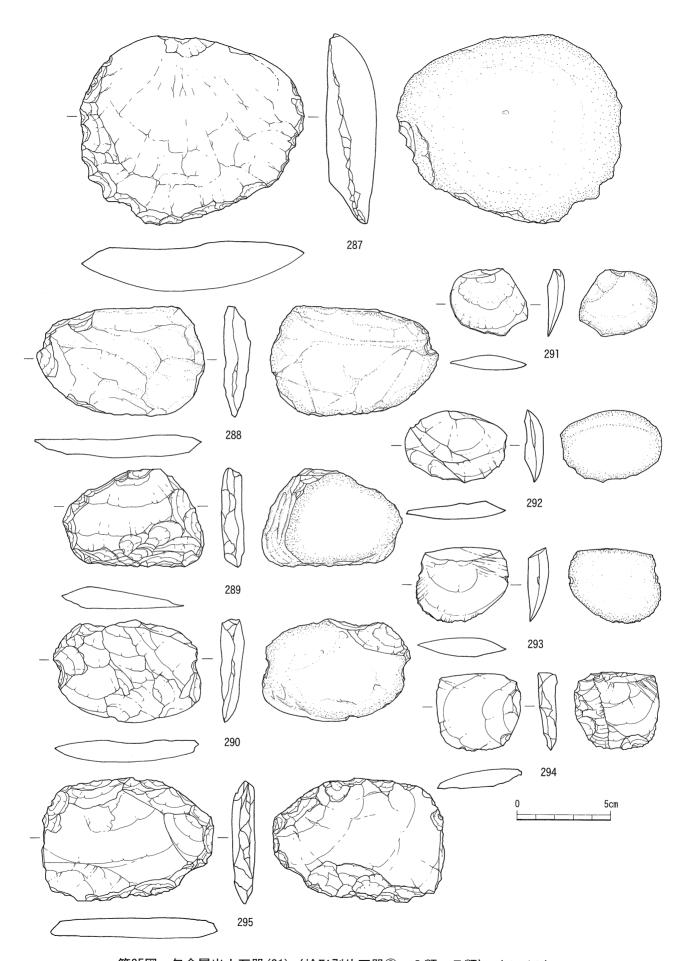
289には明確な剥離が施されている。大サイズ~中サイズの比較的大型のものに刃部調整が行われている傾向がある。

277は、背面の自然面に砥石に認められる線状痕(a種研磨痕)が認められる。砥石機能の兼用、砥石に転用、砥石に転用、砥石がら転用といった可能性が想定できる。288は、両側辺中央部に抉りらしき調整が認められ、石庖丁未製品や類似品の可能性がある。

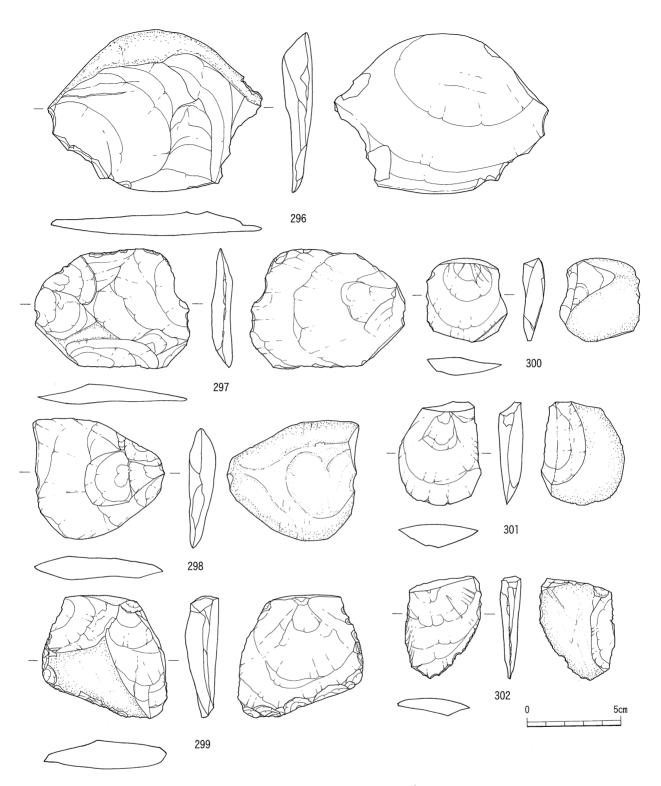
Ⅱ類(294~297・390) … 一度, 自然礫を片面とする 剥片を剥離した後, その片 面を剥離した剥片を素材と する。背面が自然面でなく 剥離面であること以外, I 類との大きな相違点はない。 I 類同様, 剥片作出時に, (A) 打面調整が行われてい ないもの (296・297・390), (B) 打面調整が行われてい るもの (294・295) がある。 明確な刃部調整は認められ ないが、いずれも側縁から 下縁にかけて使用痕及び微 細な剥離が認められる。

294は、一度目の剥離作業 から90°打面を転移して剥 離作業を行っている。

皿類 (298~302) …縦長剥片を素材とする。素材剥片が縦長であること以外, $I \cdot II$ 類との大きな相違点はない。(A) 打面調整が行われていないもの (298・408), (B) 打面調整が行われているもの (299~302) がある。横長剥片素材よりも打面調整を行う傾向がある。

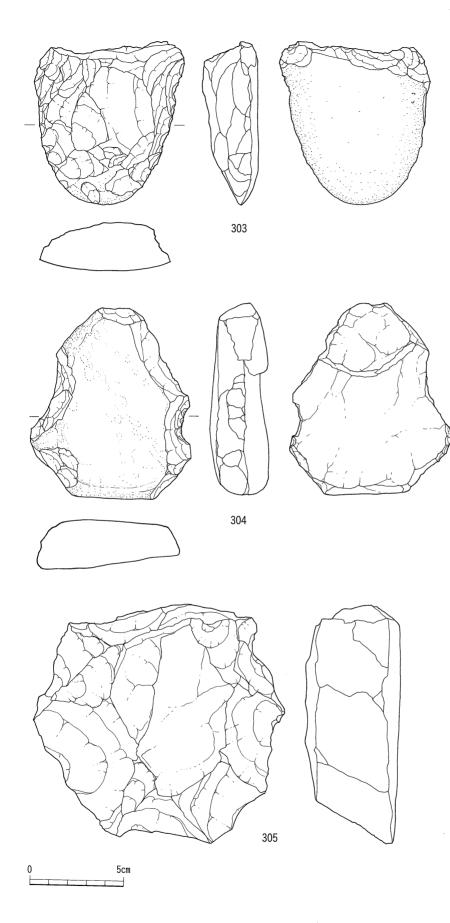


第25図 包含層出土石器(21) 〈蛤形剥片石器③一Ⅰ類・Ⅱ類〉(1/2)



第26図 包含層出土石器(22)〈蛤形剥片石器④-Ⅱ類・Ⅲ類〉(1/2)

包含層以外出土のものは,縄文時代早期と考えられる礫群中から1点,縄文時代早期の集石遺構中から1点,弥生時代後期の竪穴住居跡中から3点,弥生時代以降の時期不明土坑から2点,アカホヤ火山灰層以下の包含層(下那珂基本層序の第VI層)から2点である。主に縄文時代早期に属するものと弥生時代後期に属するものがあると考えられるが,両者を形態及び製作技法的な観点から区別することは現段階では難しい。しかしながら,288は両側辺中央部の抉りらしき調整から,石庖丁との関連が想起でき,弥生時代に属するものが少なからず存在することが推定される。

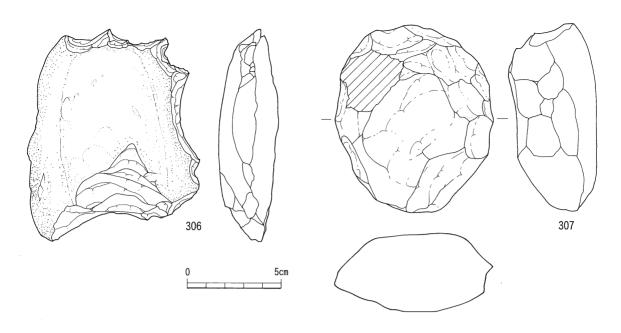


■礫器(第27図・第28図-303~307・409)

6点出土した。うち1点はSA39出土(409)である。石材は泥岩・砂岩・溶結凝灰岩・ホルンフェルスなど多様性がある。用途は、長さ8~15cmと手に握ることのできる大きさであることから、手に握り用いて温をできる大きなであるできる大きなであるでから、手に握り用い径10cm以上の大型礫の一部からによりで乗りたで乗りたで乗りたがした。いずれも周縁を大きくりの大型である。な作出する。を作出する。

307は長径10cm程のホル ンフェルス製円礫の周縁を 打ち欠いている。303~306 は大型礫の礫片を打ち欠い て作られている。刃部を作 出する面にはヴァリエイショ ンがあり、自然面のみを加 工する (304・306) ・剥離 面のみを加工する (303・ 305・409) パターンがある。 前掲した蛤形剥片石器との 違いは,素材剥片の厚さと もいえるが, 部分的に刃部 作出を行う蛤形剥片石器に 対し周縁全体に刃部作出を 行うところにある。

第27図 包含層出土石器(23)〈礫器①〉(1/2)



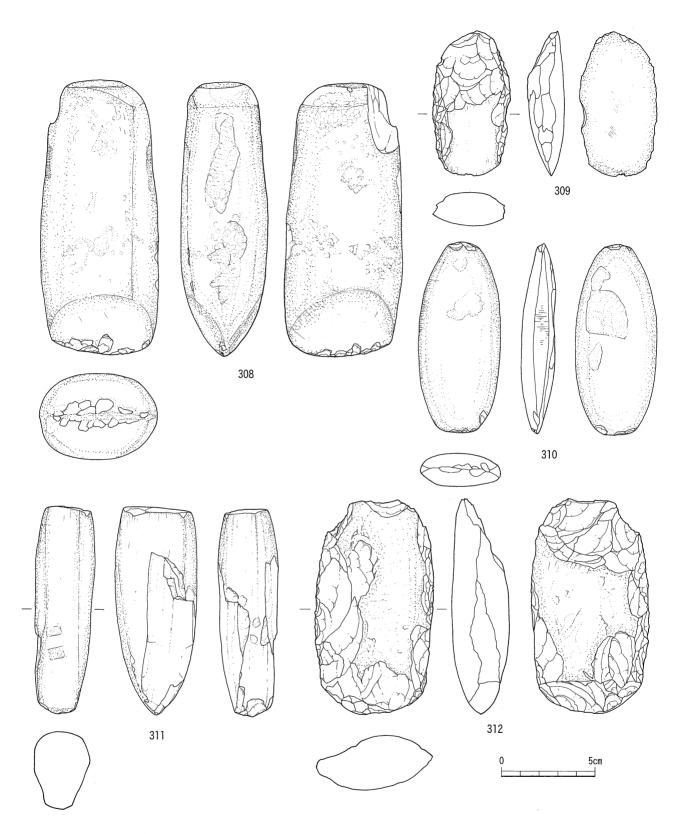
第28図 包含層出土石器(24)〈礫器②〉(1/2)

■磨製石斧 (第29図-308~312)

磨製石斧は5点出土した。いずれも表採及び包含層出土である。個数は少ないが,太型蛤刃石斧や柱状片刃石斧など多様性のある出土となった。308は太型蛤刃石斧である。基部及び刃部の一部が欠損しているがほぼ完形である。刃部の欠損状況は使用痕跡と考えられる。全長約14cm,断面形は厚さ4.5cmの楕円形を呈する。所々に敲打痕が残るが,全体的に丁寧な研磨が施されている。309は全長約8cmの小形石斧である。基部の片面が打製であるが,基部の片面及び刃部は丁寧な研磨を施している。310は全長約10.3cmの小形石斧である。平面形態は杏仁形を,断面は長楕円形を呈する。全面に丁寧な研磨を施しており,特に刃部は鋭利に仕上げている。311は柱状片刃石斧である。基部の側縁が剥落しているが,ほぼ完形である。断面形は隅丸長方形で,基部に抉りをもたないタイプである。308同様,刃縁の磨滅が著しく,頻繁な使用が考えられる。312は打製というべきか,磨製というべきか難しい石斧である。刃部及び側縁は打製によって刃部作出が行われているが,その他の面は研磨によって調整が施してある。磨製石斧の製作途上品の可能性もある。

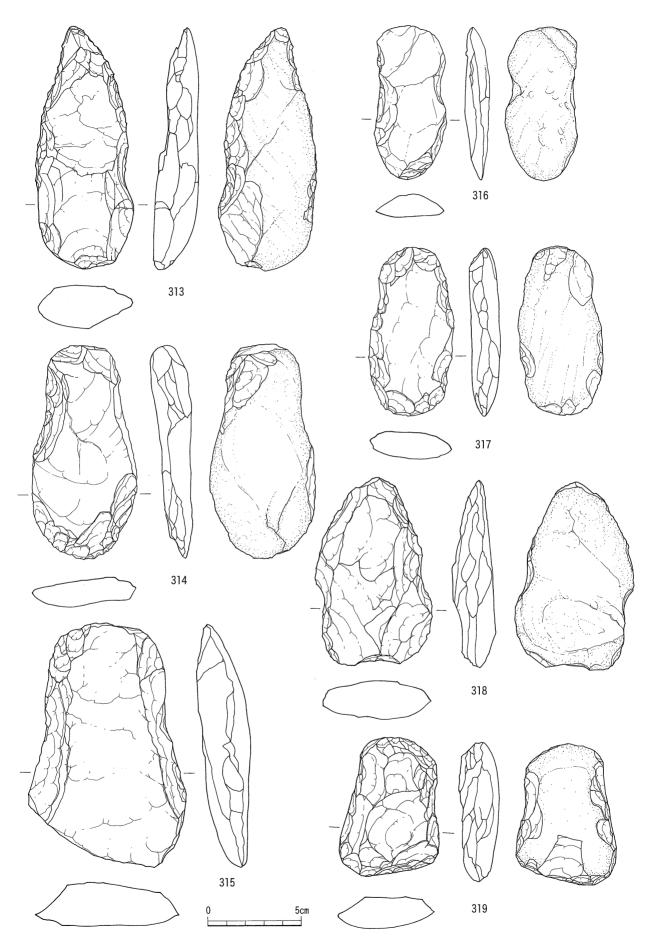
■打製石斧(第29図~第31図-313~323・425)

打製石斧は12点出土した。12点中SA11出土(425)の1点を除いて表採及び包含層出土である。石材は頁岩やホルンフェルスを主とする。いずれも、礫器のように自然礫及び大型礫の一部から打ち剥がした礫片を素材として用いる。素材を大まかな剥離で整形した後に側縁及び刃部を細かい剥離で調整する。平面形態には若干のバラエティーがあり、基部が尖る涙滴形のもの(313・318)・基部が丸く両側縁に抉りをもつ撥形のもの(314~317・319・320)・基部が両側縁に丸く抉りをもたない長楕円形のもの(321・322)がある。また、刃部の作出方法にもいくつかの方法があり、自然面と剥離面研磨による両刃タイプ(322)・自然面と打製剥離による両刃タイプ(313・314・316~318・320)・両面打製剥離による両刃タイプ(319・321)がある。315・323は刃部欠損のため不明である。また、320は、刃部欠損したものを再利用したものなのか切断面を刃部として利用したものなのか判断が難しい。

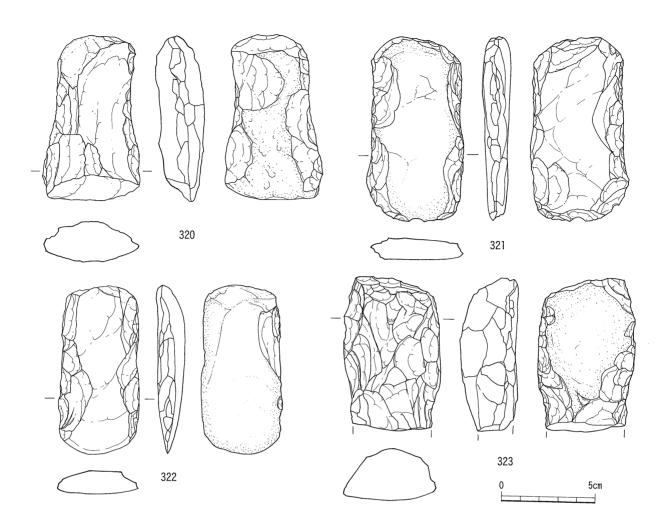


第29図 包含層出土石器(25)〈磨製石斧·打製石斧①〉(1/2)

側縁の抉りは、握槌の握部や石斧の柄との装着部の可能性が考えられる。全国的にはこのような形態 を石鍬として扱い、宮崎県域では打製石斧として扱うことが多い。今回は打製石斧として扱ったが、石 鍬としての可能性も大いにある。



第30図 包含層出土石器(26)〈打製石斧②〉(1/2)



第31図 包含層出土石器(27)〈打製石斧③〉(1/2)

■ 敲石・凹石・磨石・石皿・台石 (第32図 - 324~338)

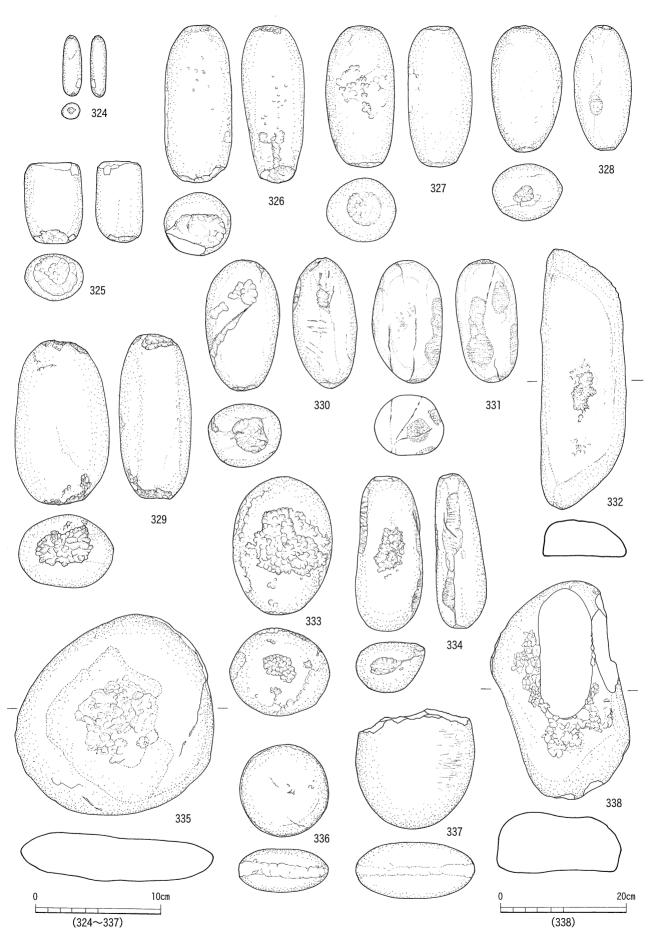
34点出土した。そのうち遺構出土は19点と全体の約56%を占めている。石材が凝灰岩である磨石以外の敲石・凹石・台石は、使用石材のほとんどが砂岩である。

敲石(324~331) は基本的に棒状の砂岩を用い、上下両端に敲打痕をもつ。中には上下端の敲打痕の他に表裏面の中心部に敲打による窪みをもつものがある(332~334)。敲石と凹石の兼用と考えられる。また、331は上下端の敲打痕の他に側縁部分に磨痕が認められる。

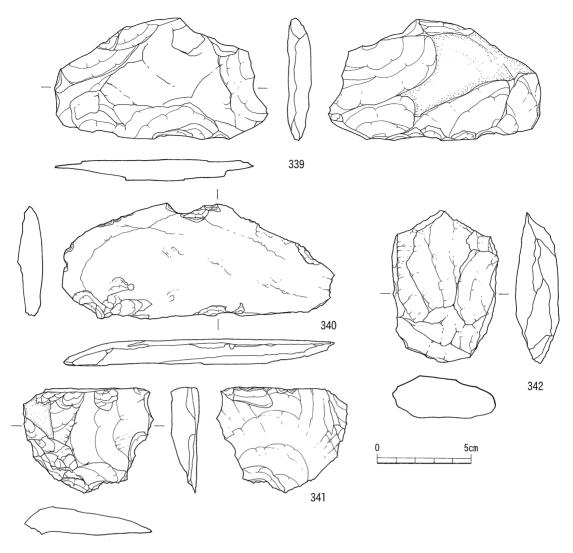
凹石(332~335) は敲石と同じ棒状の砂岩を用いるもの(332・335) と球状の砂岩を用いるもの(333) がある。333は表面中央部に敲打痕があるが大きな窪みはなく, 敲石的な要素が強い。334は表面中央部の敲打痕だけでなく, 側縁に磨痕が認められる。

磨石(336・337)は凝灰岩の扁平な円礫を用いる。336は表裏面一面に磨痕が認められ、周縁に敲打痕が認められる。337は一部欠損しているが、表裏面全面に磨痕が認められ、一部擦痕が残る。

石皿(338) は砂岩製の大振りの礫を用いる。表面には敲打痕と磨痕が、裏面には磨痕が、側面には研磨痕が認められる。表面は台石として利用された後に石皿として再利用されたと考えられる。この石皿は、遺構外出土であり帰属年代が不明であったが、側面の研磨痕から砥石としての利用が想定され、弥生時代に属すると考えられる。



第32図 包含層出土石器(28)(敲石・凹石・磨石・石皿・台石) 〈1/3・1/6〉



第33図 包含層出土石器(29) 〈剥片石器・礫器〉(1/2)

■その他(第33図-339~342)

339はホルンフェルス製の剥片石器である。横長剥片を素材とし、周縁とくに下側縁に剥離を施している。大きさは全長約11cmである。大きさ、剥離の箇所から考えて石庖丁の未製品と考えられる。340は横長剥片を素材とし、下側縁に使用痕跡と考えられる剥離が数カ所、上側縁中央部に抉りらしきものが1カ所確認できる。上側縁中央部の抉りらしきものは柄の装着部であった可能性があり、石鎌の可能性がある。341は珪質岩製の削器である。下縁と両側縁に微細な剥離を施し刃部を作出している。342はホルンフェルス製の礫器である。周縁を大きく打ち欠いて調整を行っている。下部は比較的鋭利に尖っており、石斧の一種だとも考えられる。

第5節 弥生時代の調査

(1) A区の調査(第34図~第112図)

A区は南ブロックに位置し、X軸は14~24ラインを、Y軸は J~Pライン内4,200㎡の調査区である。調査は1次調査において実施した。調査前の状況は、果樹園であり、O17グリッド付近を頂部とする緩やかな傾斜地であった。最頂部のO17グリッドと最下部のJ23グリッドは高低差約6mである。調査は始めに果樹園の耕作土及び造成土の除去を行ったが、作業中におびただしいまでの弥生土器片が出土し、作業がはかどらなかった。耕作土と造成土の除去を行うと、調査区東側と南側の周縁部にのみ基本層序の第Ⅳ層以下が残っていた。他の大部分は傾斜地にも関わらず削平が行われており、アワオコシスコリア層・イワオコシスコリア層・段丘礫層(基本層序の第Ⅷ層・第IX層・第X層)が面的な広がりをみせていた。こうした状況を考えると、A区はJ23グリッド付近を舌状の先端部にもち、O17付近を頂部とする丘陵地であり、造成の状況から高低差は調査前状況の6m以上であったことが推定できる。

また、弥生時代の調査終了後、X軸M~Oライン・Y軸22~24ラインの約400㎡を掘り下げ、第VI層の調査を行った。調査の結果、遺構は検出されなかったが、旧石器時代~縄文時代早期の遺物が出土した。

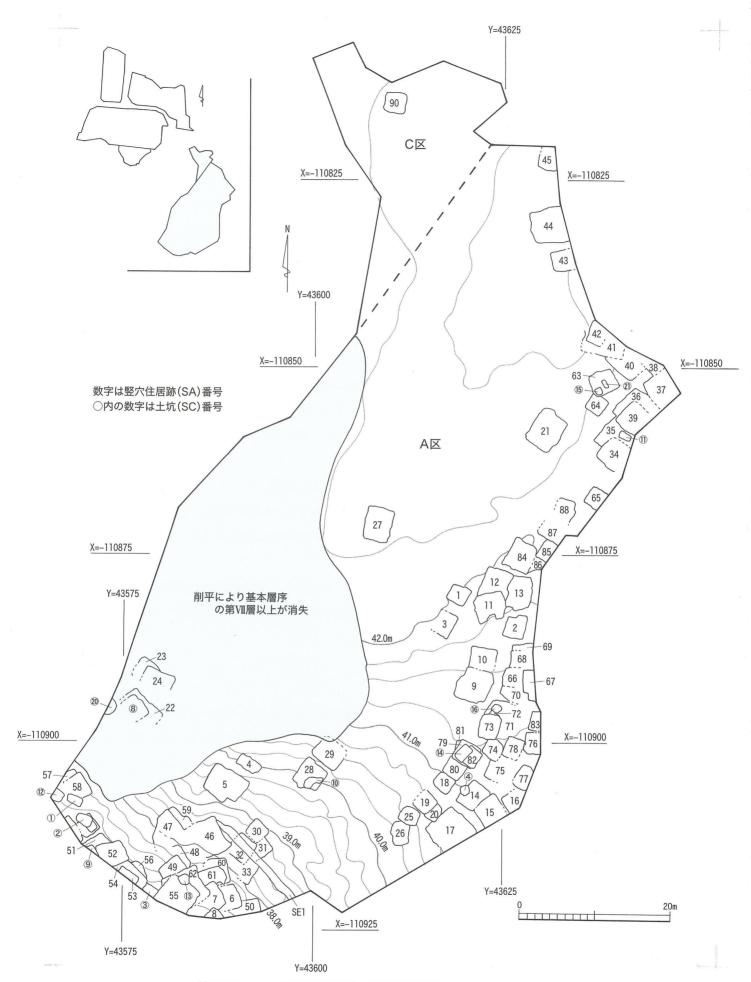
検出された遺構は竪穴住居跡89軒(SA1~SA89)・土坑21基(SC1~21)・炉穴2基・集石遺構2基・溝状遺構1条であり、出土した遺物から竪穴住居跡と土坑は弥生時代、炉穴と集石遺構は縄文時代に帰属するものと考えられる。溝状遺構については、弥生時代に属すると考えられる竪穴住居跡を切る形で検出され、それ以降の遺構と考えられる。

竪穴住居跡の遺構計測値は第1表~第3表に、土器・石器などの遺物観察表・計測表は第4表~第6表・第7表~第32表に掲載している。なお、縄文時代に帰属すると考えられる礫群と炉穴は後述「第6節 旧石器時代~縄文時代の調査」に掲載している。

■竪穴住居跡 (SA1~SA89)

A区全体で89軒検出された。住居跡は、包含層の残存状況との関係もあるが、東側から南側にかけての周縁部に集中する。竪穴住居跡群は、この周縁部に幅 $5\sim10$ m程の帯状をなし、切り合いながら検出された。竪穴住居跡は、多くの切り合いのためコーナー付近のみ検出や土坑と区別がつかないものがあり、竪穴住居跡であるかどうかの検討が充分に行えないものがあったが、多くが一辺 $3.0\sim4.5$ mの方形をなす。竪穴住居跡の主軸は、主に傾斜面に直交するように配置されている。柱穴は、4本検出されたものがSA84の1軒、2本検出が数軒と非常に少なく、ほとんどの住居跡で柱穴が検出されなかった。柱穴をもたない構造が本遺跡住居跡群の特徴の1つとして挙げられる。

A区において、竪穴住居跡群は切れ目がない程密集しているが、Mライン付近に竪穴住居跡が無い空白地帯が幅約20m程ある。ここを境界として東側をA群・南西側をB群とする。さらにA・B各群の中でも小グループが細分できる。以下にA群の北側より個別の竪穴住居跡の説明を若干くわえるが、調査時の調査方法(検出された順に遺構番号を付けた)の問題で、住居跡番号がランダムになっていることを予め断っておく。

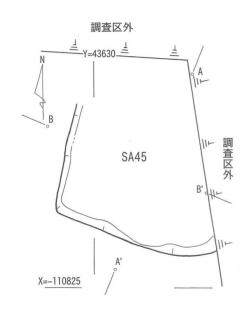


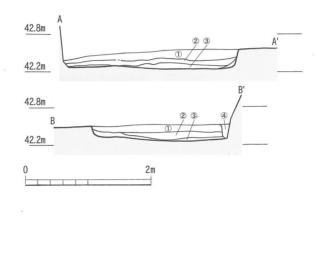
第34図 A・C区地形図及び遺構配置図 (1/1,000)

(1) A群

45号竪穴住居跡 (SA45・第35図・第36図-343~349)

遺構: A-1群の最北部, A群全体でも最北部の北東隅P14グリッドで検出された。後世の造成で北側と東側が消失しており、全体の1/3程の残存状態と推測される。平面形態は、残った南辺と西辺が直交しておらず、歪んだ四角形と考えられる。規模は不明であるが、現存する南辺が曲がり始めで集束していることや南辺長約2.6mであることを考えれば、一辺3m前後であると推測できる。遺物は遺構面全体から万遍なく出土した。



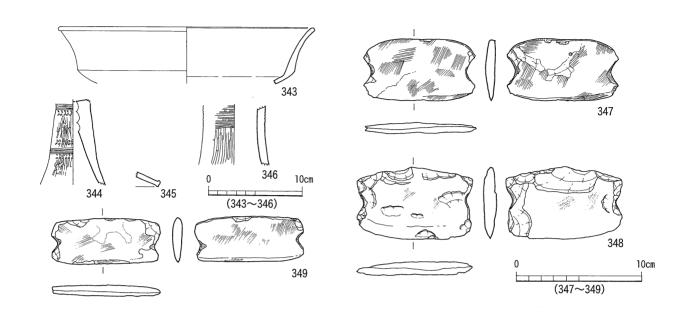


45号竪穴住居跡土層注記 (SA45)

- ①黒 褐 色 ±(Hue 10YR-2/2)…住居跡埋土。径 2 cm以下の褐色粒を少量含む。土質はやわらかく粘性がある。
- ②黒褐色土(Hue 10YR-2/2) …住居跡埋土。径2cm以下の褐色粒を多く含む。土質は①層と似ている。
- ③褐色粘質土(Hue 7.5YR-4/4)…床土もしくは初期流入土。①②層に比べ土質は硬い。
- ④黒 色 ±(Hue 10YR-2/2)…後世の攪乱土。

第35図 45号竪穴住居跡 (SA45) 図 (1/60)

遺物:343~345は高坏である。343は一度屈曲し、外反しながら立ち上がる坏部形態B類をもつ。344・345は同一個体高坏の脚部である。344は縦方向のミガキを施した脚柱部に横走する凹線文と羽状の連続刺突文を施す。345はおそらく高坏の脚裾部である。345と同様外面に羽状の連続刺突文を施し、裾端部に凹線文を施す。346は器台である。縦方向のミガキの後に脚柱部に横走する数条の凹線文をもつ。SA107出土のものなどと類似点がある。344~346は瀬戸内系凹線文の流れをくむ。347~349は石庖丁である。本遺跡では1軒の竪穴住居跡から通常1本が出土する例が多いが、この住居跡においては3本である。いずれも抉りのあるII類に分類される。347はIID類・348・349はIIC類に分類される。



第36図 45号竪穴住居跡 (SA45) 出土遺物図 (1/4・1/3)

44号竪穴住居跡 (SA44・第37図・第38図-350~364)

遺構: A-1 群の中位、P15グリッドで検出された。東辺が後世の造成で東側が消失しているが、遺構は東側の一部以外ほぼ残っている。平面形態は北辺の現存長がほぼ4.7m、西辺長が4 mであることから、方形に近い長方形であったと考えられる。遺物は西壁と中央部に若干の集中がみられる。

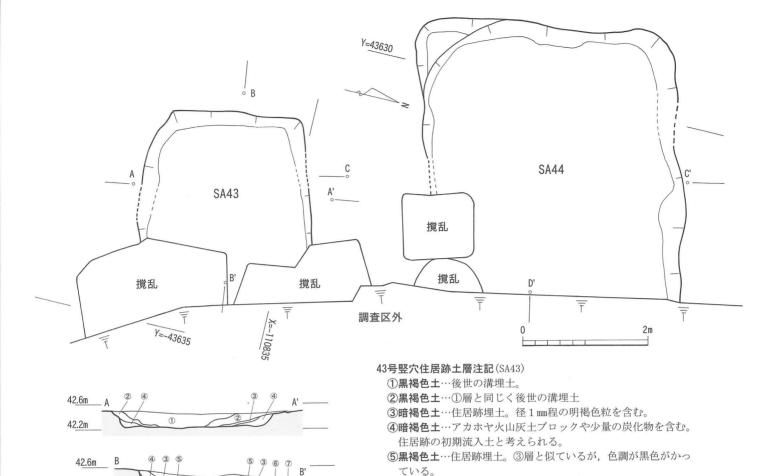
遺物:350~352は甕である。350は口唇部形態B類・口縁部形態A類・胴部形態A類の特徴をもつ甕 I 類である。351は口唇部形態B類・口縁部形態B類・胴部形態C類の特徴をもつ甕 II 類である。352は小型甕である。形状は350に似ており,甕 I 類である。353~355は壺である。354は小型壺で,口縁部形態A類・胴部形態A類・底部形態A類をもつ。357~358・361は鉢である。いずれも鉢 I C類であるが,357は底部形態B類をもつ。361は欠損しているが,欠損状態から底部形態A類かB類と考えられる。359・360・362は高坏である。359・360は小型である。362は脚裾部が膨らむ脚部形態C類で,高坏Ⅲ類と考えられる。363は石庖丁である。抉りをもつ直背直刃タイプである。刃部は比較的よく磨かれているが,表裏面は粗く打ち欠いた後に研磨を施している。抉りは浅く,未完成品のような印象をうける。364は緑色頁岩製の剥片で,石鏃などの未製品もしくは素材剥片と考えられる。

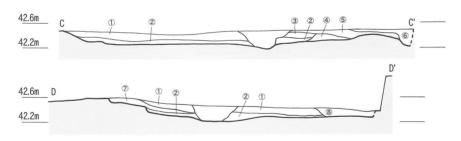
43号竪穴住居跡(SA43・第37図・第39図-365~369)

遺構: A-1 群の南部、P15グリッドで検出された。SA44同様、東辺が後世の造成と攪乱で東側が 消失しているが、遺構は東側の一部以外ほぼ残っている。平面形態は一辺約2.6mの方形だと考えられ る。遺物は中央部から北壁にかけて出土した。

遺物:365·366は壺である。366は肩部片であり、ヘラ描きに2本の沈線が確認される。366は脚台付

⑥・⑦黒色土…土質は柔らかい。後世の攪乱土。





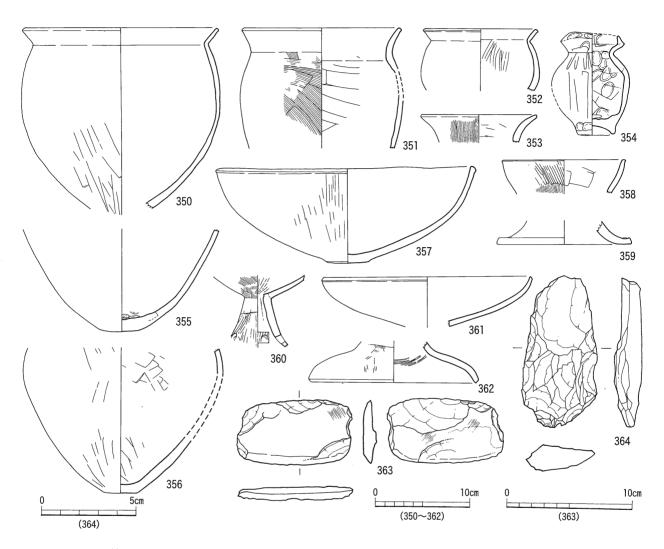
44号竪穴住居跡土層注記(SA44)

42.2m

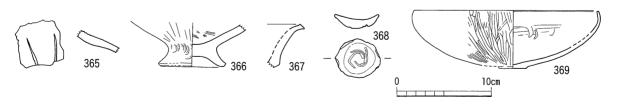
- ①黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…住居跡埋土。径1㎜程の黄褐色粒を含む。土器片を多く含む。
- ②暗褐色土 (Hue 10YR-3/3) …住居跡床土か埋土。径 $1\sim3$ cm程の褐色を含む。上層に土器片を多く含む。
- ③黒褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…住居跡埋土。炭化細粒や土器片を含む。
- ④黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…住居跡埋土。径2cm程の褐色土のブロックを含む。
- **⑤黒褐色土** (Hue 7.5YR-3/2)…住居跡埋土。炭化細粒や土器片を含む。③層と似ているが、黒色土のブロックを多く含む。
- ⑥暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…後世の攪乱土。土質はやわらかく, 土器片を多く含む。
- ⑦黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…住居跡埋土。径2cm程の褐色土のブロックを含む。②層と似ているが、色調が黒色かかっている。
- **⑧黒褐色土**(Hue 7.5YR-3/2)…後世の攪乱土。ブロック土などは含まず、堆積層と考えられる。
- (9)暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…後世の攪乱土。

第37図 43·44号竪穴住居跡(SA43·44)図(1/60)

きの底部形態A類をもつ。367・368は高坏である。367は屈曲して直立気味に立ち上がる坏部形態A類とB類の中間形態をもつ。368は脚部の補充部分と考えられる。下側に木棒で押さえた痕跡のようなものが残る。369は胴部形態C類と底部形態B類をもつ鉢IC類である。



第38図 44号竪穴住居跡(SA44)出土遺物図(1/4・1/3・2/3)

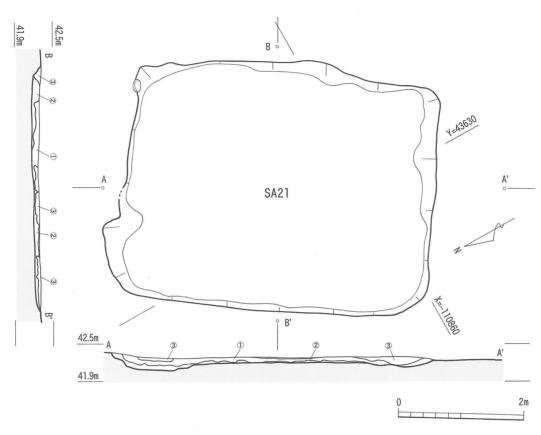


第39図 43号竪穴住居跡 (SA43) 出土遺物図 (1/4)

②A-2群…A群の中でも北東側の最東部, X軸は16~19・Y軸はP~Rライン内に位置する。SA21・34~42・63~64の12軒と土坑 3 基 (SC11・15・21) から成る。

21号竪穴住居跡 (SA21・第40図・第41図-370~387)

遺構: A-2群中でも他の密集地から少し離れてP17グリッド南西部に単独で位置する。上部が削平によりほとんど消失しており、検出面からの深さは約10cm前後と浅い。しかし、遺構面全体の床面付近から多くの遺物が検出された。平面形態は約南北5m×東西4mと長方形を呈し、床面積は18.9m²を測る。



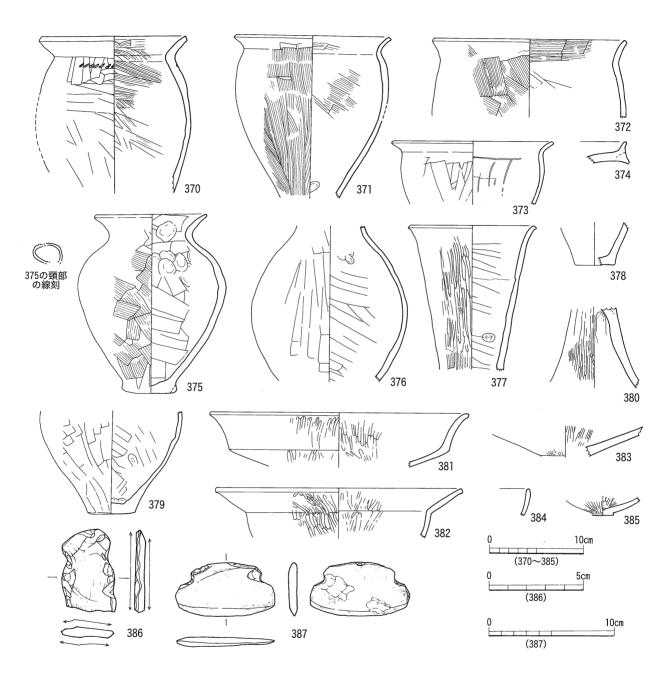
21号竪穴住居跡土層注記(SA21)

- ①黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…住居跡埋土。径3cm以下の黄褐色ブロックを含む。
- ②暗褐色土 (Hue 10YR-3/4) …住居跡床土。径 5 cm以下の黄褐色土ブロックを含む。
- ③黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。やわらかく、しまりがない。

第40図 21号竪穴住居跡 (SA21) 図 (1/60)

遺物:370~373は甕である。370・371・373は頸部で明瞭に屈曲する甕Ⅱ類である。370は頸部に斜位の連続刻文を施している。371・373は胴部形態C類,370は胴部形態D類の特徴をもつ。更に373の口唇部は凹面状にくぼむ口唇部形態A類である。372は緩やかに屈曲する口縁部形態B類である。374~378・379は壺である。374は二重口縁壺の二次口縁部であり、楔状の連続刺突文が施されている。375は緩やかに外反する口縁部形態D類・胴部形態A類に円盤状貼付底系の平底をもち、壺IV類である。肩部付近にはへラ描きによる円弧状の記号が認められる。377は長頸の壺V類の頸部である。378は底部と考えられるが、鉢の底部の可能性がある。380・381・383は高坏である。381は一度屈曲した後に外反しながら立ち上がる坏部形態B類である。382・383・384は鉢である。382は一度屈曲した後に外反する胴部形態

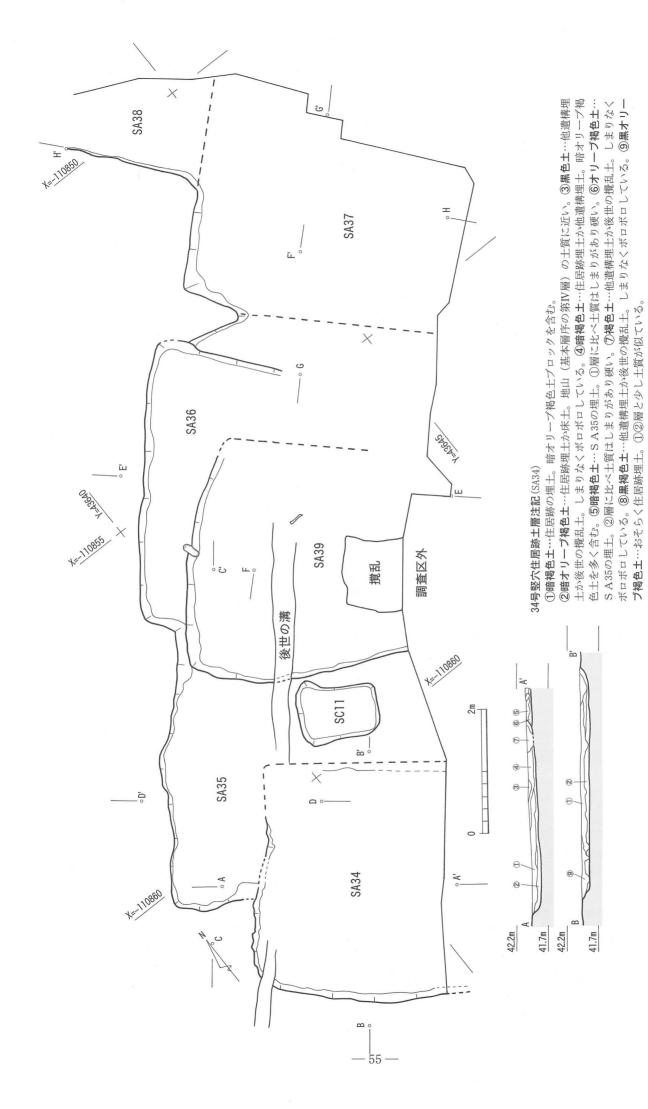
B類である。386は砥石である。頁岩製のⅡ類(不定形剥片砥石)である。両端を打ち欠き、上部に抉りをもつ。抉りに紐をかけて携帯用としていたのでろうか。387は頁岩製石庖丁である。両端に抉りをもち、比較的直線的な背部に弧状の刃部をもつ、ⅡB類に分類される。



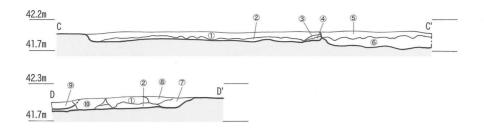
第41図 21号竪穴住居跡 (SA21) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3)

34号竪穴住居跡 (SA34・第42・43図・第44図・388)

遺構: A-2群中でも最南部, P18グリッド北東部で検出された。遺構は, SA35を北辺と西辺で切り, 南側を造成によって切られており, 一部境界が不明瞭である。平面形態は南辺と西辺を基に考えると, 方形または長方形になる。方形と仮定すると, 一辺約3.8m前後となりそうである。遺物は西壁近くに細片が数点出土したのみである。傾斜上部の壁面近くに遺物が集中しているのは, 流れ込みの可能性が大きい。

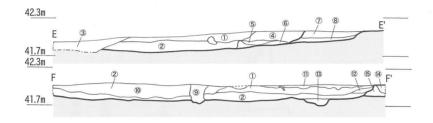


34・35・36・37・38・39号竪穴住居跡(SA34・35・36・37・38・39)・11号土坑(SC11)図(1/60) 第42図



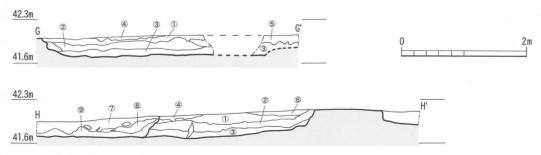
35・39号竪穴住居跡土層注記(SA35・SA39)

①黒色土…住居跡埋土。1 cm以下の炭化物と土器片を多く含む。 / ②暗オリーブ褐色土…住居跡埋土か床土。地山(基本層序の第IV層)の土質に近い。 / ③黒オリーブ褐色土…SA35構築時SA39からの流入土と考えられる。 / ④暗オリーブ褐色土…住居跡埋土。 黄褐色軽石ブロックを多く含む。 / ⑤黒オリーブ褐色土…住居跡埋土。 下部より多量の土器片をともなう。 / ⑥黒オリーブ褐色土…SA39の埋土か床土。径 3 cm以下の暗褐色土ブロックを多く含む。 / ⑦褐色土…後世の攪乱土。 黄褐色軽石ブロックを多く含む。 / ③黒色土…トレンチャーによる攪乱土。 / ⑨暗褐色土…SA34埋土。一部 ⑩黒色土層…に切られている。 / ⑩黒色土…後世の土坑らしき別遺構の埋土。



36・39号竪穴住居跡土層注記(SA36・SA39)

①黒褐色土…住居跡埋土。わずかに暗オリーブ褐色土ブロックを含む。土器片を多く含む。/ ②暗褐色土…住居跡埋土。わずかに暗オリーブ褐色土ブロックを含む。地山(基本層序の第IV層)の土質に近い。 / ③黒色土・黄褐色混合土…後世の攪乱土。しまりなくボロボロしている。 / ④暗オリーブ褐色土…住居跡埋土。黄褐色軽石ブロックを多く含む。 / ⑤開オリーブ褐色土…わずかに径2mm以下の橙色軽石粒含む。 / ②暗オリーブ褐色土…住居跡(SA36)埋土。下部に土器片を多く含む。 / ⑧暗褐色土…住居跡(SA36)埋土。褐色土ブロックを含む。 / ⑨黒オリーブ褐色土…木根による攪乱土。 / ⑩黒褐色土…おそらく住居跡埋土。①層と似ているが、木根がびっしりと生えている。 / ⑪黒褐色土…木根による攪乱土。 / ⑫黒黄灰褐色土…住居跡埋土。しまりなくボロボロしている。 / ⑬オリーブ褐色土…木根による攪乱土。しまりなくボロボロしている。



37·38号竪穴住居跡土層注記(SA37·SA38)

①暗オリーブ褐色土…住居跡埋土。わずかに暗オリーブ褐色土ブロックを含む。土器片を多く含む。 / ②黒オリーブ褐色土が口ックを含む。土器片を多く含む。 / ②黒色褐色土が住居跡床土。暗黄褐色土ブロックを含む。 / ③黒色褐色土…住居跡床土。暗黄褐色土ブロックを含む。 / ⑤黒黄褐色土…住居跡床土。暗黄褐色土ブロックを含く含む。 / ⑤黒黄褐色土…住居跡埋土。しまりがあり硬い。 / ⑥暗オリーブ褐色土…住居跡床土か埋土。③層と似ているが硬い。 / ⑦黒色土…後世の攪乱土。しまりがなくボロボロしている。 / ⑧暗褐色土…後世の攪乱土。炭化粒を多く含む。 / ⑨暗褐色土…後世の攪乱土。⑧層と似ているが、褐色土ブロックを多く含む。

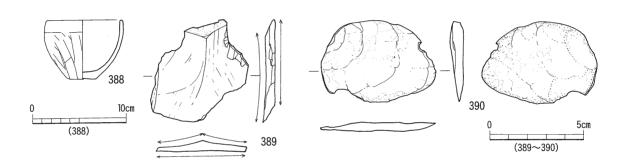
第43図 35・36・37・38・39号竪穴住居跡 (SA35・36・37・38・39) ・11号土坑 (SC11) 土層断面図 (1/60)

遺物:388は小型の鉢である。内湾しながら立ち上がる口縁部に平底の底部をもち、器面調整は、外面工具ナデ・内面ナデを施している。

35号竪穴住居跡 (SA35・第42・43図・第44図-389~390)

遺構: A-2群中で南側, P17グリッド南東側で検出された。SA34に南東側, SC11に東側, SA39に北東側を切られており, 当群中で古い段階のものと考えられる。多くの遺構に切られており, 規模・平面形態は不明であるが, 平面形態は南辺と西辺を基に考えると方形または長方形になり, 一辺約3.6 m前後と推測される。遺物はSA34と同じく傾斜上面に細片が数点出土しており, 同様に流れ込みの可能性が大きい。

遺物:389は頁岩製の砥石である。不定形剥片素材のⅡ類であり、表裏面ともに研磨痕が確認できる。 上部に石匙に付くような摘みのようなものがある。紐でも掛けて携帯用にしていたのであろうか。390 は砂岩製の蛤形剥片石器である。片面に自然面を残すⅠ類である。縄文時代早期に属する遺物の可能性 もある。



第44図 34·35号竪穴住居跡 (SA34·35) 出土遺物図 (1/4·1/2)

36号竪穴住居跡(SA36・第42・43図)

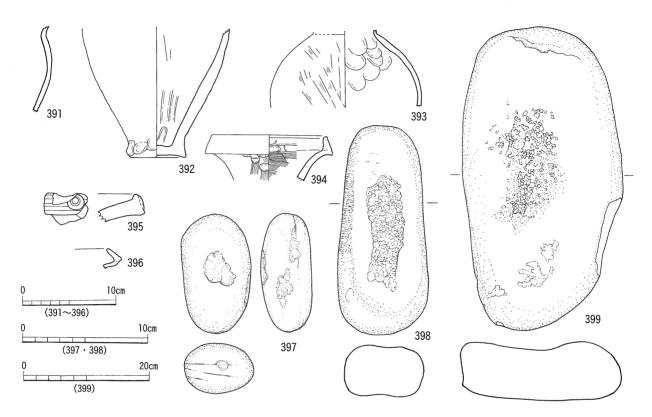
遺構: A-2 群中で中位, Q17グリッド西側で検出された。SA39に東側の大部分を切られ, 北側を 攪乱によって遺構の大部分が消失している。平面形態は北辺と西辺を基に考えると方形または長方形に なり, 一辺約4.5m前後と推測される。遺物は攪乱された東部より出土したが, 住居跡のものと判断で きない。

37号竪穴住居跡 (SA37・第42・43図・第45図-391~399)

遺構: A区中でも最東部, Q17グリッド中央付近で検出された。北側をSA38との切り合い, 西側を 攪乱によって遺構立ち上がり部分が不明瞭である。平面形態は不明であるが北西隅に唯一残るコーナー 部分から判断して, 方形もしくは長方形を呈すると考えられる。遺物は遺構面の少し上の全面から多量 に出土した。流れ込みの可能性もあるが, この区画だけ完形に近い土器片が多量に集中すること, 遺構 掘削面の1層上の層中から出土していることから考えて, 遺構掘削面上の1層は床土で, その上に床面 があると判断した。

遺物:391~392は甕である。392は頸部~胴部片である。緩やかに屈曲する頸部と肩の張らない胴部, タタキによる器面調整を特徴とする。392は端部が指ナデによる小さな張り出しをもち,わずかな上底

をもつ底部形態B類である。393~396は壺である。394・396は二次口縁部に櫛描波状文をもつ口縁部形 態A類である。395は肥厚した口唇部に凹線文と円形浮文を施す口縁部形態B類である。397~398は砂 岩製の敲石である。ともに表面中央部と側面に明瞭な敲打痕を残す。特に、398の敲打痕は著しく、窪 んでいる。399は長さ約32cmの砂岩製の台石である。中央部に敲打痕が認められる。

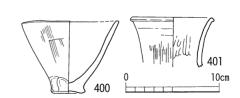


第45図 37号竪穴住居跡 (SA37) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/6)

38号竪穴住居跡(SA38・第42・43図・第46図-400~401)

遺構: SA37とSA40の間にわずかに残る竪穴住居跡である。あまりにもわずかな残存状況のため、 住居跡と判断することが難しかった。しかし、埋土が土坑のように単一層的ではなく、水平近く堆積し ていたことから住居跡であるとの判断に到った。遺物は細片が散見される程度であった。

遺物: 400は小型の鉢である。指ナデによってわずかに 張り出した端部と若干上底気味の底部をもち、直線的に外 側に開く器形である。401は壺の口縁部である。長頸の口 縁部形態E類で、口唇部をわずかに肥厚させ口縁帯を形成 している特徴をもつ。

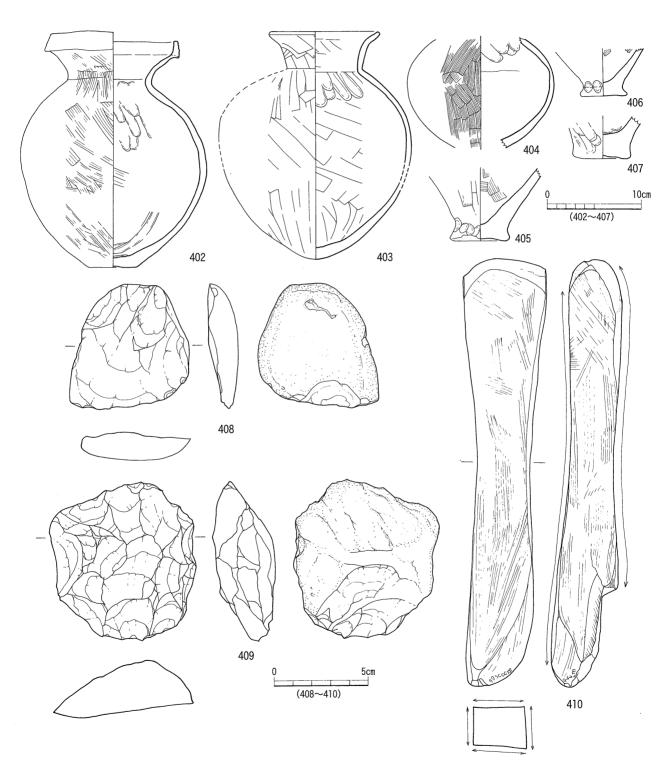


第46図 38号竪穴住居跡 (SA38) **39号竪穴住居跡** (SA39・第42・43図・第47図-402~410) 出土遺物図(1/4)

遺構:A-2群中で南側,Q17グリッド南西側で検出さ れた。西側でSA35・SA36を切り、南側が造成により攪

乱された形で検出された。西辺と南辺が直交はしているが、南辺が弓状に曲がっており、多少歪んだ方 形を呈する平面形態となりそうである。規模は西辺長より約4m前後だと考えられる。遺物は傾斜上面 の西壁付近に集中しており、SA35・36同様に流れ込みの可能性が大きい。

遺物:402~406は壺である。402は口縁部形態A類・胴部形態B類・底部形態B類をもつ壺I類である。403は口縁部形態C類・胴部形態B類・底部形態D類の壺Ⅲ類である。404は胴部形態C類である。405・406は指ナデによって端部を張り出させた平底タイプで底部形態D類である。407は底部片であり



第47図 39号竪穴住居跡 (SA39) 出土遺物図 (1/4·1/2)

不明であるが、おそらく甕の底部である。408は砂岩製の蛤形剥片石器である。片面に自然面を残し、下端を剥離によって刃部作出を行っている。409は泥岩製の礫器である。風化著しいが、片面に自然面の残る礫の周縁部を打ち欠いて鋭利な刃部に仕上げている。410は頁岩製の砥石である。断面方形でIA類の定型柱状砥石である。4面全て凹面に窪んでおり、b種研磨痕(擦痕)が顕著に認められる。

40号竪穴住居跡 (SA40・第49図・第48図-411)

遺構: A-2 群中で北側, Qラインと17ラインの交点周辺で検出された。北西側をSA41に, 東側をSA38との切り合いによって境界が不明瞭となり, 北側を後世の攪乱によって消失している。平面形態は南辺と東辺を基に考えると, 一辺約3.7m前後の方形か長方形を呈すると考えられる。

遺物:411は甕の胴部~底部である。上底で端部が張り出さない底部形態C類である。

41号竪穴住居跡 (SA41・第49図・第48図-412)

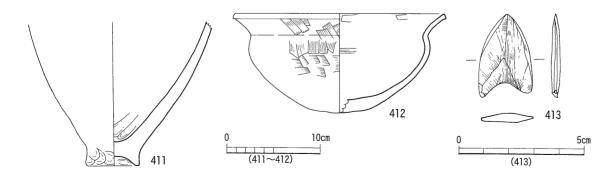
遺構: A-2 群中で北側、P16グリッド東側で検出された。南東側をSA40と、北側をSA42と切り合っており、北側は後世の造成によって攪乱され、遺構の半分近くが消失している。平面形態は、一部検出された南辺と西辺を基に考えると、一辺約5.7m前後の方形もしくは長方形となり、本遺跡では最大級の竪穴住居跡になると推測される。

遺物:412は鉢である。頸部付近で緩やかにS字状をえがく胴部形態A類とB類の中間的要素をもつ。 底部は若干レンズ状に肥厚した丸底(底部形態C類)である。

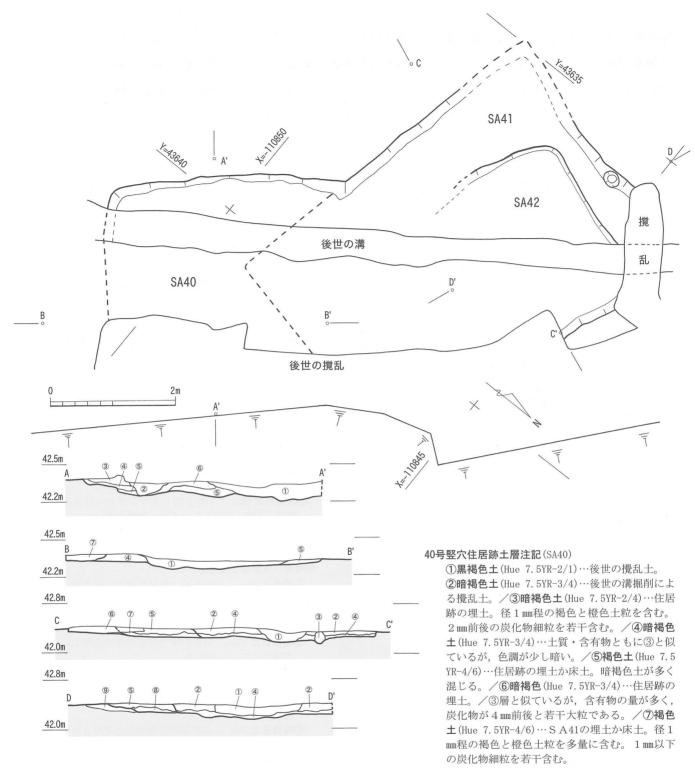
42号竪穴住居跡 (SA42・第49図・第48図-413)

遺構: A-2 群中で北側、P16グリッド東側で検出された。SA41に包含される形で、後世の造成による攪乱によって不明瞭な検出状況である。辛うじて北辺と南辺が平行し、南辺と西辺が直交することから、平面形態は一辺3 m前後の方形を呈する。遺物は細片が数点と磨製石鏃が1 点出土したのみである。

遺物:413は緑色頁岩製の磨製石鏃である。欠損部分はなく、ほぼ全形を留める。形状は、基部がやわらかい弧を描く凹基であり、中央に鎬をもつ。



第48図 40・41・42号竪穴住居跡(SA40・41・42)出土遺物図(1/4・2/3)



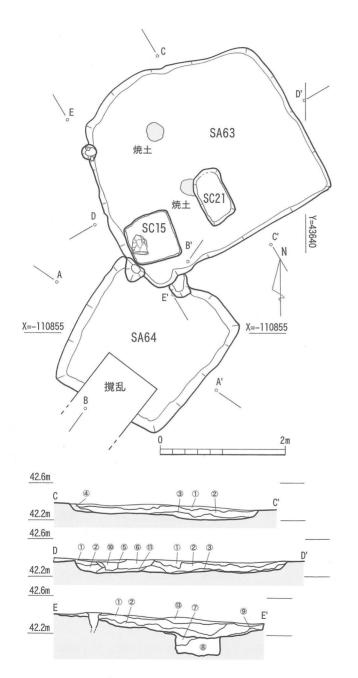
41·42号竪穴住居跡土層注記(SA41·SA42)

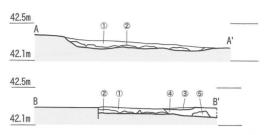
①暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…後世の溝掘削による攪乱土。/②暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…SA42の埋土。径1mm程の褐色と橙色土粒を含む。5mm以下の炭化物細粒を多量に含む。/③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…木根による攪乱土。/④暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…SA42の埋土か床土。明褐色土ブロックを多量に含む。2mm以下の炭化物細粒を含む。/⑤褐色土(Hue 7.5YR-4/4)…SA41の埋土。径1mm程の褐色・橙色・白色土粒を含む。5mm以下の炭化物細粒を多量に含む。/⑥黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…トレンチャーによる攪乱土。/⑦暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…⑤層と似ているが,暗褐色土ブロックを多く含み,色調が若干暗い。/⑧黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…SA41の埋土。褐色土ブロックを多量に含む。5mm以下の炭化物細粒を含む。/⑨褐色土(Hue 7.5YR-4/4)…地山の可能性。土質は粘性・しまりともにあり。

第49図 40・41・42号竪穴住居跡 (SA40・41・42) 図 (1/60)

63号竪穴住居跡 (SA63・第50図・第51図-414)

遺構: A-2群中位、P17グリッド北東側で検出された。SA40とは東辺で近接するが、切り合いはない。SA64を南西隅付近で、SC11とSC15を切った形で検出された。北辺が一部弧状に曲がっており、整然とではないがおよそ一辺2.3m前後の方形である。遺物は西壁周辺で細片がわずかに出土した。





64号竪穴住居跡土層注記(SA64)

- ①**暗褐色土** (Hue 7.5YR-3/3)…住居跡埋土。炭化粒を多く含む。
- ②褐色土(Hue 7.5YR-4/6)…住居跡埋土。暗褐色土 ブロックと少量の炭化粒を含む。
- ③暗褐色土 (Hue 7.5YR-3/3)…後世の攪乱土。褐色 土粒・炭化粒を少量含む。
- ④黒褐色土(Hue 7.5YR-4/3)…トレンチャーによる攪乱。土質はしまりなくボロボロしている。
- ⑤暗褐色土 (Hue 7.5YR-3/3)…トレンチャーによる 攪乱。④層と類似しているが、色調が暗い。

63号竪穴住居跡土層注記(SA63)

- ①褐色土 (Hue 7.5YR-4/4)…住居跡埋土。炭化粒・褐色土粒を含む。
- ②暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…住居跡埋土。径1cm 以下の明褐色土ブロックと少量の炭化粒を含む。
- ③暗褐色土(Hue 7.5YR-2/3)…住居跡床土か埋土。①層と似ているが硬い。
- **④明褐色土**(Hue 7.5YR-5/8)…住居跡埋土。褐色土 粒を含む。
- ⑤暗褐色土 (Hue 7.5YR-2/2)…トレンチャーによる 攪乱。
- ⑥暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…明褐色土ブロックを含む。
- ⑦暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)···S C15の埋土。土質はやわらかくしまりがない。
- ③黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…SC15の埋土。褐色 土粒・炭化粒を少量含む。

⑨明褐色土(Hue 7.5YR-5/8)…SC15の埋土。土質は比較的硬い。

⑩暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…後世の遺構埋土。褐色土ブロック含む。

①暗褐色土(Hue 7.5YR-2/3)…住居跡床土か埋土。①③層と似ているが硬い。

①暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…住居跡埋土か基本層序の第IV層。褐色土粒と炭化物を含む。

③黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。黒色土がブロック状にはいる。

第50図 63·64号竪穴住居跡 (SA63·64) ·15·21号土坑図 (SC15·21) 図 (1/60)

遺物:414は頁岩製の砥石である。断面方形でIA類の定型柱状砥石である。一部欠損しているが、4面全て凹面に窪んでおり、c種研磨痕(光沢痕)が顕著に認められ、部分的にa種研磨痕(線状痕)が認められる。

64号竪穴住居跡 (SA64・第50図)

遺構: A-2群中位, P17グリッド東側で検出された。 SA64に北隅を切られ, 南西側も後世の攪乱によって消失している。平面形態は一辺3~3.5mの略方形で比較的小さい。遺物は全面より出土したが, 量的に多くなく細片であった。床面検出の際に中央よりやや南西よりの場所2カ所に径30cm程度の赤褐色土の集中が確認できた。

11号土坑 (S C11・第50図・第52図-415)

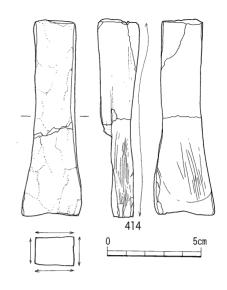
遺構: A-2群南端部, Q17グリッド南西側のSA35の中で検出された。長軸125cm・短軸82cmの隅丸方形を呈する。深さはSA35床面より約20cmである。SA35との関係は、土坑のある場所のSA35の床面レベル付近から遺物が多く出土しており、SA35に穿孔するものと考えることができる。

遺物:415は鉢である。内湾しながら立ち上がる口縁 部形態C類,底部は貼付円盤状平底の底部形態B類をも つ鉢IC類である。

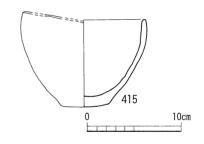
15号土坑 (S C 15・第50図・第53図-416)

遺構: A-2群中位, SC11同様, P17グリッド北東側のSA63の中で検出された。一辺約80cmの方形を呈する。土層断面の観察によると, SA63がSC15を切っていることがわかる。深さはSA63の床面より約30cmである。遺物は西壁近くから完形の甕が壁にもたれるように1点出土した。土坑の性格についてはっきりとしたことは不明であるが、貯蔵土坑の可能性がある。

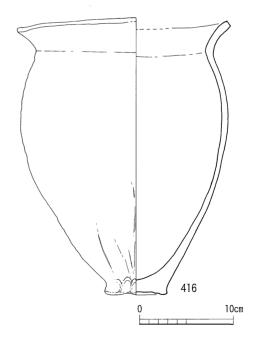
遺物:416は甕である。口縁部は緩やかに屈曲する口縁部形態B類,長形胴で上部に最大径のある胴部形態C類,平底で端部の張り出さない底部形態E類を特徴にもつ。甕Ⅱ類と甕Ⅲ類の中間的要素をもつ。



第51図 63号竪穴住居跡 (SA63) 出土遺物図 (1/2)



第52図 11号土坑 (S C11) 出土遺物図 (1 / 4)



第53図 15号土坑 (S C 15) 出土遺物図 (1 / 4)

21号土坑 (SC21・第50図)

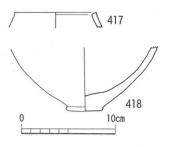
遺構: A-2 群中位,P17グリッド北東側のSA63の中で検出された。長軸88cm・短軸47cmの隅丸方形を呈する。SA63の図面では,赤褐色土を切るような形となっているが,SA63との関係は,後述するSC15同様SA63に穿孔するものと考えられる。SA63検出作業中の検出であるために不明な点は多い。しかし,土坑の規模や主軸方向などSC15と共通するものは多い。遺物は出土しなかった。

③A-3群…A群の中でも最大の群集部、X軸は17~24・Y軸はN~Qライン内に位置する。SA1~3・9~20・25~26・65~88の40軒と土坑4基(SC4・5・14・16)から成る。

65号竪穴住居跡 (SA65・第55図・第54図-417~418)

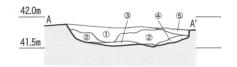
遺構: A-3 群北端部, P18グリッドで, A-2 群との境界付近で 検出された。他の住居跡と切り合いはなく, 単独で存在する。東側が 後世の造成により消失しており, 規模や平面形態は不明であるが, 一 辺2.5 m前後の方形もしくは長方形である。遺物は西壁の北コーナー 部分に集中して検出された。

遺物:417・418は壺である。417は二重口縁をもつ壺 I 類と考えられる。二次口縁部には櫛描波状文を施している。418は底部であり、 貼付円盤状の平底をもつ。



第54図 65号竪穴住居跡 (SA65) 出土遺物 (1/4)





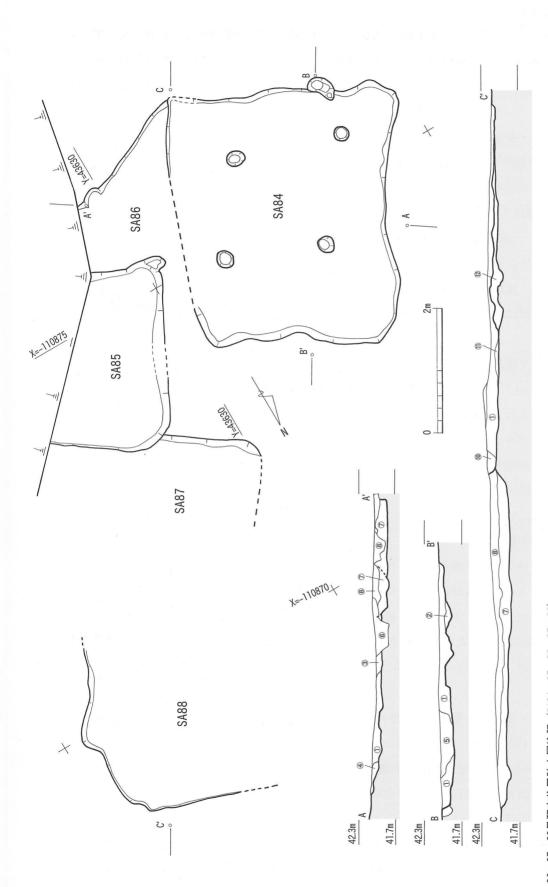
65号竪穴住居跡土層注記(SA65)

①黒褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…住居跡埋土と判断しているが、中央部が窪んでおり、別遺構の可能性もある。下部に弥生土器片を多く含む。/ ②暗褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…住居跡埋土。しまりなく柔らかく、含有物を殆ど含まない。/ ③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…住居跡埋土か床土。全体的に黄褐色土ブロックを多く含む。④褐色土(Hue 10YR-4/4)…住居跡埋土か床土。暗褐色土ブロックを多く含む。/ ④黒褐色土(Hue 10YR-3/3)…木根による攪乱土。

第55図 65号竪穴住居跡 (SA65) 図 (1/60)

84号竪穴住居跡 (SA84・第56図)

遺構:A-3群北側O19グリッド東側で,一部削平により消失しているが完全に近い形で検出された。 4辺は歪みながらもほぼ方形を呈し,南北約4m・東西約3.6mの規模を測る。検出面が水平でなく凹凸が激しく,住居であるかどうか疑問が残るが,4基のピットが柱穴配置のように確認されたことから住居跡と確認した。遺物は出土しなかった。



84・85・86・87・88号竪穴住居跡土層注記 (SA84・85・86・87・88)

④暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…SA84の埋土。③層と似ている。/ ⑤暗褐色土(Hue 10YR-3/4)… ①暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…SA84の埋土。径1 mm程の褐色土粒と炭化物を含む。/ ②暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…SA84の埋土。径1 mm程の褐色土粒を含むと炭化物細粒を多量に含む。
 ③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…SA84の埋土。①層と似ているが,含まれる炭化物が多い。/ ④暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…SA84の埋土。③層と似ている。/ ⑤暗褐色土(Hue 10YR-3/4) ⑩に**ぶい黄褐色土**(Hue 10YR-4/3)…SA87の埋土。褐色土ブロックと炭化物を含む。 ②黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…SA84の埋土か床土。黄褐色土ブロックを多く含む。 **褐色土**(Hue 10YR-4/6)…SA87の床土だと考えられる。/**⑫褐色土**(Hue 10YR-4/4)…SA88の埋土か床土。SA87によって削平されている。 **褐色土**(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。/ ③暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…基本層序の第IV層。 ⑤黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…後世の溝掘削による攪乱土。 小礫を多く含む。後世の攪乱土。

第56図 84・85・86・87・88号竪穴住居跡 (SA84・85・86・87・88) 図 (1/60)

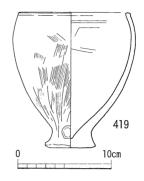
85号竪穴住居跡 (SA85・第56図)

遺構: A-3群北側 P 19グリッド西側で、東側約半分が後世の造成のために消失している形で検出された。西辺に対し北辺と南辺が直交しており、平面形態は一辺2.8m前後の方形か長方形だと推測できる。遺物は出土しなかった。

86号竪穴住居跡 (SA86・第56図・第57図-419)

遺構: A-3 群北側 P 19グリッド西側で、 S A 84・85に切られ、東側約半分が後世の造成のために消失している形で検出された。平面形態や規模は不明であるが、南辺が直線的に2.3 m残っていることから、一辺2.3 m以上の方形または長方形と推測できる。遺物はわずかに弥生土器片が数点出土した。

遺物: 419は鉢である。深鉢タイプで、内湾しながら立ち上がる鉢 I C類である。底部は張り出しをもつ平底タイプである。



第57図 86号竪穴住居跡 (SA86) 出土遺物図(1/4)

87号竪穴住居跡 (SA87・第56図)

遺構: A-3群北側 P19グリッド北西側で、 SA85に切られ、SA88と切り合う形で検出された。 SA88ともに上部が削平され、床面付近のみの検出となり、平面形態・規模等不明である。しかし、わずかに検出された南辺などから、一辺3.4m以上の方形または長方形と推測できる。さらにSA88との切り合い関係は、土層断面観察によって、SA88をSA87が切る形であると判明した。遺物は南側に集中して出土したが、量的に少なく、細片ばかりで遺構に伴うと判断できる遺物は確認されなかった。

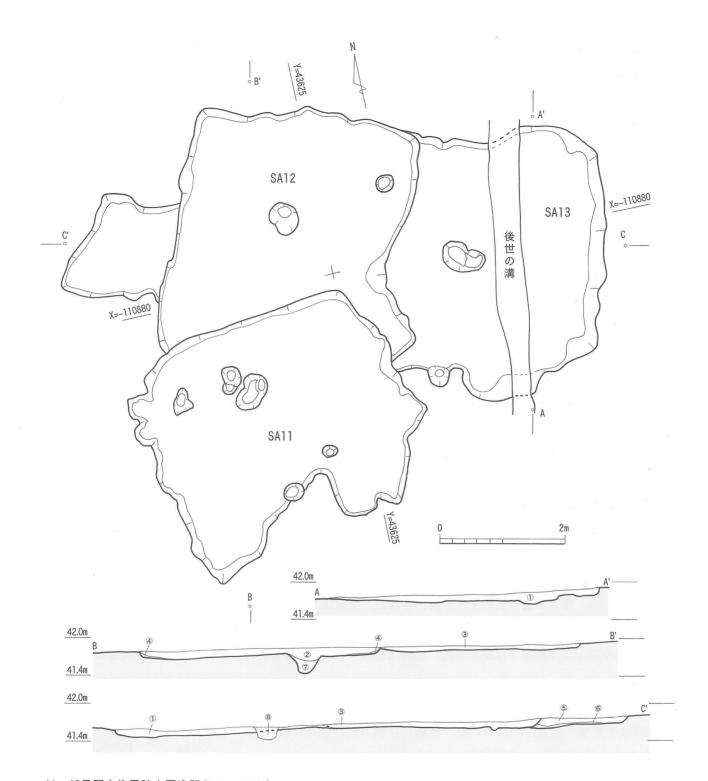
88号竪穴住居跡 (SA88・第56図)

遺構: A-3群北側P18グリッド南西側で、SA87と切り合う形で検出された。SA87との切り合い関係は、土層断面観察によってSA88によって切られる形であると判明した。SA87同様、上部が削平され、床面付近のみの検出となり、平面形態・規模等不明である。しかし、わずかに検出された北辺・東辺から、一辺2.6m以上の方形または長方形と推測できる。遺物は遺構面が残っていた東側に土器片がわずかに集中しているが、細片ばかりで遺構に伴うと判断できる遺物は確認されなかった。

11号竪穴住居跡(SA11・第58図・第59図-420~425)

遺構: A-3群北側, O20グリッド北側でSA12を切る形で検出された。平面形態は一辺約3.5m~4.2m程度の方形基調であるが、南壁部分が一部最大で約100cm入り込む不正方形を呈する。上部が削平によりほとんど消失しており、検出面からの深さは約10cm前後と浅い。しかし、遺物は東側に比較的集中して出土した。

遺物: 420は壺の底部である。底部付近は工具ナデを施している。鉢の底部の可能性もある。421は高坏の脚柱部である。残存している形状より脚部形態 B 類のものだと考えられる。422は一部欠損しており全形がわからないが土製の勾玉であると考えられる。423は頁岩製の石庖丁である。両端の抉りと直線的な背部に曲線的な刃部をもつ Π B 類である。424は砥石である。 C 種研磨痕をもつ砥面が 4 面ある

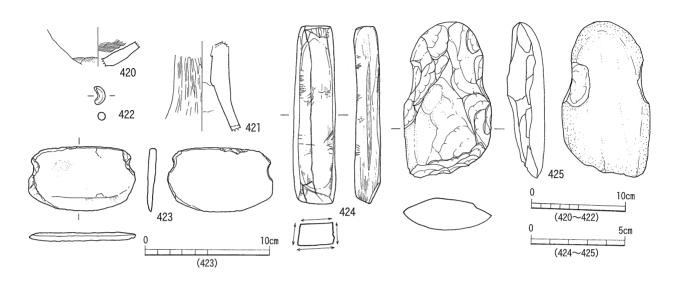


11・12号竪穴住居跡土層注記(SA41・SA42)

①黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…SA13の埋土。/ ②にぶい黄褐色土(Hue 10YR-4/3)…SA11の埋土。/ ③に ぶい黄褐色土(Hue 10YR-4/3)…SA11の埋土。 5 cm以下の明黄褐色土ブロックを多く含む。/ ④褐色土(Hue 10YR-4/6)…SA11の埋土。はじめに堆積した土。/ ⑤黒褐色土(Hue 10YR-3/2)…土坑の埋土。しまりなくボロボロしている。/ ⑥褐色土(Hue 10YR-4/6)…土坑の埋土。1 cm程度の明黄褐色土ブロックを多く含む。/ ⑦暗褐色土(Hue 10YR-3/3)…SA11と同時期か先行するピット。おそらく柱穴痕。/ ⑧黒褐色土(Hue 10YR-3/2)…SA13より後に造られたピット。遺構とは無関係。

第58図 11・12・13号竪穴住居跡 (SA11・12・13) 図 (1/60)

柱状のIA類であり、ところどころに横方向の短いa種研磨痕(線状痕)が認められる。425は凝灰岩製の打製石斧である。裏面は自然面を残し、上部に抉りをもつ形状をもつ。先端部分が欠損しているようにも見えるが、先端部に刃部らしき調整が施されている。本来こういう形であったのか、先端部欠損の後に刃部を新たに作出したものと考えられる。

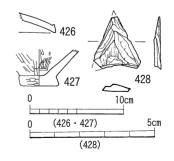


第59図 11号竪穴住居跡 (SA11) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/2)

12号竪穴住居跡 (SA12・第58図・第60図-426~428)

遺構: A-3群北側,O19グリッド南側でSA13の東側を切り,SA11に南側を切られる形で検出された。平面形態は南北約 4 m・東西約3.5mの長方形基調であるが,東壁部分が一部突出し不正方形を呈する。上部が削平によりほとんど消失しており,検出面からの深さは約10cm前後と浅い。中央部より径 $40\sim50$ cm,深さ30cm程度の土坑が検出された。土坑は土層断面を観察すると,住居跡と同時期に掘り込まれ,住居跡に伴うものと考えられる。土坑の埋土はアカホヤ火山灰ブロックをわずかに含むだけで炭化物や焼土など検出できなかった。遺物は量的にそれほど多くはないが,遺構面北壁東側に集中している。

遺物:426は高坏の脚裾部と考えられる。端部に凹線文を施す。 427は小型壺の底部と考えられる。底部には横方向,胴部には斜 方向のミガキを施す。底部形態はわずかに端部の張り出しをもつ 平底タイプである。428は石鏃である。緑色頁岩製で,平面形態 は基部がわずかにくぼむ三角形を呈する。表面は中心部の一部分 の研磨面を除いて打製による剥離を施している。一見,縄文時代 の打製石鏃のようにも見えるが,使用石材や部分的に残る研磨面 から弥生時代代の磨製石鏃の一種と考えられる。



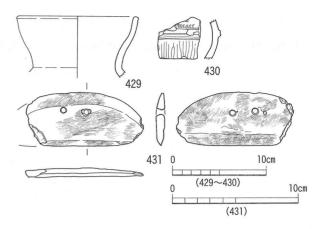
第60図 12号竪穴住居跡 (SA12) 出土遺物図 (1/4・2/3)

13号竪穴住居跡 (SA13・第58図・第61図-429~431)

遺構: A-3 群北側, O19グリッド南側で, 西側をSA12に切られる形で検出された。平面形態は, 東辺と南辺・北辺を基に考えると, 一辺約4.3m前後の方形もしくは長方形と推測される。SA11・12

同様、上部が削平によりほとんど消失しており、検 出面からの深さは約10cm前後と浅い。遺物は北東隅 で僅かに自然礫と土器片が集中した以外、細片が散 見される程度である。

遺物:429は壺の口縁部である。緩やかにS字を描く頸部の長い形態をもつ。430は壺の胴部である。台形状の貼付突帯と楔形の連続刺突文をもつ。431は頁岩製の石庖丁である。抉りがなく2穴をもち、弧状の背部と直線的な刃部をもつIA類である。



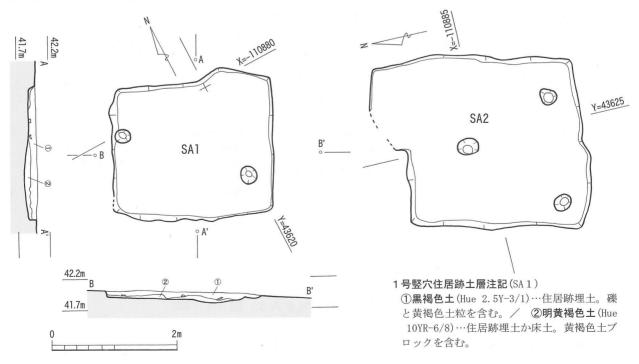
第61図 13号竪穴住居跡(SA13) 出土遺物(1/4・1/3)

1号竪穴住居跡(SA1・第62図)

遺構: A-3群では西側,20ラインとOラインの交点付近で検出された。他の住居跡と切り合わず単独であるが、上部が削平によりほとんど消失しており、検出面からの深さは約10cm前後と浅い。平面形態は一辺約2.5mの方形基調であるが、北壁部分が一部約20cm入り込んでいる不正方形を呈する。柱穴が東辺と西辺壁際に1基ずつ検出されたが、住居跡の主軸と柱穴の軸は一致しない。遺物は遺構面全面から細片が出土したが、遺構に伴うようなものは出土しなかった。また、出土した遺物の中には段丘礫らしき礫を多く含む。

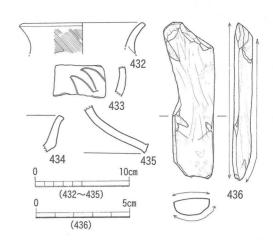
2号竪穴住居跡 (SA2・第62図・第63図-432~436)

遺構: O20グリッド東側, 他の住居跡と切り合わず単独で検出された。平面形態は, 南北3.3m・東西2.8mの長方形基調であるが, SA1同様, 北壁部分が一部約40cm入り込んでいる不正方形を呈する。 柱穴は南壁付近に2基, 中央付近に1基検出された。遺物は遺構面全面から細片を中心に出土した。



第62図 1・2号竪穴住居跡(SA1・2)図(1/60)

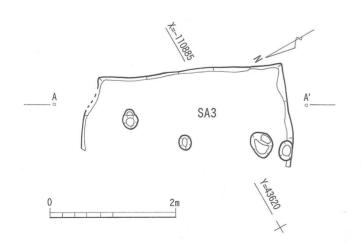
遺物: 432~433は壺である。432は比較的短く外反する口縁部をもち、外面には斜方向のハケ目を施す。433は部位が不明であるが、おそらく壺の胴部片である。外面にヘラ描きによる線刻文が確認できる。細片であるので、何が描かれているか不明であるが、記号的でなく絵画的な意図が伺える。鶏冠や鬣のようなものにも見えないでもない。434は高坏の坏口縁部である。一度明瞭に屈曲して直立気味に立ち上がる坏部形態A類である。435は器台の裾部である。裾端部には凹線文を施す。436は頁岩製砥石である。棒状の礫を用いたⅢA類である。砥面は表裏2面にあり、1面は平坦状、もう1面は凸状である。凸状砥面はⅢA類に多いタイプであり、携帯用として用いられた可能性がある。

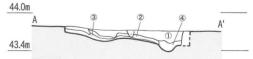


第63図 2号竪穴住居跡(SA2) 出土遺物(1/4・1/2)

3号竪穴住居跡(SA3・第64図)

遺構: N20グリッド東側, SA1の南隣, 他の住居跡と切り合わず単独で検出された。後世の攪乱のため, 北側の約半分が消失している。平面形態は, 東辺長から考えると一辺3.3m前後の方形または長方形と推測できる。柱穴が3基検出されたが, 住居跡と関連しているのかは不明である。遺物出土状況は, SA1と同じく遺構面全面から弥生土器細片と径10~20cm程度の自然礫を中心に出土した。床面は水平でなく, 住居跡にしては凹凸が激しく安定していないところに検討の余地を残す。





- 3号竪穴住居跡土層注記(SA3)
 - ①黑褐色土(Hue 10YR-3/2)…住居跡埋土。
- ②褐色土(Hue 10YR-4/6)…住居跡埋土。炭化物粒・ 褐色土粒をわずかに含む。
- ③黄褐色土(Hue 10YR-5/6)…住居跡埋土か床土。黄褐色土ブロックを含む。
- ④黄褐色土(Hue 10YR-5/6)…柱穴の埋土。

第64図 3号竪穴住居跡(SA3)図(1/60)

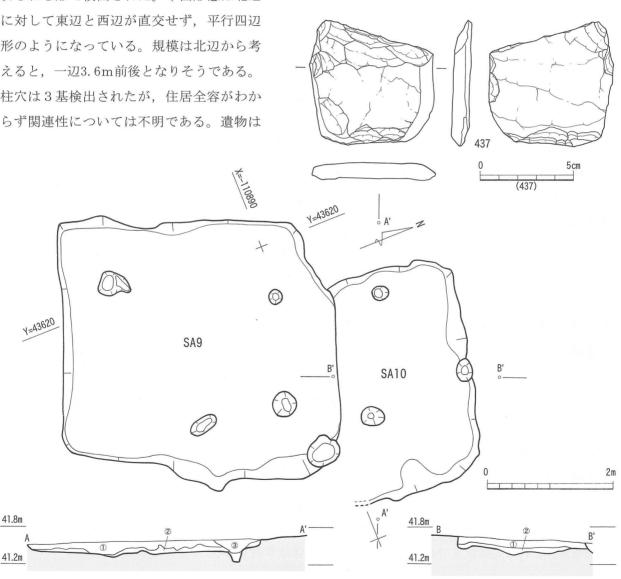
9号竪穴住居跡 (SA9・第66図・第65図-437)

遺構: O21グリッド北西隅部, SA10を切る形で検出された。平面形態は多少歪んでいるが一辺4.2 m前後の方形である。柱穴が4基確認できたが、4基の間隔・方向・規模全てが不揃いで、住居跡との 関連は不明である。遺物は全面より出土したが、量的に多くなく細片であった。

遺物:437は剥片石器である。凝灰岩の自然礫を剥離し、板状の剥片にした後に、上下の端部に剥離 を施し刃部作出を行っている。

10号竪穴住居跡 (SA10・第65図)

遺構: O20グリッド南西隅部, SA9に 切られる形で検出された。平面形態は北辺 に対して東辺と西辺が直交せず, 平行四辺 形のようになっている。規模は北辺から考 えると,一辺3.6m前後となりそうである。 柱穴は3基検出されたが、住居全容がわか らず関連性については不明である。遺物は



9 · 10号竪穴住居跡土層注記(SA9 · SA10)

①黒褐色士 (Hue 10YR-2/2) \cdots S A 10の埋土。 5 cm 前後の礫・弥生土器片・1 cm程の炭化物を含む。/ ②暗褐色土 (Hue 10YR-3/4)…SA10の埋土か床土。黒褐色土ブロックをわずかに含む。/ ③黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。

第65図 9·10号竪穴住居跡 (SA9·10) 図 (1/60)・ 9号竪穴住居跡(SA9)出土遺物図(1/2)

全面より出土したが、量的に多くなく細片であった。

66号竪穴住居跡 (SA66・第66図)

遺構: A-3群中央部、O21グリッド北側で、SA70に包含された形で検出された。更に、北側には SA68、東側にはSA67が切り合っており、遺構の全容は不明であるが、西壁の検出状況から考えると、 -辺約2.5m前後の方形もしくは長方形と推測される。遺物は僅かに細片が散見される程度である。

67号竪穴住居跡 (SA67・第66図)

遺構: A-3群中央部, O21グリッド北東隅で, SA66・68と切り合う形で検出された。東半が後世の造成により消失しており全容は不明である。平面図(第66図)ではSA67がSA66・68を切っているような図になっているが, 実際は, 土層断面観察などから, SA66・68がSA67を切っている。SA67の東壁は上部がSA66・68によって削平されているのである。平面形態は, 一辺4.2m前後の方形もしくは長方形基調であるが, 西壁部分が一部突出し不正方形を呈すると考えられる。遺物は遺構面全面から出土した。

68・69号竪穴住居跡 (SA68・69・第66図)

遺構:A-3群中央部,O20グリッド南東隅で,SA66と切り合う形で検出された。東半が後世の造成により消失しており全容は不明である。SA68とSA69は西壁や床面の検出状況により2軒と判断したが,1軒の可能性もある。1軒と仮定すると一辺3.2m以上の方形か長方形であり,2軒と仮定すると $SA68 \cdot 69$ 共に一辺2.7m以上の方形か長方形である。SA68部分の中央に2基の柱穴がある。遺物はわずかに細片が散見される程度である。

70号竪穴住居跡 (SA70・第66図)

遺構: A-3群中央部、O21グリッド北側で、SA71と南側で、SA68と北部で、SA67と東部で切り合い、SA66を包含するような形で検出された。SA66との切り合いで、規模や平面形態は不明であるが、SA66を包含すると考えれば、-辺4.3m前後の方形もしくは長方形と推測できる。

71号竪穴住居跡 (SA71・第67図)

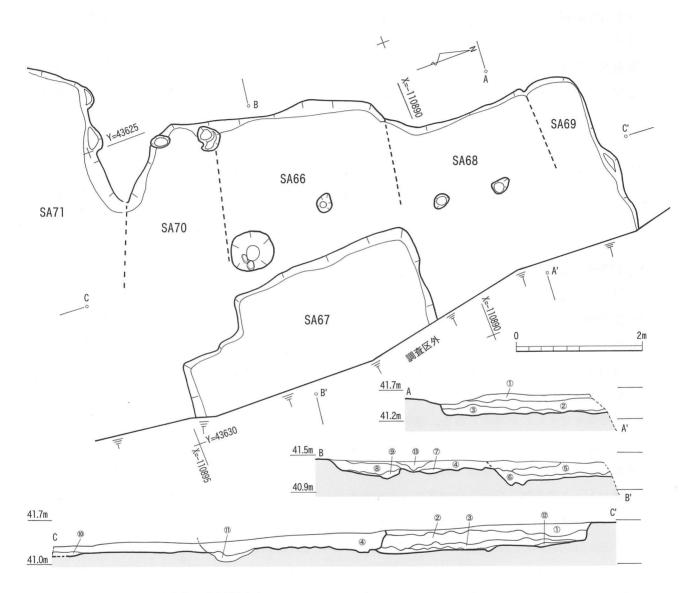
遺構: A-3群中央部、O21グリッド中央部で、北部でSA70と切り合い、南部で $SA72 \cdot 75$ を切るような形で検出された。北西コーナー付近が一部出土したのみで、規模や平面形態など全容については不明である。また、住居跡検出中にSC16が検出された。平面図ではSC16がSA71を切ったようになっているが、これは完掘状況であって、両者の前後関係は不明である。

72号竪穴住居跡 (SA72・第67図)

遺構: A-3 群中央部、O21グリッド中央部で、大部分がSA73に切られ、全容が不明である。規模は不明である。東側は攪乱により消失しており確認できなかったが、他にも竪穴住居跡が数軒あったと考えられる。

73号竪穴住居跡 (SA73・第67図)

遺構: A-3 群中央部、O21グリッド南側で、北部で $SA71 \cdot 72$ を、南部でSA74を切るような形で検出された。平面形態は南北3.3m・東西2.8mの長方形を呈する。床面中央部やや北寄りに直径約25cmのピットが 1 基検出された。深さは約20cmと浅く、柱穴かどうか不明である。



67 · 68 · 69 · 70 · 71 · 号竪穴住居跡土層注記(SA67 · 68 · 69 · 70 · 71)

①黒褐色土 (Hue 10 YR-2/3) … S A 6 8 の埋土。 径 1 mm程の褐色土粒と 2 mm程の炭化物細粒を多量に含む。/②黒褐色土 (Hue 10 YR-3/3) … S A 6 8 の埋土。①と似ているが、色調が少し明るい。/ ③黒褐色土 (Hue 10 YR-2/2) … S A 6 8 の埋土か床土。黄橙褐色火山灰土ブロックを含む。/ ④黒褐色土 (Hue 10 YR-3/3) … S A 70 の埋土。径 1 mm程の褐色土粒と 2 mm程の炭化物細粒を含む。/ ⑤黒褐色土 (Hue 10 YR-5/3) … S A 6 7 の埋土。径 1 mm程の赤褐色土粒と炭化粒を含む。/ ⑥黒褐色土 (Hue 10 YR-2/2) … S A 6 7 の埋土。土質は③層と似ている。/ ⑦暗褐色土 (Hue 7.5 YR-2/3) … S A 7 0 の埋土か床土。径 1 mm程の明褐色土ブロックと炭化粒を含む。/ ⑧黒褐色土 (Hue 7.5 YR-2/2) … S A 7 0 の埋土。径 1 mm程の褐色土粒と 2 mm程の炭化物細粒を含む。/ ⑨暗褐色土 (Hue 7.5 YR-2/3) … S A 7 1 の埋土か床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロック・1 cm以下の炭化物細粒を多量に含む。/ ⑪黒褐色土 (Hue 10 YR-2/3) …径 1 mm程の褐色土粒と 2 mm程の炭化物細粒を含む。/ ⑰褐色土 (Hue 7.5 YR-4/4) … S A 6 8・S A 6 9 の埋土か床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロックを含む。/ ⑰褐色土 (Hue 7.5 YR-4/4) … S A 6 8・S A 6 9 の埋土か床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロックを含む。

第66図 66·67·68·69·70号竪穴住居跡 (SA66·67·68·69·70) 図 (1/60)

74号竪穴住居跡 (SA74・第67・68図)

遺構: A-3 群南側, O22グリッド北側で, 北西コーナー付近でSA73に切られ, 北部でSA75と78 を切るような形で検出された。北東と南東のコーナー付近が消失しているが, 一辺2.5m前後の方形を呈することがわかる。遺物はわずかに細片が散見される程度である。

75号竪穴住居跡 (SA75・第67・68図)

遺構:A-3群南側,O22グリッド北側で,北西コーナー付近でSA74に切られ,北部でSA78を切るような形で検出された。東半分は攪乱により削平され不明瞭である。東辺に対し北辺と南辺が直交しており,平面形態は一辺 4 m前後の方形か長方形と推測できる。遺物はわずかに細片が散見される程度である。

76号竪穴住居跡 (SA76・第67・68図)

遺構: A-3群南側, 22ラインとPラインの交点付近, 東側は後世の造成により消失している形で検出された。 さらに隣に並ぶSA83と切り合い, 南西隅部をSA78に切られた形で検出された。 東辺に対し北辺と南辺が直交しており, 平面形態は一辺 3 m前後の方形か長方形と推測できる。 遺物はわずかに細片が散見される程度である。

77号竪穴住居跡 (SA77・第67・68・69図)

遺構:A-3群南側,O22グリッド東側で,東側は後世の造成により消失している形で検出された。 西壁中央部にピットが 1 基伴うが,SA77との関係は不明である。東辺に対し北辺と南辺が直交しており,平面形態は一辺3.2m前後の方形か長方形と推測できる。ただし,北辺が弧状に曲がっており多少歪んだ形態をなすものと考えられる。遺物はわずかに細片が散見される程度である。

78号竪穴住居跡 (SA78・第67・68図)

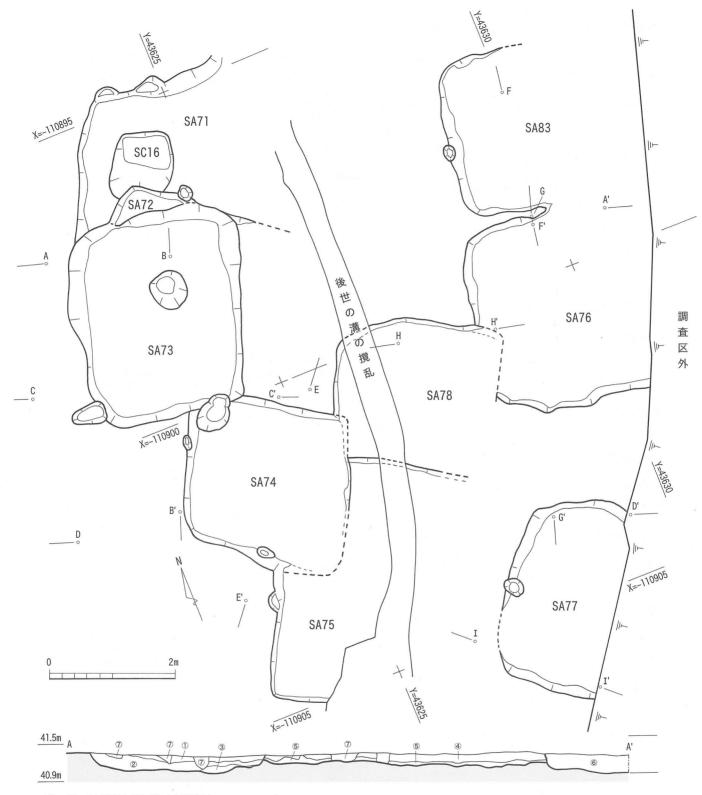
遺構: A-3群南側, O21とO22グリッドの境界で, 南西隅部をSA74・75と, 北東隅部をSA76と切り合った形で検出された。東側は後世の造成により消失している。北西部が一部残っており, 平面形態は一辺2.5m前後の方形と推定できる。遺物はわずかに細片が散見される程度である。

83号竪穴住居跡 (SA83・第67・68図)

遺構: A-3群中央部,O21グリッド東側で,東側は後世の造成により消失している形で検出された。 南辺はSA76との切り合いで不明瞭になっているが,西辺に対し北辺と南辺が直交しており,平面形態は一辺2.5m前後の方形か長方形と推測できる。

16号土坑 (S C 16・第67図)

遺構:A-3群中央部,SA71床面付近で検出された。SA72に切られ全形が残存していないが,長軸約120cm・短軸100cmの方形に近い長方形を呈する。断面形は北片側だけがくぼむ。遺物は出土しなかった。



71 · 73 · 76号竪穴住居跡土層注記(SA71 · 73 · 76)

①黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…SA73の埋土。径 1 mm程の橙色土粒を含む。 1 cm程の炭化物粒と弥生土器片を含む。/ ②黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…SA73の埋土。径 1 mm程の褐色と橙色土粒を含む。 1 mm程の炭化物粒と弥生土器片を含む。/ ③暗褐色土(Hue 10YR-2/3)…SA73の埋土か床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロックと弥生土器片を含む。/ ④黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…SA71の埋土。径 1 mm程の橙色軽石粒・1 cm程の黄褐色火山灰土(二次アカブロック)・弥生土器片を含む。/ ⑤暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…SA71の埋土か床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロック・1 cm以下の炭化物細粒を多量に含む。/ ⑥黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…一部木根による攪乱も含まれるが,SA76とSA83の埋土と考えられる。/ ⑦暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…後世の攪乱土。

第67図 71 · 72 · 73 · 74 · 75 · 76 · 77 · 83号竪穴住居跡 (SA71 · 72 · 73 · 74 · 75 · 76 · 77 · 83) · 16号土坑(SС16)図(1 /60)





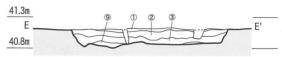
73号竪穴住居跡土層注記(SA73)

①黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…S A73の埋土。径 1 mm程の黄褐色土粒・弥生土器片を含む。/ ②暗褐色土(Hue 7.5YR-2/2.5)…S A73の埋土。径 1 mm程の黄褐色土粒・弥生土器片を含む。/ ③黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…S A73の埋土か床土。径 1 mm程の黄褐色土粒・弥生土器片を含む。/ ④黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2.5)…S A73の埋土か床土。明褐色土ブロックを含む。下部に弥生土器片を含む。/ ⑤黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…S A73の埋土か床土。径 1 mm程の黄褐色土粒・炭化物・弥生土器片を含む。/ ⑤黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…S A73の埋土か床土。径 1 mm程の黄褐色土粒・炭化物・弥生土器片を含む。/ ⑥暗褐色土(Hue 10YR-3/3)…S A73の床土。基本層序の第IV層らしき暗褐色土ブロックを含む。/ ⑦褐色土(Hue 7.5YR-4/4)…おそらく基本層序の第IV層。/ ⑧黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。/ ⑨黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…後世の攪乱土。/ ⑨黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑩黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑪黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑪黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑪黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑪黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…8世の攪乱土。/ ⑪黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2.5)…S A73の埋土か床土。④層と同じ。



74・75・77号竪穴住居跡土層注記(SA74・75・77)

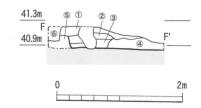
①黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2)…SA74の埋土。径1mm程の橙色土粒を含む。/ ②黒褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…SA74・SA75の埋土。径1mm程の橙色土粒と炭化粒を含む。/ ③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/4)…SA74の埋土か床土。基本層



序の第IV層らしき暗褐色土ブロックと炭化物を含む。 / ④黒褐色土(Hue 7.5YR-2/2))… S A 74の埋土。①層と似ているが,橙色土粒の割合が多い。 / ⑤褐色土(Hue 7.5YR-4/4)…おそらく基本層序の第IV層。 / ⑥黒褐色土(Hue 10YR-2/3)… S A 77の埋土。径 1 mm程の橙色と赤褐色土粒を含む。 / ⑦暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)… S A 77の埋土。径 1 mm程の黄褐色土粒を含む。 / ⑧黒褐色土(Hue 7.5YR-3/2)… S A 75の埋土。②層と同じだとも考えられる。 / ⑨暗褐色土(Hue 7.5YR-2/3)…地山の可能性。土質は粘性・しまりともにあり。

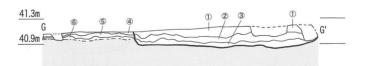
83号竪穴住居跡土層注記(SA83)

①暗褐色土(Hue 10YR-3/3)…SA83の埋土。黒褐色土をわずかに含む。/②黒褐色土(Hue 10YR-2/2)…SA83の埋土。①層に似ているが,色調が暗い。/③黒褐色土(Hue 2.5YR-3/1)…SA83の埋土。明黄褐色土ブロックを多く含む。/④灰黄褐色土(Hue 10YR-4/2)…SA83の埋土。径1㎜程の黄橙色土粒・炭化物粒を多量に含む。/ ⑤黄橙褐色土(Hue 10YR-7/6)…基本層序の第V層。/ ⑥黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…木根による攪乱土。



76号竪穴住居跡土層注記(SA76)

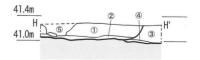
3①黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…S A 76の埋土。炭化物粒・褐色土を含む。/ ②黒褐色土(Hue 10YR-3/2)…S A 76の埋土。炭化物粒・褐色土をわずかに含む。/ ③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/3)…S A 76の



埋土。 2 cm程の炭化物を多く含む。/ **④黒褐色土**(Hue 7.5YR-3/2)…径 1 mm程の淡黄色土粒・炭化物粒をわずかに含む。/ **⑤黒褐色土**(Hue 10YR-2/3)…自灰色火山灰土・褐色・炭化物粒を含む。/ **⑥黒褐色土**(Hue 10YR-2/3)…黒褐・褐色粒を含む。

78号竪穴住居跡土層注記(SA78)

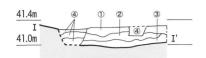
①黒褐色土 (Hue 10YR-2/2)…SA78の埋土。炭化物粒・径2mm程の橙色土を含む。②黒褐色土 (Hue 7.5YR-3/2)…SA78の埋土か床土。おそらく基本層序の第IV層の褐色土ブロックを含む。/ ③暗褐色土 (Hue 7.5YR-3/3)…①層に似ているが、色調は明るく含有物が少ない。SA78によっ



て攪乱されたSA76の埋土だと考えられる。**④暗褐色土**(Hue 7.5YR-3/3)…②層に似ているが,色調は明るく含有物が少ない。 ③層同様,SA78によって攪乱されたSA76の埋土だと考えられる。/⑤黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…木根による攪乱土。

第68図 71・72・73・74・75・76・77・83号竪穴住居跡 (SA71・72・73・74・75・76・77・83)・16号土坑(SC16)土層断面図(1/60)

77号竪穴住居跡土層注記(SA77)



- ①黒褐色土(Hue 7.5YR-3/3)… S A77の埋土。炭化物粒・赤褐色土を含む。 ②褐色土(Hue 7.5YR-4/4)… S A77の埋土。黄褐色・明褐色土粒をわずかに 今ま。
- ③暗褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…SA77の埋土。径1㎜程の赤褐色土粒を含む。 ④黒褐色土(Hue 7.5YR-3/2)…後世の攪乱土。

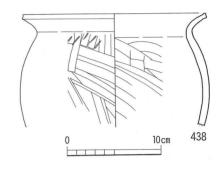
第69図 77号竪穴住居跡 (SA77) 土層断面図 (1/60)

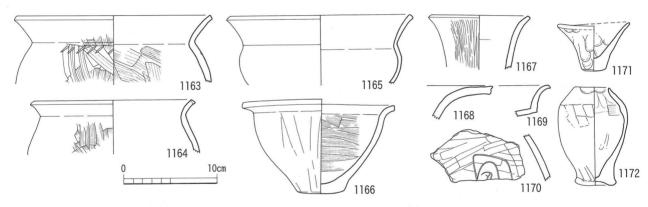
18号竪穴住居跡 (SA18・第71図・第70図-438・1163~1172)

遺構:A-3群南側,N22グリッド北東側で検出された。北辺をSA80に切られているが,ほぼ全形

を留めている。平面形態は一辺2.5mの方形を呈する。北壁中央近くに1基のピットが検出されたが、SA18の柱穴に伴うものかどうか不明である。

遺物:438は甕である。平坦状の口唇部形態A類・頸部で緩やかに屈曲する口縁部形態B類をもつ甕Ⅱ類である。外面調整は工具ナデで,頸部に斜位の連続刻文を施す。1163~1164は甕である。1163は明瞭に頸部で屈曲する口縁部形態A類である。



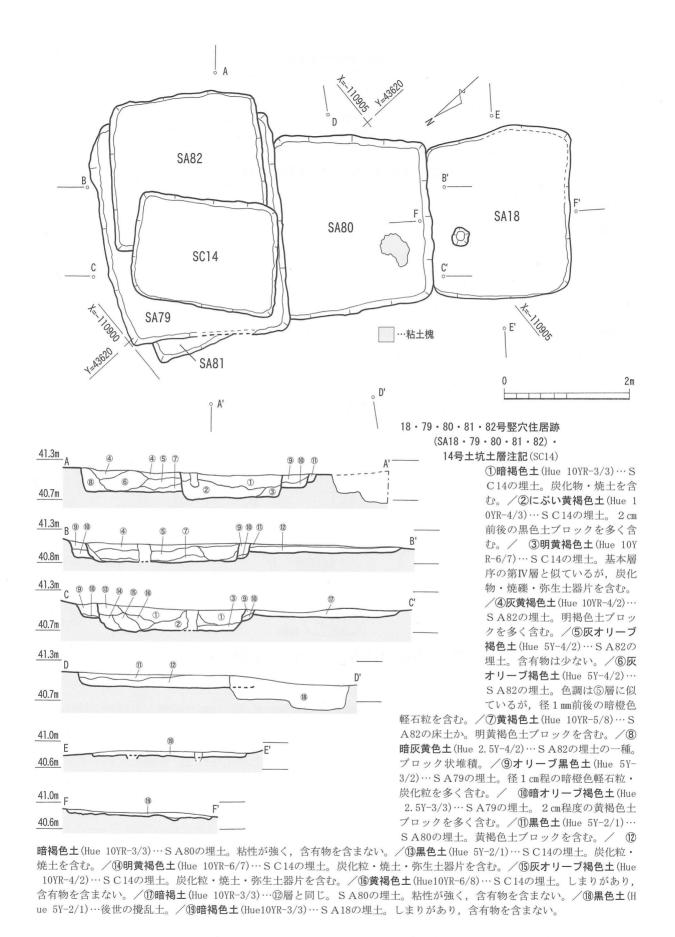


第70回 18号竪穴住居跡(SA18)出土遺物図(1/4)

 $1165\sim1166$ は鉢である。1165は頸部で屈曲する胴部形態 B 類である。1166は底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり,口縁部付近で短く外反する器形である。 $1167\cdot1168$ は壺であり,1167は長頸の口縁部形態 E 類,1168は口縁部形態 B 類である。1170は壺の肩部付近と考えられる。全面に工具ナデが施されているが,その中に線刻が認められる。絵画なのか記号なのかは不明である。 $1171\cdot1172$ は手捏土器である。1171は鉢,1172は壺であるが,1171を蓋にしたセット関係と見ることもできる。

79号竪穴住居跡 (SA79・第71図)

遺構: A-3群南側, 22ラインとOラインの交点付近, $SA80 \cdot 81$ を切り, $SA82 \cdot SC14$ に切られ, 周縁部のみ検出された。平面形態は東西3.3m・南北2.6mの長方形を呈する。主軸はN-36-Eで, 切り合い関係にある $SA18 \cdot 80 \cdot 81 \cdot 82$ とはほぼ主軸を同じくし, 規模や形態も類似していることから近い時期に構築されたと考えられる。遺物は細片のみの出土である。



第71図 18・79・80・81・82号竪穴住居跡 (SA18・79・80・81・82) ・ 14号土坑 (SC14) 図 (1/60)

80号竪穴住居跡 (SA80·第71図)

遺構: A-3 群南側, N22グリッド北東側で検出された。南辺でSA18を切り, 北辺でSA79に切られているが, ほぼ全形を留めている。平面形態は一辺2.7m前後の方形である。遺物は細片のみでほとんど出土しなかったが, 南西コーナー部に50cm程の粘土塊が検出された。

81号竪穴住居跡 (SA81・第71図)

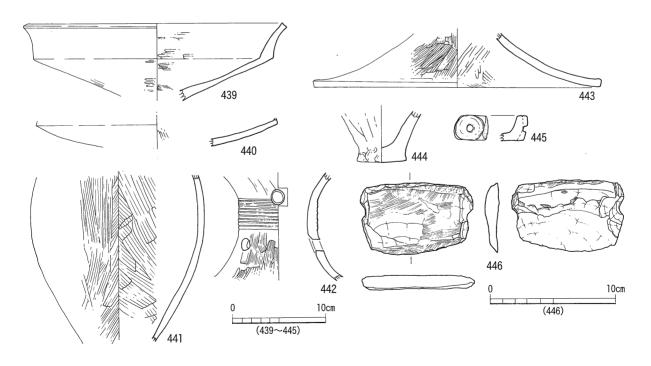
遺構: A-3 群南側,22ラインとOラインの交点付近,SA79に切られ,北西コーナー部分のみ検出された。コーナーのわずかな部分のみの検出であるため,規模や平面形態は不明である。遺物は出土しなかった。

82号竪穴住居跡 (SA82・第71図)

遺構: A-3 群南側,22ラインとOラインの交点付近,西側をSC14に切られ,SA79を切った形で検出された。西辺が消失しているがほぼ全形を留めている。平面形態は一辺2.5m前後の方形である。遺物は完形に近い弥生土器の甕や壺が壁面を中心に出土した。

14号土坑 (SC14・第71図・第72図-439~446)

遺構: A-3 群南側,22ラインとOラインの交点付近,SA79・82を切った形で検出された。長軸228 cm・短軸163cmの長方形を呈し、深さは検出面から約30cmである。遺物は北東と南西のコーナー付近から完形に近い弥生土器の高坏や甕をはじめ高い密度で土器片が出土した。



第72図 14号土坑 (SС14) 出土遺物図 (1/4・1/3)

遺物:439・440は高坏である。439は、一度屈曲した後に、外反するが直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。坏部形態A類とB類の中間形態である。440は屈曲部の粘土の繋ぎ目から口縁部が欠損しているが、屈曲部が確認でき、内湾しながら立ち上がる坏部形態A類かB類と考えられる。高坏の脚部の可能性もある。441は甕の胴部で、胴部形態C類である。442・443は器台である。442は柱部である。2段の円形透かしをもち、縦方向のハケ目の後に10条の凹線を施す。SA45・SA95・SA107などに出土例がある。備讃瀬戸地方などに類例がある。443は脚部の裾付近ある。大きく「八」字状に開く。444は甕の底部片である。わずかに指ナデによる張り出しをもつ平底タイプである。445は壺の口縁部である。口縁部形態A類の二重口縁壺である。二次口縁部にドーナツ形の浮文をもつ。446は頁岩製の石庖丁で、両端に抉りをもち、直背直刃タイプのII C類である。

14号竪穴住居跡 (SA14・第75図・第73図-447~448)

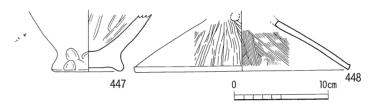
遺構: A-3 群南側, O22グリッド南西側で, 西辺をSC4に, 東辺をSA15に切られる形で検出された。東側が若干消失しているが, おおよその平面形態を捉えることは可能であり, 南北約3.5m・東西2.2mの少し平行四辺形気味の長方形を呈する。

遺物:447は壺の底部である。 指ナデによって張り出しをもつ 上底タイプである。448は器台の 脚裾部である。円形の透かしを もち、柱部は細い。

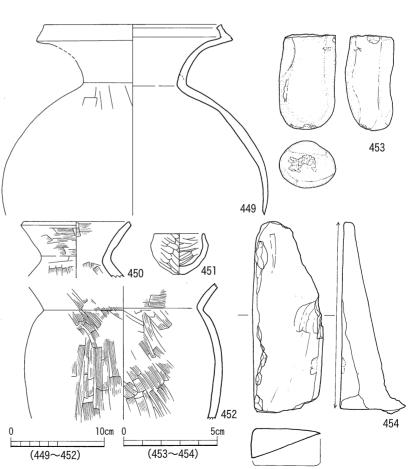
15号竪穴住居跡 (SA15・第75 図・第74図-449~451)

遺構: A-3群南側, O22グ リッド南側で, SA14を東辺で, SA16を北辺で切る形で検出さ れた。遺構南端部は後世の造成 のため消失している。平面形態 は残存状況から一辺3.5m前後の 方形もしくは長方形と考えられ る。遺物は北西隅の壁際に集中 している。

遺物:449~450は壺である。 449は櫛描波状文をもつ二重口縁



第73図 14号竪穴住居跡 (SA14) 出土遺物図 (1/4)

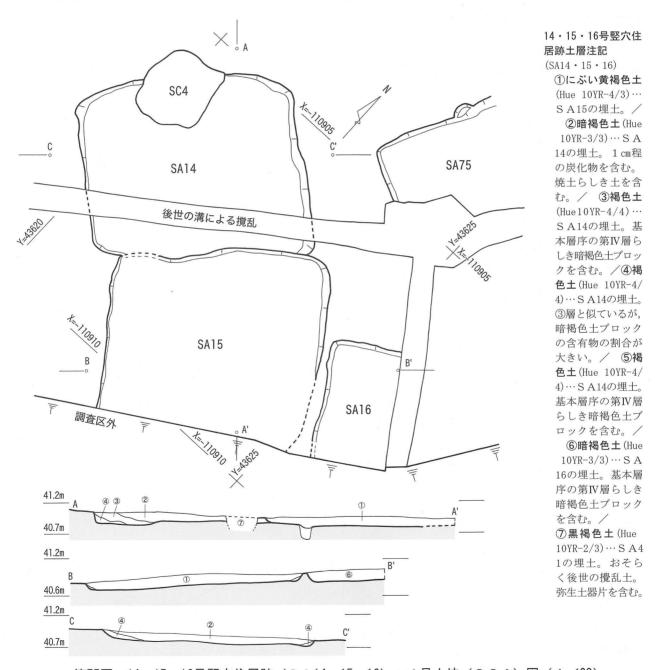


第74図 15号竪穴住居跡 (SA15) 出土遺物 (1/4・1/2)

壺である。449は櫛描波状文をもつ二重口縁壺である。450は頸部径の小さい口縁部で、直線的に開く形状をなす。451は手捏土器である。丸底の鉢形を呈し、全体的に斜方向に指ナデを施している。452は甕である。頸部で明瞭に屈曲する口縁部形態A類で、外面に斜方向のハケ目を施す。453は砂岩製の敲石である。直方体状礫の一方の端部が欠損しているが、残ったもう一方の端部に敲打痕が認められる。454は凝灰岩製の砥石である。片面が欠損しており砥面が1面のみであるが、本来IA類の柱状であったと推察される。

16号竪穴住居跡 (SA16・第75図)

遺構: A-3 群南側, O22グリッド南側で, 南側と東側は後世の造成で消失しており, 南辺はSA15, 北辺は後世の配水管埋設溝によって切られている。検出された部分は, 西辺と南辺の一部が残っており,



第75図 14·15·16号竪穴住居跡 (SA14·15·16) · 4号土坑 (SC4) 図 (1/60)

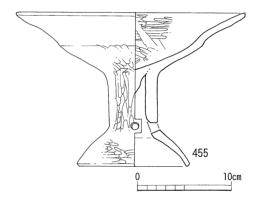
平面形態が方形もしくは長方形であることがわかる。埋土は、弥生時代包含層である基本層序の第IV層と類似した単一層で、土坑の可能性もある。

4号土坑 (SC4・第75図・第76図-455)

遺構: B-1 群北側,M22グリッド北西側で,SA28を切る形で検出された。長軸約2.5m・短軸約0.8mの不正楕円形で深さは約50cm以上と深い。埋土状況からSA28の埋まった後に掘られていることがわかる。

遺物: 4点出土したが図化は455のみ行った。455は高坏である。屈曲点はあるが明瞭ではなく、緩やかに外反する坏部形態C類をもつ。脚部は内湾しながら立ち上がる裾部と直立する柱部の脚部形態C類

をもつ。図化していない3点は甕の口縁部~胴部片・ 高坏の脚部・鉢である。甕は凹面状にくぼむ口唇部 形態A類に頸部で緩やかに屈曲する口縁部形態B類 をもつ。高坏の脚部は柱部の上半のみの出土で,全 形が推定できないが,直立気味ながら裾部に向かっ てわずかに開くタイプと考えられる。鉢は底部が尖 底気味の平底で,口縁部にむかって内湾しながら立 ち上がる鉢IC類である。



第76図 4号土坑(SC4) 出土遺物図(1/4)

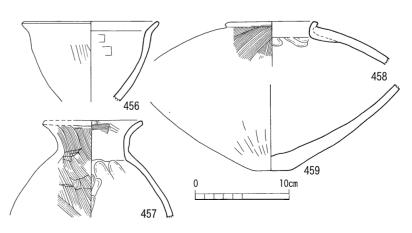
17号竪穴住居跡 (SA17・第78図)

遺構: A-3 群南側, N23グリッド北東側で検出された。西壁中央部をSA20に切られ, 東側を後世の造成によって削平されている。平面形態は, 東辺と南辺・北辺を基に考えると, 南北約4.3m・東西5 m程度の長方形と考えられる。遺物は僅かに弥生土器の細片が散見される程度である。

19号竪穴住居跡 (SA19・第78図・第77図-456~459)

遺構: A-3 群南側, N22グリッド南側で検出された。SA20を東辺で切り, 西壁付近が後世の掘削によって消失している。平面形態は, 東辺と南辺・北辺を基に考えると, 一辺約2.5mの方形もしくは長方形と推測される。遺物は傾斜上面の西壁側に集中している。

遺物:456は鉢である。頸部で屈曲し大きく外反する胴部形態B類をもつ鉢IB類である。457~459は壺である。457は頸部径が小さく,一度上に延びてから外反する口縁部形態D類をもち,外面にはハケ目を施す。458・459は同一個体と考えられ,458が口縁部~肩部,459が胴部~底部である。458は,口縁部形態A類やB類の口縁部が剥離



第77図 19号竪穴住居跡 (SA19) 出土遺物 (1/4)

して生じた形態とも考えられるが、無頸の口縁端部を折り返すことによって丸みのある口縁部を形成しているとも考えられる。外面には丁寧なハケ目が施されている。459は尖底気味の平底タイプの底部をもつ。

20号竪穴住居跡 (SA20・第79図)

遺構: A-3 群南側, N22グリッド南側で, 西側がSA19に切られ, 東側がSA17を切る形で検出された。消失部分が多く,全体の規模は不明であるが,検出状況から東西2.6m・南北1.4m程の小型の長方形を呈する。出土遺物はなく,埋土は炭化物を含むものの基本層序の第IV層と似た単一層である。遺構規模や埋土状況などから考えて,住居跡でなく土坑である可能性が高い。

25号竪穴住居跡 (SA25・第79・80図・第78図-460~465)

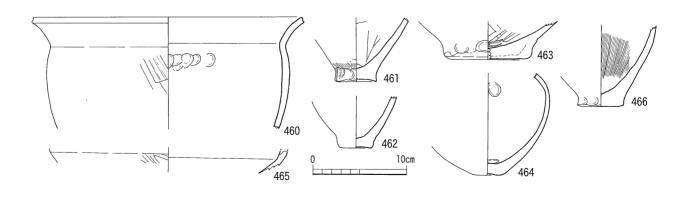
遺構: A-3 群南端部, N22グリッド南西側で, 南側がSA26を切る形で検出された。長軸2.5m・ 短軸2.1mで, 円形と隅丸方形の中間形態を呈する。遺物は遺構面全体から比較的高い密度で出土した。 規模の面から考えて, 住居跡ではなく土坑である可能性が高い。

遺物:460~461は甕である。460は凹面状に窪む口唇部形態A類・緩やかに「く」字に屈曲する口縁部形態B類・長形胴で最大径が胴部上部にある胴部形態C類の特徴をもつ。461は指ナデによってわずかに端部が張り出し、わずかに上底気味の底部形態B類である。462~464は壺である。462・463は大きさが異なるが、貼付円盤状の平底である。464は胴部~底部片である。偏球形胴の胴部形態C類・尖底気味の平底をもつ。465は鉢の一部か高坏の坏部の一部だと考えられる。外面に縦方向のミガキを施す。

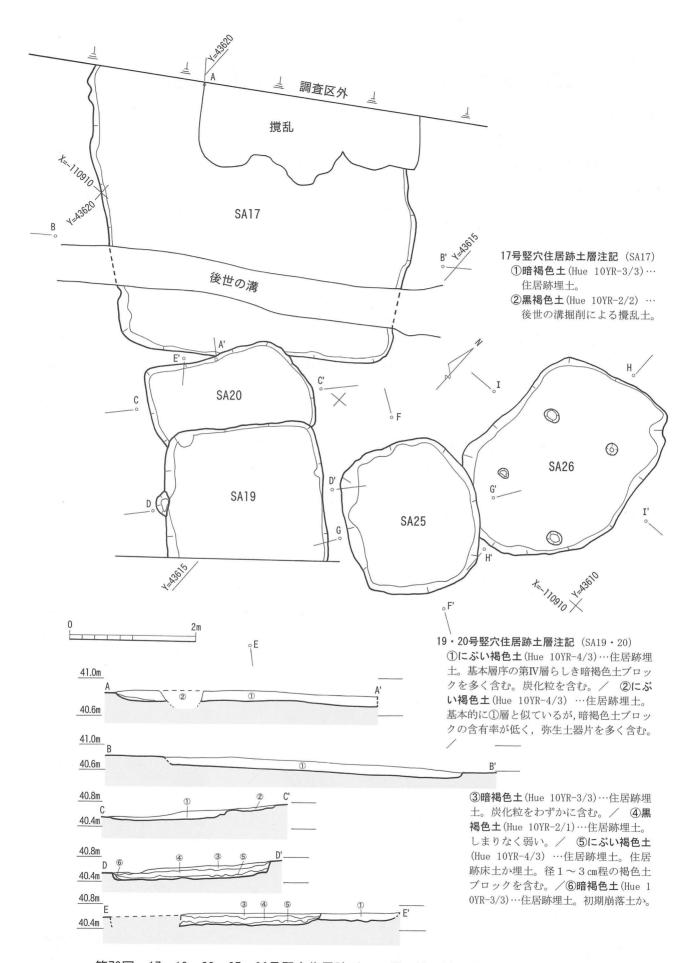
26号竪穴住居跡 (SA26・第79・80図・第78図-466)

遺構:A-3群南端部,N22グリッド南西側で,南側がSA25に切られる形で検出された。長軸3.5m・短軸2.4mで,円形と隅丸方形の中間形態を呈する。深さは $10\sim20$ cm程度と浅いが,四隅に柱穴をもつ。SA25同様,規模の面から土坑の可能性も考えられるが,4基の柱穴があることから住居跡であると判断した。

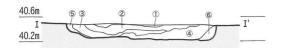
遺物:466は甕の底部である。指ナデによってわずかに張り出した端部をもつ平底で、底部形態D類をもつ。



第78図 25·26号竪穴住居跡 (SA25·26) 出土遺物図 (1/4)



第79図 17・19・20・25・26号竪穴住居跡 (SA17・19・20・25・26) 図 (1/60)

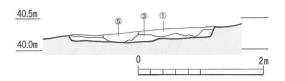




25号竪穴住居跡土層注記(SA25)

①黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…住居跡埋土。径1㎜程の黄褐色粒を含む。弥生土器片を含む。/ ②黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…住居跡埋土。黒色土ブロックを多く含む。弥生土器片を含む。/ ③黒褐色土(Hue 10YR-2/3)…住居跡埋土。1 cm以下の炭化物を多く含む。/ ④褐色土(Hue 10YR-4/6)…住居跡埋土か床土。2 cm程の褐色土のブロックを含む。5 mm程の炭化物を含む。/ ⑤褐色土(Hue 10YR-4/6)…住居跡埋土。かたくしまっている。/ ⑥暗褐色土(Hue 10YR-3/4)…褐色土をわずかに混入する。





26号竪穴住居跡土層注記(SA26)

①黒褐色± (Hue 10YR-2/3)…住居跡埋土。5 cm程の褐色土のブロックを含む。炭化物と弥生土器片を含む。/ ②褐色土 (Hue 10YR-4/6)…住居跡床土か埋土。炭化物をわずかに含む。/ ③暗褐色土 (Hue 10YR-3/3)…住居跡埋土か床土。基本層序の第 IV層らしき暗褐色土ブロックを多く含む。炭化粒を含む。/ ④褐色土 (Hue 10YR-4/6)…住居跡埋土か床土。②層と似ている。/ ⑤黒褐色土 (Hue 10YR-2/3)…おそらく後世の攪乱土。弥生土器片を含む。

第80図 25·26号竪穴住居跡(SA25·26)土層断面図(1/60)

(2) B群

Nグリッドラインより西側の一群である。群集状態によってさらに $B-1\sim B-3$ の小グループに細分できる。

①B-1群…B群の中でも最東部、X軸は22~25・Y軸はK~Nライン内に位置する。SA4~8・28~33・46~50・59~62の20軒から成る。

28号竪穴住居跡 (SA28・第82図・第81図-467~468)

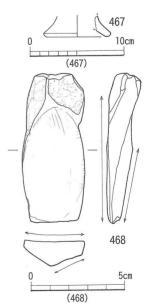
遺構: B-1 群北側 L22 グリッドとM22 グリッドの境界上で、SA29と並列する形で検出された。SC10 に切られており一部攪乱されているが、東西 3.6m・南北3.3m のおよそ方形をなす。遺物は東壁周辺に集中して出土した。

遺物:467は内外面に丁寧なナデを施しており、甕の脚台と考えられる。 468は砥石である。上から1/3程にくびれがあり、このくびれを境にして上方 には研磨痕が無い。砥面は凹面状にくぼむ。

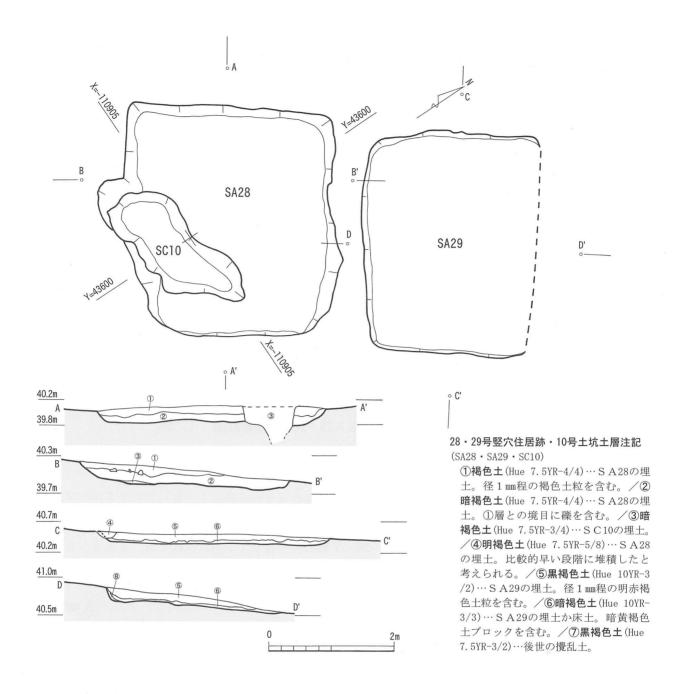
29号竪穴住居跡 (SA29・第82図・第83図-469~479)

遺構: B-1群北側, M22グリッド北西側で, SA28と並列する形で検出された。平面形態は, 傾斜上面の北東側は削平されて不明瞭であったが, 一辺約3.6mの方形または長方形と推測される。遺物は多少疎らではあるが南西側に集中している。

遺物: 469~470は壺である。 469は狭くなった頸部から直立した短い口縁

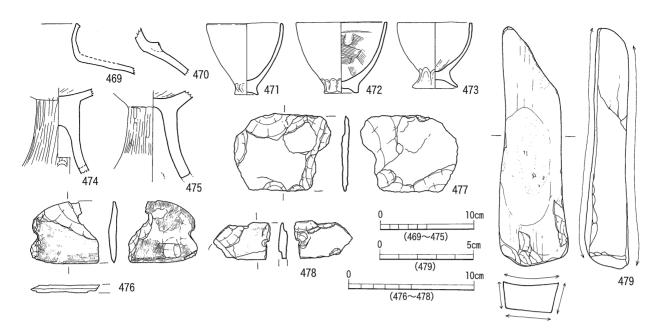


第81図 28号竪穴住居跡 検出(SA28) 出土遺物 (1/4・1/2)



第82図 28·29号竪穴住居跡 (SA28·29) ·10号土坑 (SC10) 図 (1/60)

部が延びる口縁部~肩部である。壺にしては珍しく外面に平行タタキを施す。470は頸部付近に斜位の連続刻文を施す三角状の貼付突帯を有する。471~473は鉢である。いずれも内湾しながら立ち上がる鉢I C類であるが,471・472は指ナデによって摘み出した上底気味の底部を有する。一方,473は脚台状の底部をもつタイプである。474・475は高坏である。いずれも欠損部分があり全形が推測しにくいが,比較的短くラッパ状に開く脚部形態B類であろう。476~478は石庖丁である。476は両端に抉りをもち,弧状の背部と直線状の刃部をもつ Π A類である。477は抉りや穿孔をもたない打製のIV類である。未製品または製作途上品とも考えられる。478は破片であるが,1か所の穿孔が認められる。479は砥石である。直方体を基調としているが,若干自然礫の名残を残している。4面に砥面があり柱状のI A類の範疇に入る。



第83図 29号竪穴住居跡 (SA29) 出土遺物図 (1/4・1/3・1/2)

10号土坑 (SC10・第82図)

遺構: B-1 群北側,L22グリッドとM22グリッドの境界上,SA28を切る形で検出された。長軸約 2.5m・短軸約0.9mの不正楕円形で深さは約60cm以上と深い。SA28の埋まった後に掘られている。

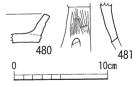
遺物:細片を中心に出土した。図化は行っていないが壺の底部が出土している。壺の底部は下半1/3 程残っており、平底の底部形態B類である。縦方向の粗いハケ目の後に底部付近に横位にタタキを施し ている。胴部形態は残存状況から長形胴と考えられる。

4号竪穴住居跡 (SA4・第85図・第84図-480~481)

遺構:B-1群北西側,L22グリッド北西側で,SA5と並列する形で検出された。平面形態は,傾斜上面の北東側は削平されて不明瞭であったが,遺構面は残っており,長軸3m・短軸1.5m-辺約3.6mの長方形である。遺物は

全面から疎らに出土している。調査時には竪穴住居跡として認識 していたが、規模や単一層の埋土から、土坑と考える方が妥当だ と思われる。

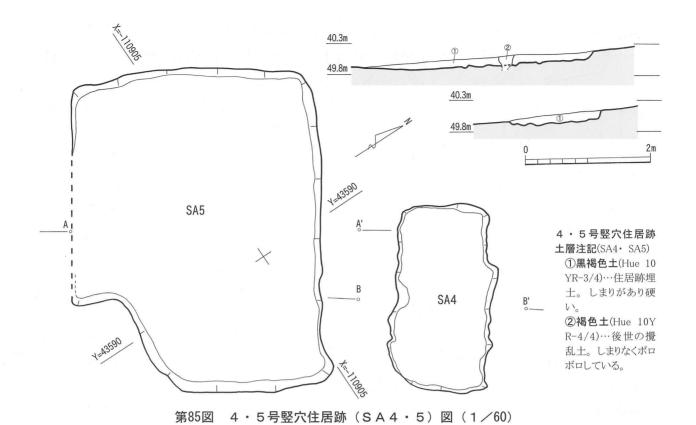
遺物:480~481は高坏である。480は坏部であり,一度屈曲し直立気味に立ち上がる坏部形態A類である。481は脚部片である。部分的で全形が不明であるが,短く開く脚部形態B類と考えられる。



第84図 4 号竪穴住居跡 (SA4)出土遺物図 (1/4)

5号竪穴住居跡 (SA5・第85図・第86図-482~495)

遺構: B-1群北西側,K22グリッド北東側で,SA4と並列する形で検出された。傾斜上面の北東側は削平されて不明瞭な部分があったが,平面形態は,長辺約5.2m・短辺約4mの長方形基調のプランであるが,南東コーナー部が $1.5m \times 1m$ ほど入り込む不正方形を呈する。遺物は遺構面全体から検出された。



第86図 5号竪穴住居跡(SA5)出土遺物図(1/4・1/2)

10cm

(482~494)

5cm

(495)

遺物:482は甕である。全体的に歪であり、緩やかにS字に屈曲する口縁部、口縁部から緩やかに底部まで窄む胴部、張り出しのない平底の形態的特徴をもつ。483~487は壺である。483は頸部から口縁部にかけて緩やかにS字状に外反する口縁部形態D類である。485は壺の胴部である。残存する形状より、胴部は算盤玉のような器形を呈していると考えられる。斜位の連続刻文をもつ方形突帯を有し、突帯の下には連続する竹管文と線刻による三角形の幾何学文を施す。486は壺の胴部片であり、斜方向のハケ目の後に線刻による直線的な文様を施している。489~492は高坏である。489・490は坏部で、一度明瞭に屈曲し、わずかに外反するが直立気味に立ち上がる坏部形態A類とB類の中間形態である。491・492は脚部で、短くラッパ状に開く脚部形態B類である。493・494は器台である。493は受部であり、二重口縁壺のように拡張した口縁帯に丁寧な凹線文を施している。494は肥厚させた口縁部に凹線文、脚柱部に2段の円形透かしを施す。器形は寸胴タイプで、受部の方が裾部より広い。495は砥石である。

30号竪穴住居跡(SA30・第87図・第88図-496~499)

遺構: B-1 群東側,L23グリッド北西側で,SA32に切られ,SA31を切る形で検出された。一部 攪乱され不明であるが,平面形態は一辺2.5m前後の方形を呈する。北隅部がピットによって切られて いるが,このピットは遺構より後の時代のものと考えられる。規模や主軸が周りで切り合う $SA31\cdot32\cdot33$ と似ており,この4 軒は近い時期に構築された可能性がある。遺物は疎らではあるが東側に集中する。

遺物:496は自然礫を素材とした砥石である。砥面は1面であり、全面に光沢のあるc種研磨痕が確認され、斜方向のb種研磨痕(擦痕状研磨痕)がところどころで確認できる。下方の端部に切り込み状の痕跡がある。これが研磨工程に付随するものか砥石成形行程に付随するものなのか不明である。497は甕である。緩やかにS字状に屈曲する口縁部形態C類である。498は壺である。小さく屈曲する口縁部形態C類である。499は鉢である。浅いU字状を呈する鉢IC類である。

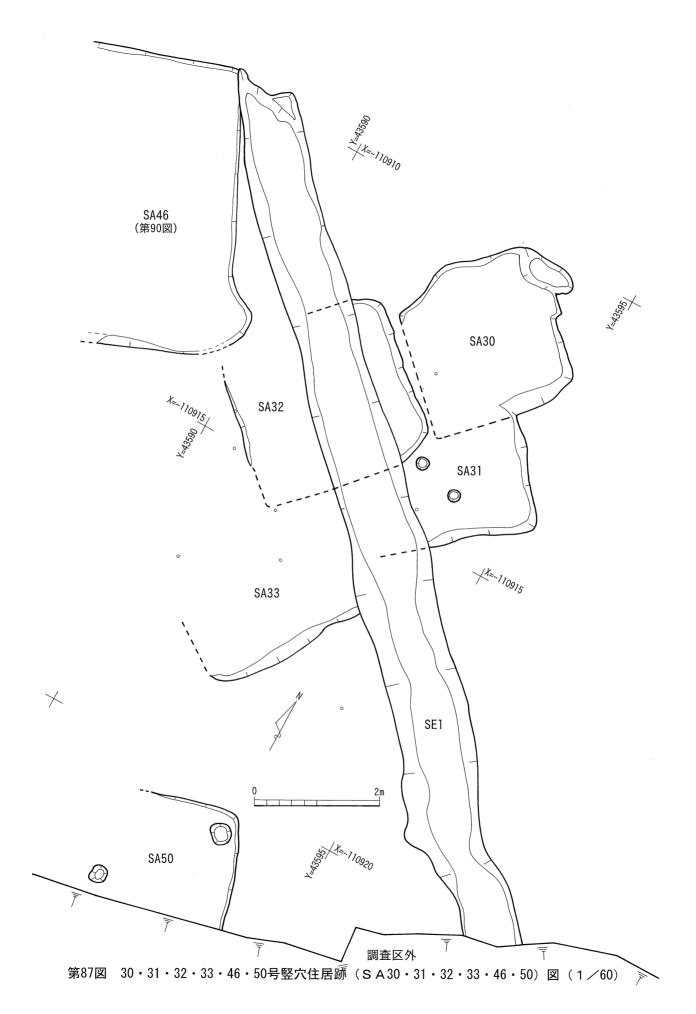
31号竪穴住居跡 (SA31・第87図)

遺構: B-1 群東側,L23グリッド北西側で,SE1 と $SA30 \cdot 32$ に切られる形で検出された。平面形態は,大部分が削平され正確に把握できないが,検出された南壁と東壁の一部から,一辺 2 m以上の方形もしくは長方形と推測される。ピットが 2 基検出されたが,SA31 との関係は不明である。遺物は出土しなかった。

32号竪穴住居跡 (SA32・第87図・第88図-500~501)

遺構: B-1 群東側,L23グリッド北西側で,SE1 に切られ, $SA30\cdot 31$ を切る形で検出された。 上部の大部分が削平されていたが,朧気ながら遺構の輪郭が検出できた。この輪郭から考えると,平面 形態は,一辺2.7m前後の方形である。遺物はわずかに北壁あたりで出土した。

遺物:500・501は磨製石鏃である。両方とも緑色頁岩製で、基部形態は凹基である。500は砲弾形・501は三角形を呈する。501は粗い剥離を施した後に研磨によって仕上げを行っている。さらに本遺跡の50%近くの磨製石鏃で確認されているように、先端が欠損している。



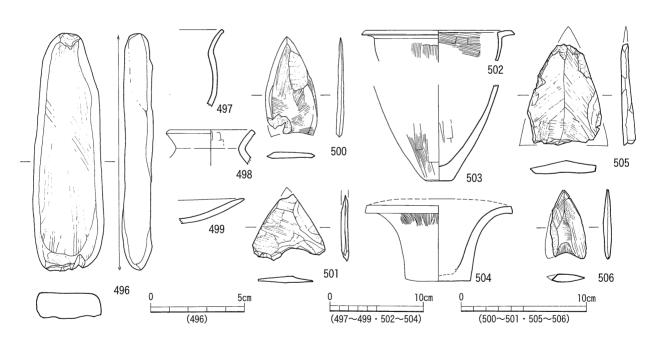
33号竪穴住居跡 (SA33・第87図・第88図-502~506)

遺構: B-1 群東側,L23グリッド西側で,SE1 に切られ, $SA31 \cdot 32$ と切り合う形で検出された。 上部が削平され平面形態・規模など不明であるが,東壁が一部残っており, $SA30 \cdot 31 \cdot 32$ と同じような主軸をもつことがわかる。さらに東壁は南側でコーナー部分らしきカーブを描く。このことより方形もしくは長方形の可能性がある。遺物はわずかではあるが東壁付近に集中している。

遺物:502はL字に曲がる甕の口縁部である。外面は縦方向のハケ目を施す。503は壺の底部である。 尖底に近い平底で、長形胴の胴部形態A類である。504は、幅の広い平底で、大きく緩やかに外反する 口縁部をもつ鉢である。上下反対で蓋の可能性もある。505・506は頁岩製の磨製石鏃である。505は切っ 先・両翼の3方が欠損しているが、中央に鎬をもつ平基タイプである。本遺跡で平基タイプは少なく、 42~45など比較的大型のものに集中する傾向がある。

50号竪穴住居跡 (SA50・第87図)

遺構: B-1 群東端,L24グリッド北西側で検出された。遺構の大部分が後世の削平とSA6 に切られ,北東部コーナー付近のみの検出であった。正確な規模や平面形態は不明であるが,検出状況から考えて,一辺1.9m以上の方形または長方形と推測される。遺物は出土しなかった。

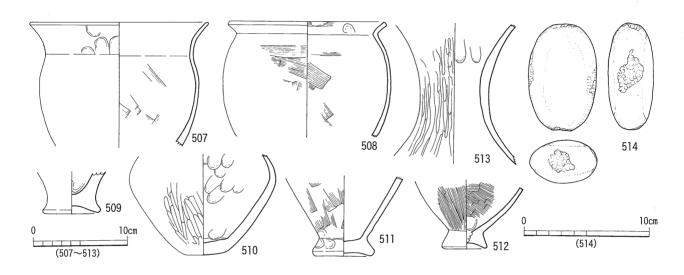


第88図 30·32·33号竪穴住居跡 (SA30·32·33) 出土遺物図 (1/2·1/4·2/3)

46号竪穴住居跡 (SA46・第90図・第89図-507~514)

遺構: B-1群北西側,K23グリッド西側で,SE1に切られ, $SA47 \cdot 59$ と切り合う形で検出された。部分的に攪乱され検出状況が不明なところがあるが,北壁・東壁・南壁の大部分が残っており,一辺約4.7m前後の方形とわかる。遺物は攪乱の少ない東側に集中する。この周辺B-1群では最大級の床面積23.7㎡を測る。

遺物:507~509は甕である。507はS字状に屈曲した口縁部形態C類である。508は短い口縁部が「く」字状に屈曲する口縁部形態A類である。509は上底で端部が張り出す口縁部形態B類である。510・511は壺の底部である。510は平底の底部形態B類で、偏球胴で胴部形態C類である。511は底部で細く窄まった上底の脚台状底部をもつ。512は鉢である。底部は脚台状の上底の底部形態A類で、内湾しながら立ち上がる胴部形態C類をもつ鉢IC類である。513は器台である。受部と裾部の両端が欠損しており、全形が把握しにくいが、ほぼ上下対象の形状を呈すると考えられる。514は砂岩製の敲石である。上下両端と両側面中央部の4カ所に敲打痕が認められる。

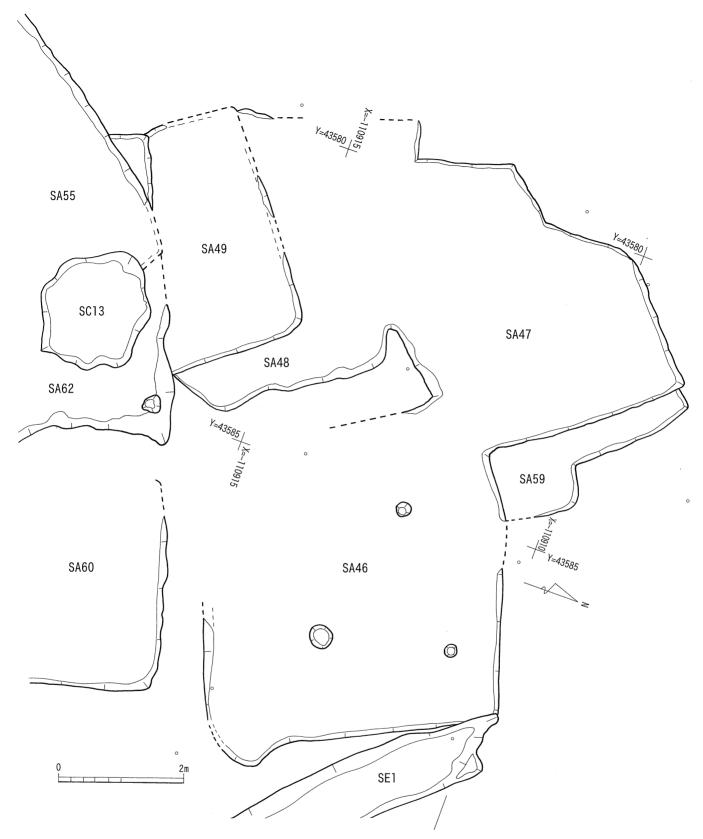


第89図 46号竪穴住居跡(SA46)出土遺物図(1/4・1/3)

47号竪穴住居跡 (SA47・第90図・第91図―515~528)

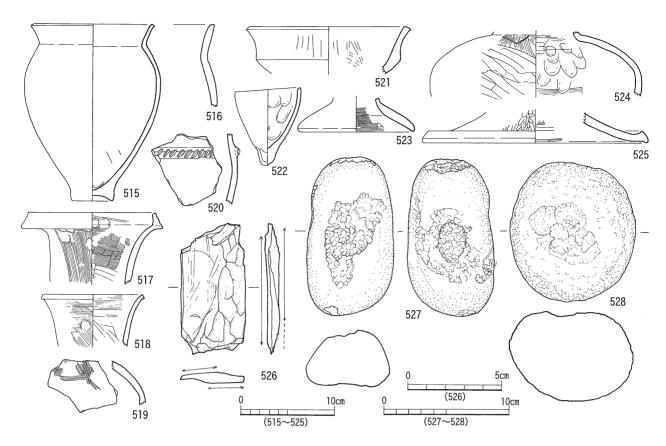
遺構:B-1群北西側, K22グリッドとK23グリッドの境界付近で, SA59を切り, SA46・48と切り合う形で検出された。他の住居跡より少し傾斜上面だったので,上面削平が著しく,不明瞭な検出状態であった。平面形態は,東西4.8m・南北3.8mの長方形基調であるが,北西コーナー部が東西2m×南北1m程入り込む不正方形を呈する。遺物は南東隅部付近に集中している。

遺物:515~516・520は甕である。515は平坦状の口唇部形態 B 類、口縁部が緩やかに「く」字状に屈曲する口縁部形態 A 類、長形胴で最大径が上部にある胴部形態 C 類、上底で端部が張り出さない底部形態 C 類をもつ甕 II 類である。516は緩やかに「く」字状に屈曲し、上方に少し延びた口縁部形態 B 類と C 類の中間形態をもつ。517~519・524は壺である。517は二重口縁をもつ口縁部形態 A 類、518は長頸と直口縁の中間形で、緩やかに外反する口縁部である。519は壺の肩部である。外面に沈線文と押圧文が施されている。意図的な施文と判断することは難しく、むしろ製作上偶発的に付着した痕跡だと考えられる。524は頸部に「U」字状のヘラ描き文が施されている。形状は肩部が張っており、偏球形の胴部をもつと考えられる。522は鉢と分類したが、底部は蒲鉾形を呈し、底部というよりも取っ手という解釈もできる。釣鐘形土製品としておく。521・523は高坏である。521は一度屈曲してわずかに外反しながら直立気味に立ち上がる坏部形態 A 類と B 類の中間形態をもつ。523は内湾しながら立ち上がる裾部であり、脚部形態 C 類に伴うことが多い。 S A 47の遺物群を概観して、この裾部だけが新しい様相を呈する。出土位置も比較的高位にあり、流れ込みの可能性がある。525は器台の裾部である。526は頁岩



第90図 46・47・48・49・59・60・62号竪穴住居跡(SA46・47・48・49・59・60・62)・1号溝状遺構(SE1)図(1/60)

製の砥石である。剥落・剥離が激しいが、両側縁が平行であることから I B類の板状砥石であった可能性がある。砥面は表裏 2 面あり、部分的に縦と斜方向の線状痕をもつ。527は凝灰岩製の敲石である。上下両端、及び表裏面中心部に敲打痕が集中し、凹面を形成しており、凹石の用途も兼ねている。528は凝灰岩製の凹石であり、中心部に敲打痕が集中している。

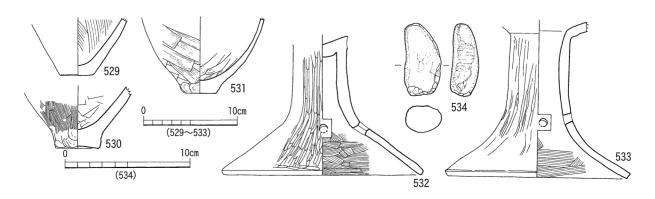


第91図 47号竪穴住居跡 (SA47) 出土遺物図 (1/4・1/2・1/3)

48号竪穴住居跡 (SA48・第90図・第92図-529~534)

遺構: B-1 群北西側,K23グリッドの北西隅付近, $SA47 \cdot 49$ に切られる形で検出された。平面形態は,削平された不明な部分が多くあるが,検出された部分から考えて,南北 $4.3m \cdot$ 東西3.5mの長方形を呈する。遺物は遺構面から疎らに出土した。

遺物:529~531は壺の底部である。529は平底の底部形態B類,530は円盤状平底付き,531は平底とレンズ状の中間形態をもつ。532・533は高坏の脚部であり、細長くラッパ状に開く脚部形態A類である。533はやや柱部が太い特徴をもつ。534は砂岩製で、側面に磨痕、下端部に敲打痕をもつ磨石と敲石の兼用品である。



第92図 48号竪穴住居跡 (SA48) 出土遺物図 (1/4·1/3)

49号竪穴住居跡 (SA49・第90図)

遺構: B-1群北西側,K23グリッドの北西隅付近,SA62に切られる形で検出された。平面形態は,約1/2の検出状況ではあるが,東辺や北辺から一辺3.8m前後の方形と考えられる。遺物は出土しなかった。

59号竪穴住居跡 (SA59・第90図)

遺構: B-1 群北西側,K22グリッドとK23グリッドの境界付近, $SA46\cdot 47$ に切られる形で検出された。全体の平面形態や規模は不明であるが,東辺が東西 $2m\cdot$ 南北0.5m程入り込む不正方形を呈する。遺物は壁際から弥生土器の細片が出土した。

6号竪穴住居跡 (SA6・第94図)

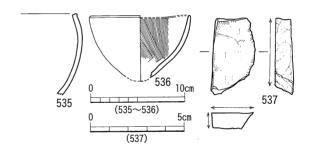
遺構: B-1 群南側, 23 ラインと L ラインの交点付近, SA7 を切る形で検出された。 SA60 とは並列関係にある。南側が傾斜により消失しているが、平面形態は、一辺約3.2m前後の方形もしくは長方形である。

7号竪穴住居跡(SA7・第94図・第93図-535~537)

遺構: B-1 群南側, K23グリッドの西側, $SA62 \cdot SA8$ に切られ, $SA61 \cdot SA6$ を切る形で検出された。平面形態は、切り合いにより攪乱が著

しいが、東辺と南辺の残存状態から一辺4.2mの 方形もしくは長方形と考えられる。

遺物:535~536は鉢である。535は内湾しながら立ち上がる口縁部形態C類をもつ。536は尖底の底部形態D類、内湾しながら立ち上がる口縁部形態C類をもつ鉢IC類である。537は砥石であり、本来板状のIB類であったものが欠損したものと考えられる。砥面は全面に光沢状研磨痕が残るが、周縁に擦痕状研磨痕も確認できる。



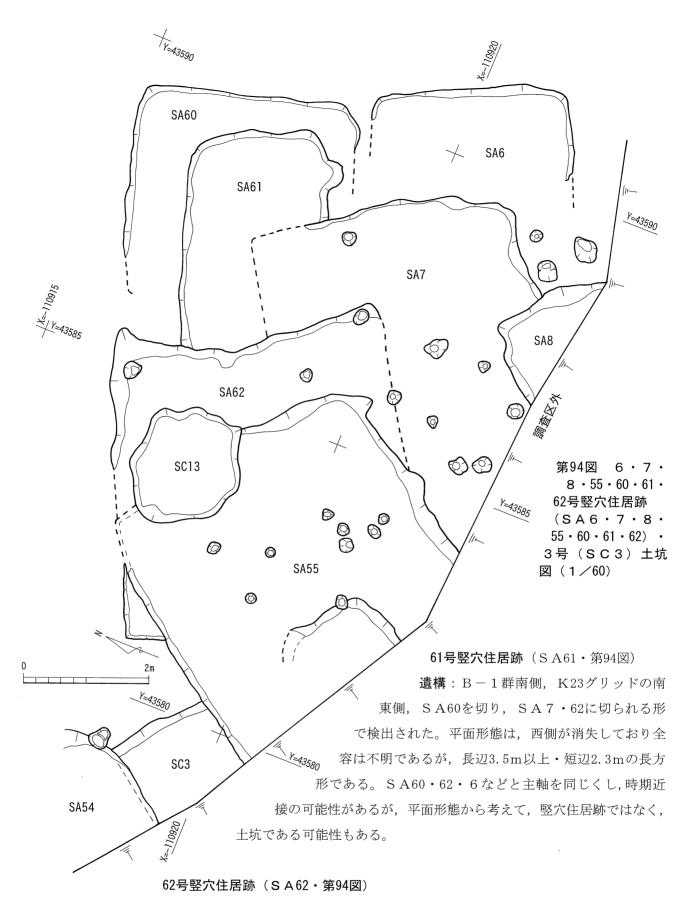
第93図 7号竪穴住居跡(SA7) 出土遺物図(1/4・1/2)

8号竪穴住居跡(SA8・第94図)

遺構: B-1 群南側,K24グリッドの北側,SA7 を切る形で検出された。大部分が後世の造成のため削平されており,北側コーナー部分のみの検出である。平面形態は方形もしくは長方形と考えられる。

60号竪穴住居跡 (SA60・第94図)

遺構: B-1 群南側,K23グリッドの東側,SA61に切られる形で検出された。平面形態は,切り合いの攪乱のため南側が不明瞭であるが,一辺3.5mの方形と推測される。SA6やSA62・SA61などとは主軸方向に類似性が認められ,近い時期に構築された可能性が考えられる。



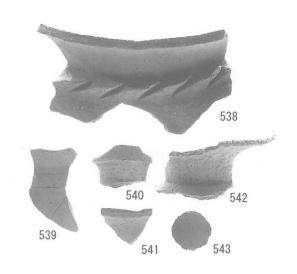
遺構: B-1 群南側, K23グリッドの西側, SA7・61を切り, SA55・SC13に切られる形で検出された。部分的に切り合いによる攪乱が見られるが, 平面形態は東西約4.9m・南北4.4mの長方形を呈する。推定床面積21.7㎡と本遺跡では比較的大型の竪穴住居跡と考えられる。遺物は弥生土器の細片が数点出土したのみである。

②B-2群…B群の中でも南西部、X軸は21~25・Y軸は $I \sim L$ ライン内に位置する。 $SA22 \sim 24 \cdot 51$ ~58・89の12軒と $SC1 \sim 3 \cdot 8 \cdot 12 \cdot 17 \cdot 18 \cdot 20$ の8基の土坑から成る。

55号竪穴住居跡 (SA55・第94図・写真図版 3-5 38~544)

遺構:B-2群東側,K23グリッドの西側,SC3・SC13に切られ,SA62・SC3を切る形で検出された。平面形態は、南側が造成によって削平されており全容がわからないが、一辺4.7m前後の方形を呈する。推定床面積約22㎡と本遺跡ではSA62などと並んで比較的大型の竪穴住居跡と考えられる。遺物は遺構面全体から出土した。

遺物:538・539は甕である。538は直径35.8cmと 大型甕の口縁部であり、緩やかに大きく開く形態 をもつ。頸部下には斜位の刻目文をもつ三角形貼 付突帯を有する。全体的に外面が赤化しており、 赤色を意識した土器である可能性がある。539は緩 やかにS字を描きながら屈曲する口縁部形態C類 である。540~542は壺である。540は二重口縁壺の 一種である。二次口縁部を屈曲させるというより も拡張しているという印象を受ける。二次口縁部 は風化のためか、文様は確認できなかった。541は 大きく開く口縁部形態B類であり、口唇部には凹 線文らしき文様が確認できる。542は現況では大き



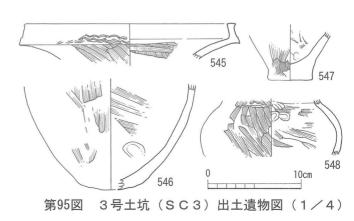


写真図版 3 55号竪穴住居跡(SA55)出土遺物

3号土坑 (SC3・第94図・第95図-545 ~548・写真図版4-549~558)

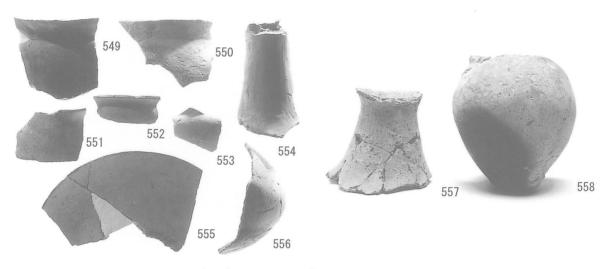
遺構: B-2 群東側, 24 ラインと K ラインの交点付近, SA55 と SA54 に切られる形で検出された。規模は不明である。竪穴住居跡の可能性もある。狭い面積ながらも多くの遺物が出土した。

遺物:545~546は壺である。545は直立 気味に立ち上がる二次口縁部には櫛描波状



文を施している口縁部形態 A 類である。546は底部であり、平底と丸底との中間形態の底部をもち、やや長形胴の胴部をもつ。547は甕の底部である。平底で張り出しのない底部形態 E 類である。548は壺の類部~胴部である。549・552は甕の口縁部である。内外面に丁寧なハケ目調整を施している。549は頸部で「く」字状に曲がる口縁部形態 A 類で,口縁部が上方に大きく伸びるタイプである。552は短く明瞭に「く」字状に屈曲する口縁部形態 A 類である。550・551は壺の口縁部である。550は直立気味に立ち上がる短頸の口縁部形態 E 類をもつ。551はわずかに外反するが直立気味に立ち上がる短頸タイプで、口縁部形態 C 類の要素をもつ E 類である。553は頸部中位で S 字状に屈曲する鉢 I A 類である。554は高坏の脚部である。直立気味の脚柱部から裾部にかけて急激に開く。555は器台である。556は壺の胴部~底部である。破片なので全形が推測でしか理解できないが、おそらく中央部より上に最大径がくる球形胴のタイプである。外面に縦方向のミガキを施す。557は高坏の脚部である。他の高坏は比較的含有物の少ない土で製作するのであるが、557の胎土は 3 mmほどの石粒を多く含む。558は壺の胴部~底部付近である。レンズ状の底部形態 C 類にやや縦長の偏球形胴をもつ。

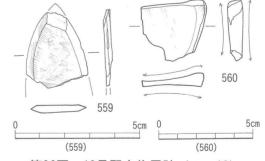
13号土坑 (SC13・第94図・第96図-559~560)



写真図版4 3号土坑(SC3)出土遺物

遺構: B-1 群南側, K23グリッドの西側, SA55 とSA62に切られる形で検出された。規模は一辺170cm の隅丸方形である。遺物は石器のみ図化を行っていが, 表面にタタキを施す甕の口縁部片1個体分, 壺の口縁部片3個体分, 壺の底部片2個体分, 器台の裾部片2個体分の土器も出土した。

遺物:559は緑色頁岩製の磨製石鏃である。基部と先端部が欠損している。560は頁岩製の砥石である。表裏2面の凹面にくぼんだ砥面が確認される。



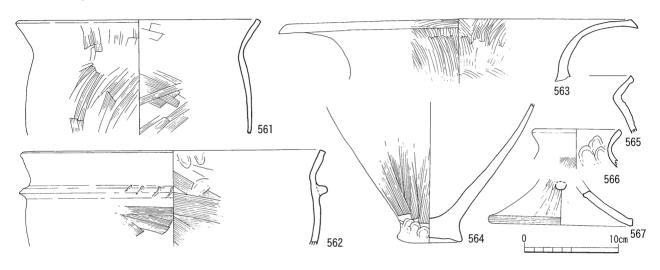
第96図 13号竪穴住居跡 (SA13) 出土遺物図 (2/3・1/2)

51号竪穴住居跡 (SA51・第99図・第97図-561~567)

遺構:B-2群西部, J23グリッドの北西部, SA52·SC9に切られる形で検出された。平面形態

は、南側が1/4程後世の造成によって削平されているが、東辺と北辺が直交することから、一辺2.8 m以上の方形もしくは長方形と推定できる。遺物は数か所に集中しながら出土した。

遺物: $561\sim562\cdot564\cdot565$ は甕である。561は緩やかなS字状に屈曲する口縁部形態C類である。562はわずかに内湾しながら立ち上がり,緩やかに「く」字状に屈曲する口縁部形態B類である。さらに頸部には斜位の連続刻目文をもつ台形状の貼付突帯を有する。565は大きく「く」字状に屈曲する口縁部形態A類である。 $563\cdot567$ は高坏である。563は一度坏部の中位で明瞭に屈曲し,大きく外反しながら立ち上がる。

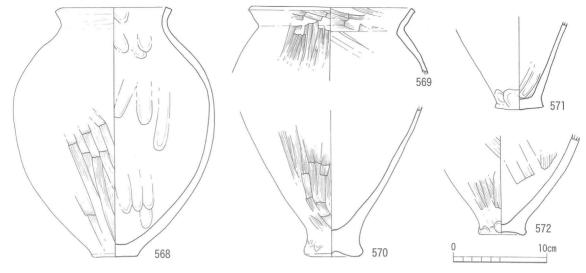


第97図 51号竪穴住居跡 (SA51) 出土遺物図 (1/4)

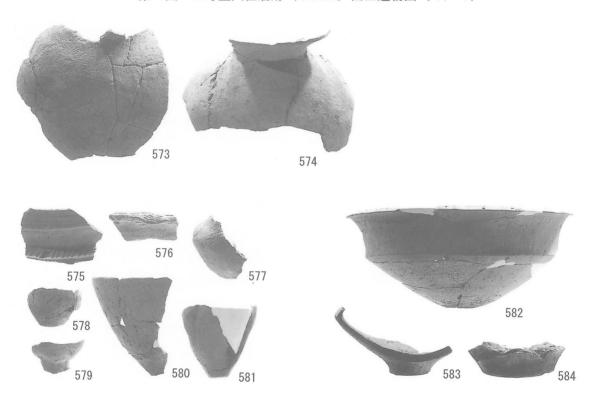
52号竪穴住居跡(SA52・第99図・第98図-568~572・写真図版 5 -573~584)

遺構: B-2群中央部,J23グリッドの中央部,SA51・SC9を切り,SA54に切られる形で検出された。南側が 1/4程後世の造成によって削平されているが,一辺3.2m前後の方形を呈することがわかる。ただし,方形といっても各辺が直線的でなく歪んだ方形である。遺物は南コーナー部に集中する。

遺物:568・572は壺である。568は短く緩やかに外反する口縁部形態D類,長形胴の胴部形態A類,平底の底部形態B類をもつ壺VI類である。572はやや上底気味の底部をもつ。569・570は甕である。569は口縁部であり,平面状の口唇部形態A類,大きく明瞭に「く」字状に曲がる口縁部形態A類をもつ。570は底部であり,上底でわずかに端部の張り出しをもつ底部形態B類をもつ。571は鉢である。平底で外傾しながら立ち上がる鉢IC類である。573・574は壺である。574は小さく外反する口縁部形態C類である。575・576は壺である。575 は複合口縁的に拡張した口縁帯に凹線文を施し,頸部に斜位の連続刻目文を施す1条の三角状貼付突帯を有する。576は大きく開く口縁部形態B類で,拡張した口唇部には凹線文を施す。この凹線文は瀬戸内系土器の特徴の一つともいえるが,576の凹線文は粗雑で瀬戸内地方から直接の搬入品とは考えにくい。577は壺である。胴部中位上段で大きく屈曲し,算盤玉のような形状を呈すると考えられる。572・573は鉢であり,わずかに内湾しながら立ち上がる口縁部~胴部,指ナデによってわずかに張り出す底部をもつ鉢IC類である。578と579は手捏土器である。582は高坏であり,一度中位で明瞭に屈曲し,外反しながら立ち上がる坏部形態B類である。583・584は壺の底部である。583は円盤状平底をもち,胴部で大きく屈曲する算盤玉のような形状を呈すると考えられる。



第98図 52号竪穴住居跡 (SA52) 出土遺物図 (1/4)

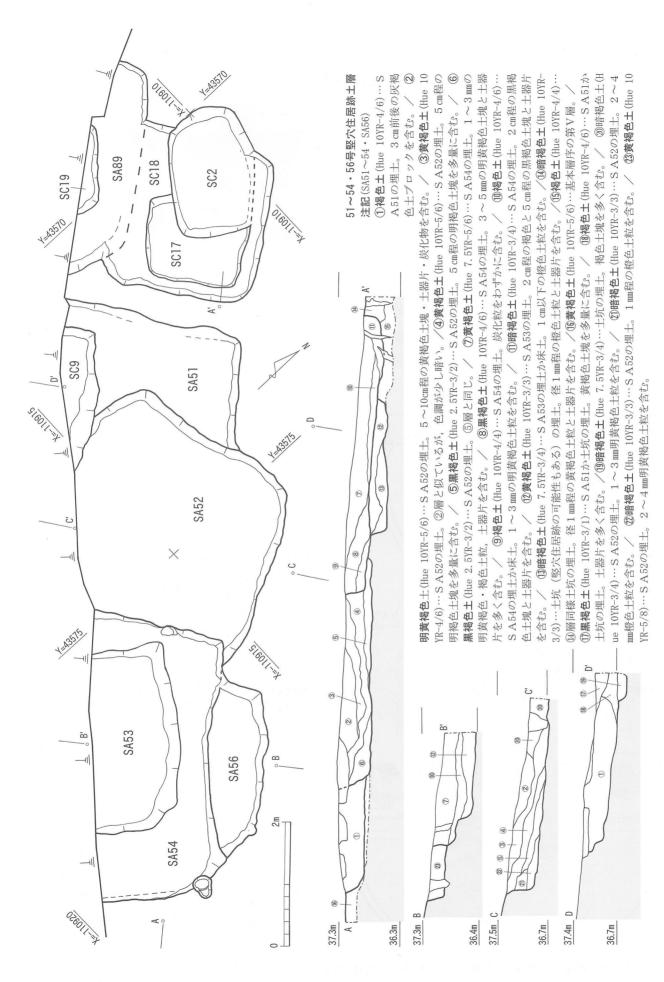


写真図版 5 52号竪穴住居跡 (SA52) 出土遺物

53号竪穴住居跡 (SA53・第99図・写真図版 6-585~589)

遺構: B-2群東側,J23グリッドの中央部,SA54に切られる形で検出された。平面図を見るとSA53が切っているように見えるが,実際はSA53の上にSA54が構築されたと考えられる。南西側が 1 / 2ほど後世の造成のため削平されており,正確な平面形態は不明であるが,一辺2.9m前後の方形もしくは長方形を呈すると考えられる。全体の形態が検出できなかったため,土坑の可能性も考えられる。

遺物:585は壺の頸部~胴部であり、頸部で窄まり、胴部上位で最大径をもつ形状と考えられる。586は甕の口縁部である。内湾しながら立ち上がる口縁部で、頸部で明瞭に「く」字状に屈曲する甕 I 類である。587は貼付円盤状の平底をもつ底部である。588は小型甕である。頸部で明瞭に「く」字状に屈曲する口縁部形態 A 類に似ており、外面に丁寧なミガキを施す。589は壺か甕の胴部である。内外面にハ



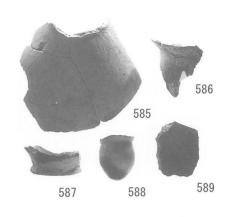
51・52・53・54・56・89号竪穴住居跡(SA51・52・53・54・56・89)・2・9・17・18・19号土坑(SC2・9・17・18・19)図(1/60) 第99図

ケ目と工具ナデを施した後,外面に斜方向に3条の液体が流れたような痕跡が確認される。整理段階に付着したとは考えにくく,土器制作時または使用時に付着したものと考えられる。原因については不明である。

54号竪穴住居跡

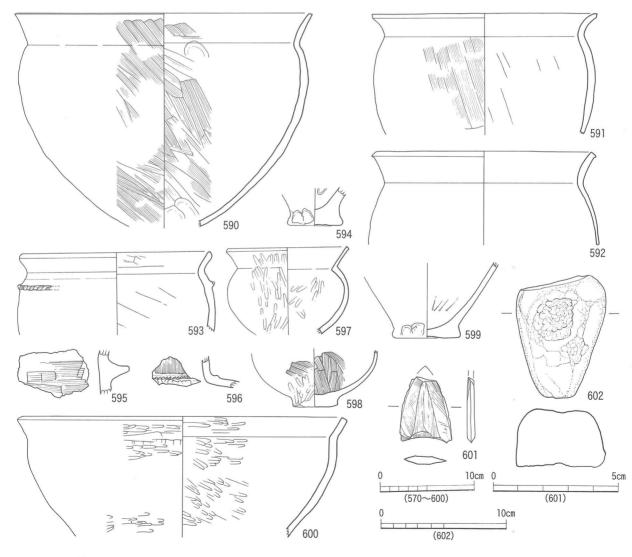
(SA54・第99図・第100図-590~602)

遺構: B-2群東側、J23グリッドの南東側、SA53に切られ、 $SA56 \cdot SA52 \cdot SC3$ を切る形で検出された。しかし、土層などの検討の結果、SA53はSA54が切ったもので、SA54の床面下のSA53が検出されたものであると判断した。南西側が1/2ほど後世の造成のため削平されており、正確な平面形態は不明



写真図版 6 53号竪穴住居跡 (SA53)出土遺物

であるが、一辺4.3m前後の方形もしくは長方形を呈すると考えられる。遺物は全面で出土したが、特に北コーナー付近の壁際に集中している。



第100図 54号竪穴住居跡 (SA54) 出土遺物図 (1/4・2/3・1/3)